

東日本リズム演劇会議機関誌

東リ演

戯曲 “真土村一撥” 黒沢 参吉

東リ演の仲間へ

西リ演議長 岩田直二

観客のためにといいながら

劇団未来 和田澄子

廣島からの便り

劇団月曜会 土屋清

観客つくりと舞台つくり

—第3回山形県勤労者演劇祭に参加して—

黒沢 参吉

東西南北

創造を軸にした連帯をめぐつて

山村金平

3

1966年5月

西北 東南

A 機関誌「東リ演」も

三号発刊の危機はのり
きたといえそうだ。

Z その危機がなくなつ
たのは同慶のいたりだ
が、手ばなしの楽観は

A できないだろう。

Z しかし、いくつかの集団から、この機関
誌を學習の資料にしているとか、地域演劇

Z 協議会の中へ拡大するというように、活用
してくれるところから、発行部数も僅かず
つだが伸びているよ。

A 一方で、二号二六頁で募集し各劇団にも
要請した「東リ演のひろば」へは一篇の応
募もなかつたし、活動予報告、舞台評とも
群馬中芸がくれただけというは淋しい。

A それは東リ演という組織の機関誌という

Z 観点より、演劇雑誌「東リ演」対讀者みた
いな関係が、そろそろなりたつてしまつて
るところに問題があるんだろうね。

Z 編集一発行の体制が、そういう関係をコ
ンクリート化しやすくなってしまっている。

三号のうち二号まで二百枚ちかい黒沢の戯
曲がのっているのも、客観的には議長の内
職じみた印象を与えるし、最低運営委員会
の共同編集に切りかえていかないと、機関
誌としてのひらき方がしにくいだろう。

A 運営委員会は年間三回位しか開けないし、
そこには任せきりでは隔月発行が保証できな
いだろう、という点で刊行所を独立させた

んだが、原稿は集まらないし、読まれたも
のへの批判も極く一部からしかかかってこ
ない傾向はあるね。

Z 変な云い方だが、まだ小さい若い集団が
積極的で、歴史もある大きい劇団ではこの
機関誌を活動の軸にすえていないのじやな
いか。組織的には東リ演係も複数で存在し
ているけれど、逆に担当という形で分化さ
れてしまっているようだな。

A 質的にも量的にも、目一杯のしどとを果
たしているんだし、或る程度やむを得ない
とおもうよ。三号までにあらわれた傾向に、
あまり神経質になるより、一年位は刊行所
の独走でやってみると、大きい問題点は総会
の中でもまとめて論議した方がいいというの
が僕の意見だ。

Z しつこいようだが、あまりのんきに考え
ていると財政の面でもほころびてくるぜ。
創刊号の誌代も完全には回収されていない
というし、二号にいたつては四月末現在で
送金してくれたのは、でくのほうの会だけ
じゃないか。

A うん、その点だけは切ないな。資金とい
っては創刊のとき若尾副議長に援助してい
ただいたものがあるだけ、こげついたら即
座にストップしなければならない状況のき
びしさは、全体が認識してほしいね。

A 刊行所の当面のビジョンとしては、発行
部を、どう固める
かが肝心だろう。

八〇〇部の回収七〇〇部という線がある。
差数の一〇〇部が寄贈、宣材、未収分だ。

八〇〇部の製作費が七〇円単価で五六、〇
〇〇円、七〇〇部の回収額が一三〇円単価
で九一、〇〇〇円。従つて余剰額が三五、〇
〇〇円で、郵送その他の雜費を一〇、〇
〇〇円みて一五、〇〇〇円を、編集費にあ
てられる、この状態に一日も早くもってい
きたいということだ。

A Z 固定七〇〇部はどうおさえているの。
東リ演内四〇〇部、西リ演内で一五〇部、
直接購読者五〇部、他に公演会場や書店等
で一〇〇部と見こんでいる。

Z 手堅い感じだけれど、東リ演加盟の劇団
が自分の地域一拠点で運動を拡大していく
ための機関誌「東リ演」という立脚点が、
弱いようだな。

A 刊行所に坐って考えていると、どうして
もそうなりやすい。四月初め議長が山形へ
もって行って、山形、八戸、鶴岡にそれぞ
れルートをつくってきました。

Z 動けば拡がるし、拡大の中から「東リ演」
の魅力も生まれるということだね。

A ああ。ゆくゆく西リ演との合同機関誌に
して一、〇〇〇部發行すれば・・・

Z おいおい、脱線す
る前にまず現行五〇
部を、どう固める

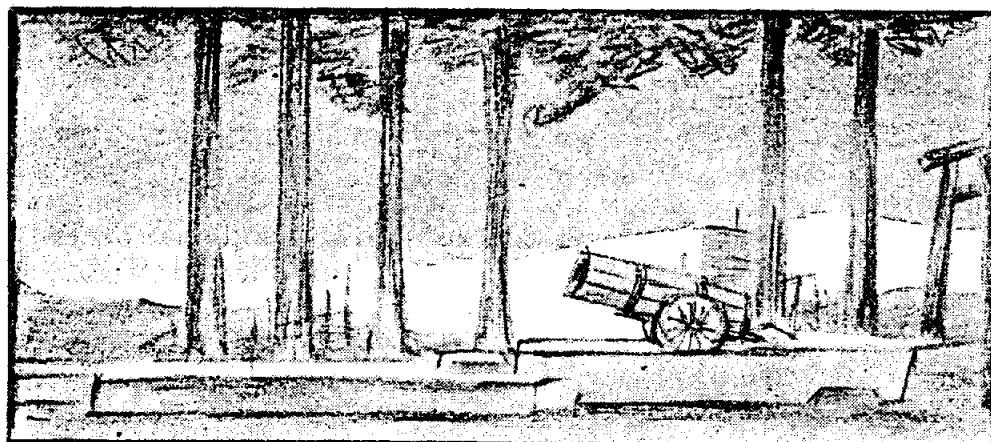
西北 東南

京浜協同劇団第13回公演台本

真土村一揆

—— 尊敬をこめて 私たちの おやじに ささげる ——

作・黒沢 参吉



第12景エスキース／内山千吉氏(名古屋演劇集団)作品より模写

場 割

登場人物

伊藤兵右衛門 のれん師（行商人）兼業農民

第一幕・天の巻

第一景 杭うち

真土村一本松附近

第二景 おくり火の夜

真土村松木邸

第三景 諸行無常の鐘

真土村東光寺

第四景 あほだら絆

真土村東光寺

第二幕・地の巻

第五景 逆潮

真土村松木邸

第六景 落月鳥

東京上等裁判所

第七景 かけ込訴え

横浜山崎屋
真土村冠彌右衛門宅

第八景 風乞

福田小左衛門

第九景 主と朝寝な

伊藤平兵衛

第一〇景 切火

伊東兼吉

第一景 長蛇を逸す

伊藤佐次兵衛

第二景 大砲

高橋新七

死斗

冠彌右衛門

第一四景 編笠の賦

ふみ

第三幕・人の巻

その妻

第九景 主と朝寝な

農民

第一〇景 切火

その息、博徒

第一景 長蛇を逸す

その女、のちに遊女

第二景 大砲

小学校教員兼業農民

第三景 死斗

農民

第一四景 編笠の賦

新倉嘉兵衛

石川儀左衛門	高橋重蔵	代言人
三上長五郎	田村訥	"
井上所左衛門	高野与七	啓次
伊東元良	小泉保直	
伊藤音五郎	立木裁判長	
冠九左衛門	戸部監獄署典獄	その長子
農民（老若男女）	横浜裁判所々長	
多勢	旅籠山崎屋主人	
大工		
村用掛補助、農民		
松木長右衛門	はじめ戸、区長、地主	
フミ	その妻	
道次郎	長右衛門二弟、はじめ小学校教員	巡査1
素三郎	長右衛門三弟	巡査2
小女	松木家使用人	女中
齊木市五郎	"	仲居
山明常吉	" 新平民	小嫂
三村司吉	他に	
平塚署巡查部長		
添田知道	巡查2	
塙谷俊雄	・車夫2	
代言人（弁護士）	・看守5名	

第一幕 天の巻

(1)

杭
う
ち

明治九年八月二日、午後。

真土村（東町）一本松米附近。

米「真土東町に老松一株あり、明王松と称えたり、樹令數百年と伝えられ、昭和二一年切倒したる時、直徑四・五米、周囲一四米、高さ三三米あり、大正の初め頃までは松樹の勢盛んにして、蒼として日陰を洩らさず、星をお蔭かりし」云々、また「この松の根元に大山不動の分身を祀りし小祠は、今なおこの松の根株の傍に存す」。

蟬しぐれ。

夕かたまけた油色の陽ざしの中、半裸の農民たちが舞台いっぱいに屯してゐる。午すぎから降つてわいた出来事に興奮しつづけた人々の上に、ようやく焦慮と疲労のいろが濃い。

笑ひ。

伊藤兵右衛門。

冠降松（舞台しも手に向つて）なんだア……帰つてござつたと。
農婦 やれやれ、やつと帰つてめえたか。
伊藤權兵衛 云ひてい放題いわれて、尻尾巻いてきたじゃなかんべ
な、証人の衆ら。
吉野弁蔵 そんなどったら、薪さつぼしょわせていま一邊行かせる
だ。
伊東富五郎 きかねいぞ、ふら、九左衛門さまだつて何だつてはア。
三上長五郎 おう、こっちやもう腹きめてんだわ。
伊東兼吉 押しかける、押しかける、よう。
長五郎 おうよ、これだけ皆での。
石川儀左衛門 へえ、静まんねいかい、まるで聞こえやしね。
峰松 帰つてきなつた……なに、兵さん、兵右衛門さんだと。
別の農婦 帰つてござつたのは、のれん師さまだと。
弁蔵 来ねえつたつていいのが。
儀左衛門 また、こんで脇やかしだ。
井上所左衛門 野郎も手前の田畠とられかけてるだ、色話もでなか
んべ。
權兵衛 どうしてどうして。あいつア手前のとむれえのときだつて
色話したさて、へえ棺桶から出できかねいからな。

兵右衛門 これだから真土の百姓はケツのケバまで抜かれる訳よ。
先祖伝來の田畠、松木のがやまにくすねらりようてのに、ゲタゲ

タ笑つてけつかるとはよ。

弁 藏 だからよ、こんな時でも見ると笑わずにいられねいちゅう
だから、格別なんだべ、お前の面相は。

兵右衛門 男の値ぶみは、面相なんぞでするもんじやれえとよ。な
あ、おソナさん。

農 婦 ああ、お前のはあっちも格別だちゅうからの。

兵右衛門 昨夜もさ、たのむの祝いあてこんで、泰野から厚木ひと
めぐり商つて、泊つた旅籠で夜中廁へたつたついでに、一寸女中
部屋覗いたと思ひねい。暑くるしい蚊帳の中を敷き藁と並んで
寝てる若え方が、なまつ白い足ここまでニヨツキリ・・・思はず
ゴツクリ生睡がよ・・・

権兵衛 そら、はじめやがった。

兵右衛門 おかげで一番鳴くまで、ビッショリ汗のかき通し。

女は帰つちやいやだいうし、寝具合も儘更じやれい、もう一晩の
つもりで宿は出ただが、虫の知らせつてヤツですよ。・・・帰つて
みりや頭さ血のぼつちまたか、おふくろの話いやまるで見当が
たたねえ。松木の奴ア、惣代にたつた衆追いかえしたとか、そり
やふんとのこつたかい。

所左衛門 ふんとも何にも、そいつアもう寝すきのことよ。

伊藤平兵衛 県府の杭うちさ出た権さんと三上の知らせで大騒ぎにな
つて、すぐさま高橋新七さんと権右衛門さん惣代にたのんで、
扱所へかけあつて貰つただがな。

兵右衛門 ラチがあかねいだかい。

平川イシ はなつから、その魂胆でいただからよ、あの鬼は。

兵右衛門 はなつからだア・・・

長五郎 そうに違ひねいわ。・・・今日の杭うちの担当が南とお

でよ。松尾さまの指図で、昼前にやお請訪さまのめぐりあらかた
打ちおえて、弁当だ云われつからこつちも一服してた。そしたら

松尾さまが、松木長右衛門ちゅうは元れい地所もちだな、こう云
われんのよ。

権兵衛 だで、おらこう云つたのさ。松木のふんとの土地ちゅうも

んは十町そこらで、あとは皆小前のものだが、質地にも入つて
こつたし、あんまりこまごま届けたじやおかみが難作だで、かり
に松木の名儀でまとめて地券うけた、こういう訳でさ・・・

長五郎 だもんで、あとで請地したら銘々の名儀にかき換える約定
になつてる、どう云つたのよ。・・・そしたらお前、とんでもね
い詰だ、松尾さまが云われるじやねい。

兵右衛門 とんでもねいって。

権兵衛 あう、とんでもねい、今度の改正で土地ちゅうもんは届け
でた名儀人の所有になるだから、どんな約定があつたにしろ、法
律の上からは小前六六人のものじやねい、地券うけた松木のもの
になる。

長五郎 第一、この杭うちが済むと、土地台帳の字名も変るだから、

もとの地所とは縁もゆかりもなくなつちまう。・・・いや、そい
つきいてたまげた訳だ。

権兵衛 おう、たまげたわ。

弁 藏 今更たまげたって、手遅れだんべ、くそ！

所左衛門 前々から変だとはおもつてたのよ、だから去年の地租改
正のときね、請戻しだできる分はこの際につて、無理して元利そ
ろえを者もいただに。

別の農婦 作り取して分だけでも、駄歩わけて名儀かき換えてく
ると頼んだに、何だか云つてやつちやくなかった。

冠伝次郎 おらとこもそうよ。・・・でも、証人の衆がキツチリか
けあつてくれりや、そらそら曲つたことは云えまいがの、松木も。

弁 蔵 篓たちと違つて、白いまま食つてゐる衆だぞ、九左衛門さん
ら、譲つた田畠に名儀変更もクソもあるか、吐鳴られりや・・・

兵右衛門 譲つた・・・俺たちが田畠譲つた、そんなどこと奴ア・・・

平兵衛 新七さんら、被所で孫右衛門さんに地券の名儀全部六人
の質置人にかき換えてくると交渉したが、そりや此所じでできね
え云われたもんで、そんなら質地はいつでも請戻しに応じろうゆ
う証文書くよりに松木へ通してもらひたら、そら云つたちゆうの
よ。

兵右衛門 莫迦とけ。いくらがやまが文明開化の西洋樂器でたぶら
かそうたつて、そらはいかねいぞ。・・・四年前 壬申地券のお
りるとき俺たち呼んで、交付は手続きがめんどうだとの、多勢で
ちつとつつ申請したじや真土村の貧乏世間に吹聴するようまん
だこの、いろいろ並べるから仕方ねい、販りて松木名儀でうけ
ることにしたんじやねいか。

儀左衛門 出畠資に置いてるのは、まにも真土村に限つたじや
ねいだし、お手数をかしけねいが、地券は手前名儀でうけてえ、
おらそり云つたぞ。

兵右衛門 お手数つたつて、官員さまそれで月給ちゆうもの質つて
るだべ、五円も六円もよ。・・・そしたらがやまが何て云つた。
用達てた金持つてくれば、いつだつて今迄どおり請戻せるだから
・・・たしかに、そら云つたぞ。さいてんべ、ええ。

農婦 ひとり残らずきてるだよ、ここに寄つてゐる者は、

伝次郎 それでも音がシカシカの返答しねいもん、九左衛門さん
を生証人にたてただから。

所左衛門 汗つておつたが、九左衛門さんは。

平兵衛 こんなことをなりやせぬか、松木の腹よんて察してただの・
儀左衛門 だけんど、程もなく遅いのう。見えねえふい、峰松。

櫻兵衛 弁さん、どっちへ騒げるかい。がやまが聞むか、それとも
・・・・・。

弁 蔵 勝負やまるめい、摺代灰に今張れねいわい・
イシ やめねいかよ、騒すことどこのさわぎでねいぞ、ふんとお
ら、死ぬか生きるかちゆう顔声きわだに。

兼 吉 (かみ手をみて) も、水がきたぞ。

長五郎 わりや水見てんのか、かたいでる人見てんのかア。

兵右衛門 ふっとはされへぞ、峰松に。

笑い。

佐藤安五郎と平川イネ、水桶を運んでくる。寄つてくる
人多だ。

安五郎 まてまて、運んできた者が一番だ。

兵右衛門 月給二円五十銭の有章館先生、板についてきたと思つた
ら、天秤かつぎは恰好いかねいことになつたの、安五郎さん。

イネ 佐藤先生を、途中で半分も呑んでしまつただよ。

安五郎 まだかい、冠さんたち

平兵衛 かう。・・・誰か、ひと走り容子みに行くか まあ伊藤の

爺さま。

富五郎 容子なんざみねいって判つてら。・・・他所じや地引帖の分畝歩のぶんにも、チヤンと何番地の何番までふつてあるにここにそれがねいの見たつて、へえ松木の料見はよめるべ。真土村全耕地の三つ一つ、四七町歩つてものひとり占めしようとかかってるだ。・・・それをいつまで、惣代を証人だ待つててどうなるつて。

所左衛門 だでどうしろちゅうだ、若え者とすりや。

富五郎 だてや醉狂で、竹槍までかつぎだしたんでねいぞ。もうはア惣代衆ひきあげて、ここに集まつた全体で押しかけるだ。

兼 吉 押しかける、押しかける。

―― そうだ、押しかけるだ。
叩つ殺せ、がやまの野郎。

兵右衛門 ヘえ、竹槍かついだか。そんでも向うの長押にや本もの槍三本も五本もあるつたぞ。

―― 負けつか、あんな酒肥りに。

兼

吉 年寄衆、腰が重いちゅうなら若え者だけで、なア。(竹槍をしごく) ヤーッ!

伊藤佐次兵衛 ヘえいい加減にしねいか、兼。はしやぐなアお諫訪さまの祭だけにしとけ。

兼 吉 なに・・・・・

佐次兵衛 村の大事に、黄色いくちばし突っこむでねい、おとなしく控えていろ。

富五郎 いくら伊藤の爺さまの叱言でも、だまつて控えてる訳にやいかねえぞ。のんべんだらり、こう待つていてどうラチがあくちゅうだ。

兼 吉 おらとこなんざ親父の長悪いで、引割団子せい食いかねてんだ。畠とられるのは殺されると同じだぞ、大事も大事、一大事よ、くそ!

佐次兵衛 一大事だから分別しろちゅうだわ。そぐとも、土地がなきや百姓はしめいだ。・・・・・征韓論とかで負けても、西郷さんにやお戻りになる薩摩があるが、百姓負けたら戻る先がないだ。いかに辛くても負けられねいのは、わかりきつたとつた。

日がかけり、遠雷。

佐次兵衛 なら、百姓は何で勝つ。・・・・竹槍むしろ旗かもしけねい、あるいは昔信州の一揆衆が江戸中を貼り紙で埋めて、とうとう殿様改易させてしまつたようだ。世間に真正の道理を知らせるやり方もあるべ。・・・・・やり方は、へえ幾どおりもあるうが、まず大切なのは固まるこつた。しつかりまとまらねいじや、決して百姓は勝てやしない。・・・富や兼に、理会させて貰のもこのことだ。惣代衆えらんだからにや、惣代衆先へたててそれに従うだ。そりやつまると、手前たちの一味徒党のきまりをつくるちゅうことだ。・・・おらたちは決してお前らの云うように、のんべんだらりと待つていろんとねえぞ、きまらぬ力で代表の衆を後から押し

だしているだわ。

沈黙。

峰松 ああ、帰つてござつたぞ。

儀左衛門 どれどれ、ひい、ふう、みい、よつたりか。

所左衛門 ふんとじや・・・・村役人は九左衛門さんか。

峰松 九左衛門さんひとりだ。

イシ どんな容子じや、皆は。

別の農婦 うまくいくつてくれてならいいが・・・・なむましいだ、

なむましいだ・・・・

農婦たち なむましいだ、なむましいだ・・・・

高橋新七、冠彌右衛門、福田小左衛門、冠九左衛門。

平兵衛 新七さん・・・・

権兵衛 ど、どうじやつたか。

長五郎 まさか、だめなんてことは・・・・

所左衛門 彌右衛門さん！ 小左衛門さん！

彌右衛門 みなさん・・・・

佐次兵衛 彌右衛門。

彌右衛門 ・・・・・四年前、生証人になつてくれた冠九左衛門さ

ん、平川孫右衛門さんが仲へ入つてきつい談判におよんだが・・・

・松木は、あくまで正式に譲渡された土地だと云ははつてきかんのじや。

弁 藏 そんなコケな話が・・・・

小左衛門 僕ア奴の面ばかり んでおつたが、血はしつた目がの、
証人の衆がじゅんじゅん理のべるにつれて、狐つきのようにキヨ
トキヨトして、横道云いよるのが、へえ自分でもわかってる風じ
やつた。

新 七 それでもとうとうシラきり通して、とどのつまり、お前ら

小前が約束たがえて理不尽おしとおすなら、こっちにも料見があるなど脅しにかかるて・・・・

兵右衛門 理不尽だて、おらたちが。

新 七 もう一日も小作はさせねい、すぐさま耕地は返せ、こう云
うだわ。

伝次郎 な、何ちゅうことを・・・・

小左衛門 そばから大旦那も加勢に出くさって、真土の百姓は犬猫一

にも劣る恩義知らずじや・・・・おら、もう体中がこう震えての一

・・・・

富五郎 へえ、どうするだ。・・・・・おい、峰松。

峰 松 ・・・・

九左衛門 わしゃ、皆の衆に何て挨拶していいか・・・・・四年

前のあの時、こうとわかつてしりや、たとえ松木さんはどうおも
われようと、地券は銘々の名儀でうけるよう、あからさまに云つ
てやつただが・・・伊藤小兵衛さんはじめ孫右衛門さんやわしら

一三人を生証人に立てた以上、まさかこんな・・・・
イ シ 今更そんなこと聞いたって・・・ああ、おら、ふんとにど
うしたらいいだ・・・（地に伏して泣く）

イ ネ おつ母ア・・・おつ母アよ。

イシ 肝心のいせきにぐれちまわれた上、たよるおんじ野郎微兵にとられたおらにや、あの畠ひきあげられたら、へえ首吊るしかねえぞて……ああ、

農婦 同じことよ、おイシさん。おらだて明日の日からへえ

峰 松 これ以上の我慢、おらできねいぞ。土地とられて水呑みに落ちこんだら、生きていかれねいのはおらたち一人残らずだべ。
・・・惣代衆の話で、松木の魂胆がこうとわかったからにや、伊藤の爺さまが何と云おうと、さしちがえてでも田畠とり戻すだ。
富五郎 そうだとも。くちばしは黄色いかしんねいが、若え者の血
は赤えだ。

兼吉 おい、太助、新蔵、吉、行こうぜ

7

左次兵衛

きがく

きらも

2

2

卷之三

つ
て
の

小左衛門

七〇

2

小笠原 戻りながらの語も、そこで意見がわれせまつたが、おらの見る目じや、奴ア学問知識にうぬぼれて、百姓なんざ脅しやどうでもなるとタカくくつてるだわ。だから、若え衆の云うがよ

富五郎 こうなりやもう、土地のこってなかんべ。
兼 吉 おう、奴の生首ひっこぬいて、うらみ晴
彌右衛門 そりや、赤穂のお侍衆なら、吉良上野
りや、あとは切腹でも本懐だらうが、百姓の本
しねいか。・・・と見え長右衛門どんの生首と
インさんはあの畠手離す訳にやいかなかんべ。
農 婦 ふんとぞ、そりや。

兵右衛門 瀬右衛さんよ、そこまでの道理はわかるだわい。だが、人を見て法を説けのたとえでよ。尋常のこつて咬えた獲物一吐きだしやしないぞ、あのがやまは。

彌右衛門 おうよ。いま小左衛門さん、新七さんも云われたが、松木はおらたち小前をうぬが力で生かしも殺しもできる虫ヶラのようにくだしながら、一方じや深い考へで新政府の方針を次から次へ、しかもいち早くこの真土にとり入れてきた人じや。仇に廻すにや怖しい人だで、腰すえてからねいと、なア。・・・しかし、云うまでもねいこつたが、今度のでいりはこっちに道理があつて無理がむこうにあるだ。こりやへえ、あたり前のようだが、実は大切なことだとおらにやおもえるだわ。無理が一とき道理に勝つても、そいつはいつか、屹度・・・・・。

九左衛門 そうとも、そうとも、・・・・・皆もよくご承知のとおり、土地ちゅうものを耕やす百姓の所有ときめて、そのしるしに

何じや、巡査じやねいか。

兵右衛門 巡査だと。こちへか。

地券を下付してくださったのは、回天御一新をあそばした天朝さまのお慈悲じや。・・・それを、質取りしてたをいいことに、ひとり占めようとする松木さんの横道を、このままおがみお許しなる筈はない。わしら、村役人といつても、この真土で鍛錬ふるてる同じ百姓だで、一三人が語って屹度白黒つけるだから、そ

うしないじや生証人の立場もねえ訳だし・・・だもんで、ここは皆もよく料見して、乱暴なんぞおこさねいように頼むだわ。

安五郎 九左衛門さん、御一新によつて土地が百姓のものとなつたは、天子の慈悲でもましてや新政府の善政でもありますん。

九左衛門 佐藤先生・・・

安五郎 もっぱら一揆、うちこわし、騒動、あんたのいう乱暴をおこしてきた農民の力によるもの。わが田畠はめぐんでいただいたのではない、祖先の血であがつたものと、有章縄で漢は教えています、

兼吉 そのとおりだぞ。

九左衛門 そよなこと教えてもらつては困るの、佐藤先生。假りにもそんな気おこして乱暴はたらいをじや、重いおとがめは必定そればかりかおがみの氣うけ悪くして、せつかくの道理も通らなくなるでの。

平兵衛 亂暴はしたかねいが、このままおとなしくしておれば、おかみが小前六人に味方して戸長兼区長の松木を、不心得じやとりしまつてくれようか。・・・腰すえてやつつけべいちゅう、彌右衛門の腹の中があらききて、どうじや皆の衆。

佐次兵衛 道理はいつか屹度勝つ、と云つたを、彌右衛門。

あれ、馬がくるぞ。

近づく馬蹄。

何のおとがめかい。

長五郎 おとがめなら松木でなけりや筋がちがうぞ、サギ横領に大泥棒は奴じや。

弁蔵 兵さん、お前、厚木とかの旅籠で手ごめにしたんじやあるめいな。

兵右衛門 莫迦こけ、それよりや竹槍早くかくさんかい。

三村 桜査米、二人の平巡回。
※ 平塚巡回屯所一等巡回三村司吉。

三村 おい、この中に冠君はあるか、冠九左衛門君。

九左衛門 へい。

三村 ん、あんたか。戸長役場へ同行してくれたまえ。

九左衛門 松木さんのところへ・・・

平兵衛 亂暴はしたかねいが、このままおとなしくしておれば、おかみが小前六人に味方して戸長兼区長の松木を、不心得じやとりしまつてくれようか。・・・腰すえてやつつけべいちゅう、

村の事務はきいた。村の平穏と秩序を守る立場上、看過でけんから、僕から松木さんによう説得してみる。

九左衛門 それは、ねがつてもねいこつて・・・

三村 おい、お前らもよく生きなさい・・・

雷鳴、沛然と降りだす雨。

三 村 今も村用掛に話したとおり、本日の紛糾に關しては非難を正して、お前らの立場もたつよう計らつてやる。だからして、まず第一に神妙にしなさい、神妙に。お上は必ずお前らの味方であるから、神妙にしておればよいお沙汰がある筈だ。・・・大体、こんな多勢集まるのは穩当でないぞ。

彌右衛門 おそれいります。実はわれわれ小前にとつての一大事なので、より合つて相談しておりますので・・・・・

三 村 ん、それは、まあよろしい。であれば本件の関係者だけ残つて、余の者は帰らせる、彌次馬になつて騒ぐ暇に、おのれの畠に草を茂らすようでは農民の恥だぞ、ああ、

安五郎 ここにおる者ひとり残らず、松木に耕地をとられかけていふ、つまり本件の関係者です。

三 村 ふーん・・・しかし、裸はいかんぞ、なんだへて裸であるのか、ああ、

兵右衛門 夕立でぬれると、へえ着がえが無えんでさ、旦那。

笑ひ。

三 村 行くぞ。

三 村 巡査と巡査たち、九左衛門とともに去る。
馬蹄遠のく。

儀左衛門 お前らの立場もたつようにならうと、松木の立場もたつようにならうと、

權兵衛 ように計らう訳かい。

權兵衛 そんなことができるもんかの。

弁 蔵 阿呆いうな。塞の目だつて、ビンが上向きや六は裏目ときまつてら。

佐次兵衛 加賀でも美作でも、巡回所や警察署が結局味方したのは、百姓の方じやねいちうことだ。百姓は、へえ百姓同志かたまつたが・・・従つて、これからどうするかは改めて代表を選ぶなり、全体で談合するなりして、策を講じなければならんだろうが、

安五郎 一応ここまでの大代としての意見きかせてもらいたいだが・・・

九左衛門さんへの気使いもいらんだし・・・

彌右衛門 そうじやの。・・・おら、決して九左衛門さんを疑つたじやない、それどころか、この先證人衆の先立ちになつて働いてもらわんやならない人だが、今度の件じや土地のかかわりもねい上に、村役人としての立場もあんなさる。・・・そこで、今捕つたこの顔だが、これこそ伊藤の爺さまや安五郎先生の云う関係者百姓同志の顔ちゅう訳だ。

兵右衛門 見榮えのしねい顔ばかりだがの。

彌右衛門 どうしてどうして。兵さんのような智慧袋もいれば、兼吉のような槍の名人もいる、富がとびだしや、手綱しめる伊藤の爺さまもいるつてよう、誰ひとり欠かせない立派を頑ばかりだ・・それだけじやねい。生きていくにや、どうあっても松木に勝つて、土地田畠とり戻す覚悟の顔だし、そのため一味同心い

くさおっぱじめる百姓同志の顔だ。おらにやそり見えるが

どうだべ、伊藤の爺さま。

佐次兵衛 おらにも見えるぞ、彌右衛門。

兼吉 爺さまア手前の面が見えねいせいだ。

笑い。

佐次兵衛 この野郎。だが、この一本松にやなんでも三百年の昔、大山さんから分けたちゆうお不動さまが祀つてあるだが、こりや百姓がいくさおこすにや縁起のいいところじやねいかい。

暁転。

(2) おくり火の夜

明治九年八月十六日、夜。

真土村八之域松木邸、長右衛門書院。

座敷に添田知道と対坐する松木長右衛門

* 県知租改正係、権大属。

氣拙い沈黙の中を小女を従えて登場する長右衛門の妻
フミ、継先の生蠶棚に供物をそなえ、盆灯籠に灯を入れなどする。

フミ あの、もうお膳をはこびましても……

長右衛門 む。

添田 いや、これでおじとま申すで。

アミ 在所のことで何もございませんが……

添田 ご隠居に僕から申しあげてみるが、取りつかんか。

長右衛門 。。。

添田 えでしてこうじうことは、肉身血縁の諫言が火に油をそそぎかねん・むしら、僕のような、いわば赤の他人が卒直に苦言を呈する方が、累なおに聞いてもらえるかもしけんぞ。どうだ。

長右衛門 せつかくだが、無駄でしよう。

添田 僕は君のために惜しむから云うのだ。以来、政府の大方針をこの地の治政にとりいれて、当県最初の小学校有章館をおこし、寺社統合をやりとげ、耕地の改革整理をこれだけすすめてきた君の理想といもんは、まさか当四ヶ村の戸長や、一一小区の区長などじやあるまい。僕にはそれがよめる、それだけにこの度の係争は拙にして劣、発明の君に似合わん愚率じや。わるいことは云わん、ことは手綱をしめて一旦仲裁に服したまえ。

長右衛門 添田さん、ご厚志ありがたいと思つております。あるいはご理解いただけまいと存するが、僕にも出なおせるものなら、の感をきにしもあらず、多分僕ばかりじやない。だが添田さん、勝頼公の勧定奉行に祖を発して一三代、松木の家で縄目の恥をうけたのは僕がはじめてだ。おとといは大磯の宿で、前夜眠れなかつたこともあって頭痛甚しく、どうにも大儀でお呼びだしの時刻に遅れ申した。しかし、そのため警察署には舍弟をさし向けて申しひらきまでさせたのに、腰痛をうつと

いうのは、犯罪人の扱いじゃないですか。百姓どもから、いかな
申し立てあつたにせよ、現に行政の職にある者を犯罪人扱いして
ご政道のしめしがつくとお思いですか。

添田 それを聴いて驚いたんじや、僕も、どうせそんな巡査は、
ご親藩下っは士族のなれの果てだろうが、心ない真似をしおる。

長右衛門 先程、戸長ならびに区長辞職のお願いをかき申した。
添田 松木君、そりやしかし・・・却って上司のご機嫌をそこね
かねんぞ。

長右衛門 頭もざんぎり、大小もいち早く藏にしまし申したが、ど
うも東照宮さまを手こずらせました武田残党の血すじといナツ
だけは・・・余のことはさておいて、こうじう恥辱をうけたから
には、非適といわれ業欲といわれても、いま更あとに退けぬ、老
父の一徹とどめる訴に参りません。

添田 一徹は、ご隠居ばかりではあるまい。・・・しかし、世界

万邦の事情にも通じ、戸長会議のりいどる・しつぶをとる程の俊
才が、そう云つては何だが、僅か三、四〇町歩の瘦地のために、
・・・わからんな。・・・小前側の代言人が調査に来村してあると
きいたが、この訴訟、勝つても負けても君の不利しかないとぞ。

長右衛門 やむを得ません。護水盆にかえらず、矢は弦をはなれま
した。

添田 さようか。・・・惜しい男をなア。

長右衛門 身にあります。 (立つ)

長右衛門 は。

(手をうつ)

長右衛門、添田を案内して廊下に出るとき、いそぎ
足で庭へ道次郎来。

米 長右衛門次弟、有章館教師。

道次郎 兄さん、常吉が怪我おわされたそうだぞ。

フミ ま、どうして・・・

道次郎 エタのくせして、松木屋敷の大になつてどうこう、若いも
ん五六人にとつつかまつて・・・

長右衛門 あとにしる。フミ、人力はしなくてきてるか。

フミ はい。でも、もうお膳が・・・

添田 今宵のおくり火には戻るより、坊主どもに念おされて参
たで、・・・とにかく自重してくれたまえ。

人ひと去つて行く。

道次郎 (座敷の小女へ) おい、手あてしてやれ、常吉。

小女 いやですよ、汚ならしい。

道次郎 なにが汚なさい。新平民だつて同じ人間だぞ。

小女 ちがいます。あの衆はヨツですよ。

道次郎 だからお前ら旧思想だといな。福沢諭吉先生、学問の
すすめにいわく、天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつく
らずといえり。されば天より人を生ずるには、万人は万人みな同
じ位にして・・・

小女 ・・・生まれながら貴賤上下の差別なく・・・だつたら
若旦那が手当してもやりませ。(行つてしまふ)

とおくきこえる盆踊りの囃子。

フミが戻ってくる。

道次郎 さん、お膳は大旦那さまのお部屋へ、お言いつけで
したから。

道次郎 兄貴も。

フミ 添田さまをお見送りしてから、常吉のことらへ。

道次郎 え？・・・よく行くな、あんな部屋へ。

フミ ひとり身にしては、よくかたずけて暮らしてゐるじやあります
せんか。

道次郎 何やら、奇妙な匂いがしてな、あの連中は。

フミ 道次郎さんのお部屋の方が、余程匂います。

道次郎 兄貴が下の者に甘くなつたのは、嫂さんの感化だな。

フミ 山崩れに住んでいた常吉をひきとつて、山明ちゅう姓まで
つけてやられたのは、旦那さまのご料見ですよ。私は、亭主の好
きな何とやら・・・道次郎さんこそ、有章館では四民平等って教
えておいででしよう。

道次郎 いまもやられたばかりだ、あいつめ。

フミ あ、盆踊りですね。

道次郎 打間木かな。

フミ 南豊田ね、あの囃子は・・・まわりは穏やかなこと。

沈黙。

「道次郎、道次郎」とよびながら庭をくる長右衛門。

道次郎 兄さん。

フミ出て行く。
沈黙。

道次郎 なんだ、兄さん。

長右衛門 貴様がたきつけたのか、常吉だ。

道次郎 何をだ。

長右衛門 ああ、東光寺の件か。

長右衛門 くだらんことするなと、あれ程云つたろうが。

フミ もんだ、何を・・・

道次郎 いや、素の奴が東光寺へ來てるヘツボコ代言人、一発かま
してやるか云うもんて、僕はやめるといつたんだぞ。

長右衛門 常吉は恐縮してろくに喋らんが、お前らにもしものこと
がありやと、東光寺のまわりうろついていて、それでとつつかま
つたらしくぞ。

フミ まあ。

長右衛門 素三郎はどこだ。

道次郎 さつき、市五郎に擎剣教えてやるとか云つてたが・・・
長右衛門 ばかが・・・しきみたまおくるつて日に・・・そういう
奴だ、お前からもよく云ひきかせてくれ。・・・(フミに)あと
で、誰かに糞もらひに来させるよう云つといた。切傷はたいした
ことないが、腰を打たれてる。・・・薪でも割る調子で殴られた
んじやたまるものか。

長右衛門 父上からお話をあるげな、どっちはせ、おとといの小田原

警察署 一件のむしかえしだらうが・・・行こうか。

道次郎 僕は、有章館辞めようかと思つてゐるんだが。

長右衛門 •••••

道次郎 申しあわせて、子供学校へよこさんのだ。佐藤五郎先生が向うに一味していで、親たちそそのかしてまんて噂もあるが、何にしる生徒が来ないでは困るのは学校だ。松木先生にや算術そろばんおしえらりようが、修身人の道は教えられまい・・・うまいこと云うもんじやのう。

長右衛門 兄は兄、おのれはおのれだらう。有章館教員松木道次郎

に徹してみる。

道次郎 今日、寿之丞が泣かされて帰ったの、娘さんからきいてるか。

長右衛門 寿之丞にまで•••

道次郎 いや、それとこれは別のことだ。・・・徹してみたいとは思つたがなア、想ひきり。

フ ミ (登場して) 大旦那さまが•••

長右衛門 む。(道次郎に) すぐ行くと申しあげてくれ。

道次郎退場。

長右衛門 寿之丞は怪我でもしたのか。

フ ミ (首をふる) •••

長右衛門 お前、僕をどうおもう。

フ ミ •••••

長右衛門 僕は業欲非道だらうか。人非人だらうか。少くとも今日

が日まで、小前連中をそんな目にあわせてきたらうか。

フ ミ いいえ、そんな•••あなたにそんなふつもりがないのは私がよく存じています。 ••• ただ•••

長右衛門 フミ、僕はね、十八で名主の家督をついでこのかた、ことを、この真土村を氣おつていえば一つの理想郷にしたい、そういう夢をもつたのだよ。・・・太平洋の波におしあげられたこの砂丘地帯は、われわれの祖先が甲州から相模川ぞいにくだつて移住した当时、抱いていた夢を託すに必ずしも適してはいなかつた。一雨降れば洪水、何日か照ればカラカラに乾く天水場。しかし、かれらはこの荒地にいどみ続けてきた。・・・さつき添田さんは、わからんと云つておられたが、僕たはかれらの夢がわかる。僕は、その夢を他ならぬ僕の代に完成したかった。誰にも夢はある、しかし夢を現実にかえることは、決して誰にでもできはせぬ。勿論一つには人間の意志だ、しかし、それだけでは足らん、もう一つそれを貢ぐ力が必要だらう。堀田藩名主筆頭の嫡子としての僕には、その二つが備わつてゐる。そう確信したのだ。新しい土とよばれていたこの村に、まことの土—真土と名付けたのも、その確信があつてのことだ。・・・そして、フミ、ここをまことの土の理想郷としていくためには、昔ながらの沾湿な農業で屋敷庭ほどの耕地をバラバラにほじくつていなんでは駄目なのだ。カマドごとに目の先ばかり追いかけておつたのでは、新しい時世に置き去られてしまう。・・・わかるか。

フ ミ あなたの考え方が、自分のためにも、村のためにも結構なのだと、小前の人たちがわかつてくれたら。・・・

長右衛門 僕も幾度そう思つたことか。かれらの中にも、たとえば

冠彌右衛門のようないい利発な奴はある。しかし、おしなべてみれば

百姓といふものは愚昧なものだ。あの連中を変えるには強い力が必要なのだ。・・・今は土地を奪つたとやらまれ、ひとり占めし

たと罵られても、ここに僕のゆうとびあが表現すれば、あの連中はともかく、その子、その孫には、ぱいおにや、先駆者としての僕の理想と困難がわかるにちがいないのだよ。

フ ミ 私には、むずかしいことわりはわかりませぬ。ただ・・・

女といふものは、日々の平穡が何にもまして欲しいのです。・・・

・去年は寿之丞をつれ、あなたのお供をして参りました盆踊りが

今年は・・・・。

フ ミ あなた・・・
長右衛門 あなたた。

長右衛門 どう思ひ、お前。

市五郎 へい、何ともどうも俺にやわからんねいんで。どんないきさつ
があるにしろ、上州や信州で養蚕が百姓のくらしむき良くしてゐ
たら、それをすすめなへた旦那さまへの面あてで桑の木へ仇
するなんて・・・天に睡して、いいキビがつてゐるようで・・・
寿之丞つれて、しばらく小田原の叔母上の許へでも行け。

長右衛門 としても仕方あるまい。・・・(行きかけて、フミに)

フ ミ あなた・・・

長右衛門去る。

暗転。

⑤ 諸行無常の鐘

市五郎 旦那さま、ちょくら・・・

長右衛門 市五郎か、繩劍はどうした。

市五郎 へい、若さんには筋がいいとか貰められましたが、いや生

傷だらけで。

長右衛門 百姓には無用のことだ。

市五郎 へい。・・・旦那さま、いま惣助さんがとんできての話で

村の衆がめいめいの畑から桑の木を引っこぬいて・・・

長右衛門 桑の木を・・・

市五郎 川原にかつぎ出して燃やしてゐるとか・・・

長右衛門 ・・・・・。

明治九年一〇月一四日 暮方

真土村東光寺*

* この寺院現存せず、鎌倉建長寺の末寺と謂う。院

内に、松木創設の小学校「有章館」があり、又この

景の四〇日前より「村用板所」が設けられている。

八月七日より一〇日ごろ塩谷代言人調査のため滞留。

一つのセクションが必要である。一つは塩谷を中心と

した座敷、一つは一方が座敷、一方が本堂に通じ同

時に外（境内）に出入でくる厨である。

座敷には塩谷俊雄米調べのものをしてくる。

* 代言人、栃木県出身の士族。厨でランプのホヤ
を磨くイネ。しも手で放課後の子供らの喧嘩。

松木道次郎、佐藤安五郎。

安五郎 （戸外の子供らに応えて）今日は遅くなつただから、道草
くつとらんで早く帰るだぞ。

道次郎 最後の授業とばかり熱弁をふるつたら、喉がかわいた。（
イネに）茶を一杯くれ。

安五郎 よし、僕がいれてやる。

道次郎 あの鉄砲銃は持つて帰るかな、僕のほかにや使う者がおる
まい。

安五郎 （イネに）兄さん、どうした。

イネ 家へ行つてみるって。

道次郎 来ておつたのか、倉吉。・・・しま、どこにおるんかね。

安五郎 横浜・・・とかいっただな。

イネ

道次郎 また、金せびりにきたんだろう、仕方のないヤツだ。

安五郎 親父さんがなくなる、兄貴が徵兵にとられる、奉公先の店
がつぶれる・・・つまづきのもとはへきりしてゐんだ。早く相

談にのつてやつてたら、と考へてね。

道次郎 わからんじやないが、だからと云つてふてくされていてど
うなる。貧そのものは愧する要なし、しかし貧に敗れてはいかん、

安五郎 松木先生に貧乏の心得きかせてもらつても、どうにもな

るまい。愧する要なしか・・・五升の麦に米二合五勺をまぜた

飯をこの辺じや外五割というが、その外五割を一日二回食えれ
ば、これは人並みだ・・・百姓の貧乏がどんなもんか、あんたに

にや生涯わからっこないだろう。

道次郎 当今そつとばかりは云えないので。地主は政府と小前の板

ばさみで手も足も出んし、魔刀令につづく秩禄处分で士族とも

はヒイヒイ云わされている。・・・・・

イネ おいでですよ、塩谷先生。

道次郎 あ、おいでだつたのか、自由民権居士。・・・ボツボツ

尻尾をまいて退散におよぶか。

安五郎 あんた、やはり辞職するのか。

道次郎 これまた、つまづきのものがはつきりしてゐる口だ、尤も

僕はふてくされて辞める訳じやないが・・・平川、さつきの荷一

物もらおう。

イネ、奥から風呂敷包みをもち来る。道次郎を手

伝つて安五郎も整理にあたる。

イネ 先生、何だな、これ。

安五郎 地球儀だ。・・・これが、日本だ。

イネ ま、小さい。・・・えすばにや、ほるとがる、こんな国

じやどんなにして百姓やつてゐるんかね。

道次郎 女子が王さまの國じや。女子は全部續はやしていくな、
勤じて男をくわしてくれるそつだ。

イネ (笑う)

安五郎 国は小さいけれど、方々に属国、植民地をもっている。ほ
れ、このいぎりすもそうだ。しんど、おーすとらりや、かなだ。
・・このあめりかも、百年前独立戦争に勝つまではそうだった。

塩谷 (かみ手へ) おう、入りたまえ。

彌右衛門、小左衛門

塩谷 出来たかね。

彌右衛門 読みづれえこって。

塩谷 拝見・・・(手を叩く) こっちもいま、面白いものを見つ
けたところだ。

イネ、座敷へ。

塩谷 ランプをくれたまえ。・・・民事裁判となれば、勿論松木
側でも代言人はつけよう、しかし、今回の戸長区長職と免でもわ
かるように、これだけ上司の心証をそこの事件となると、弁護
の任にあたる者もさらには居るまいからね。金が目あてのイカサ
マ代言人をらいざしらず・・・

イネ、ランプを点火する。

道次郎 兄貴の場合、こちらからの辞職願いがきき届けられたので

はない。村民の申査方正にして全く長右衛門の奸謀云々で、許
し難きにつき役職を免ず、切腹を申し出て獄門になった。・・
・僕がいかな西の皮の厚い男でも、これ以上、四円五〇銭もらないに
通つてくる訳にもいくまい。

安五郎 むろん、随分と不快なことがあるだろうが、要するにあ
んたはあんたなんだから・・・長い目でみれば皆にもわかつて
いく筈だし。

道次郎 兄貴にもそれは云われた。・・・明治聖代のありがたさ
で、小学校教員を続けようとおもえば、まさか兄貴の因果がこ
っちは報いることもあるまいから、学務課へ話して適當な学校
と考えられんこともないが、僕にや必ず村に不学の戸なく家に
不学の人をからしむる、政府の真意もなにやら疑わしくなつて
なア。

安五郎 その疑義は僕にもあるが、むしろ、適當な学校といふよ
うにこの真土を、有章館を離れられるあんたの考え方が納得い
かん。教師は単に知識の切り売りをする商人じやないだらう、
道次郎 知識の切り売りか・・・それ以上のことはできそもな
いで、僕は妻をはやした女子のところへでも養子に行くわ。
イネ 松木先生、誰も先生のこと、うらんだりしてはおらんよ。
道次郎 あたりまえじや。どうだ、イネが働いてくわしてくれる
んなら、僕も絶望を抱いてえすばに今まで行かずにすむんだが

イネ、ランプを点火する。

安五郎 そりや、峰松君の諒解がとりつけにくからう、な。

イネ 知らね、もう・・・。

道次郎去る。

すがの。

塩谷 「此度御改正に際し、右は更に長右衛門所有地なると冒認し、庄兵衛へは換地として外の芝地を相与え、本畠へは同人証名の建杭に及び、甚だもって不条理と致し奉り候条、御調の未従前の通り一村共有仕る様御改正願ひあげ」・・・と、いひでしよう、これで。

小左衛門 「へ、そればかりじやね、それに似たようなもので、他に共有地が三件、私有地が一四件あるんで、その分がひとつでがす・・・・

安五郎 茶をいれて座敷へ。

安五郎 ご苦労さまです。

塩谷 佐藤先生、・・・いや、今も驚いていたんだが、調べれば

調べるほどひどいね。去年からことしにかけて、土地をめぐっての係争が全国的におこつておるのは、ご承知の通りだし、区長や戸長が係官を買収して、自分の所有地の地価を安く決定させたなどという例はあるが、一村六六戸の土地を自分名義で抗うちしたなどといふ暴戾非道は、黒田代言人とも話したことだが、日本

彌右衛門 あの人には、こんどの地租改正で納得いかん調査に反対し

た加賀の百姓衆に、官員さんが「お上のきめに反対する奴は国賊だから、赤裸にして日本から追いつめてしまう」と脅された話をして、そういうやり方じや百姓を味方にできん、と云つていひたで

塩谷 今度は、全く同じことを君らに云つたじやないか。
・・・欲よ、我欲よ。ああいう男はね、親代々の安逸に首までつかりこんで、腹の底までふやけておる。御一新で人民ことごとく辛酸をなめているのに、おのれ一人榮華の名残りを夢みておるのさ。

小左衛門 そうだの、やはり我欲に目がくらんだとしか云ふようがないわいな。

安五郎 しかし・・・いや、そうとしか僕にも思えんけど、たとえばこの有章館ひとつとっても、他の村の地主が考えつかんことを彼は・・・

塩谷 学校の一つや二つ、彼の財力からみたら何だね、佐藤先生。・・・金の欲と名誉の欲は隣りあわせだ。腹がふくれて女あそびにも飽きがくると、人間そろそろそいつがほしくなる。

小左衛門 先生なんぞも、ボツボツその口でねいんだべか。

塩谷 僕がか。

小左衛門 八月ござったときは、へえ棺桶の上に大あぐらかいて、松木の用心棒くるなら来てみよ、我輩の死場所はこの東光寺だちゅうんで。・・・芝居なら、へえ大向うから声がかかるところだ、や、しおのや・・・。

から、その遂行のため兎刃にたおれるのは何らおそれておらん、
その氣概をしめしたにすぎないのだ。・・・僕は士族だが旧弊に
泥むのはいやだ。きくところによると熊本じや敬神党に不穏のう
ごきがあり、秋や徳山でも松下村塾に学んだ前原一派が機をうか
がつておるそうだ。反政府の挙兵もいい、しかし、かれらの掲げ
る政府批判の中味は、要するところ旧体への復帰にすぎん。武士
を頂点とした古い秩序に恋々としている。だが、まげをのばして
二本差してみたところで、日進月歩の世界の潮流はとどめ得はし
まい。要は彬ではない、刀をとりあげようが、祿をうばおうが、
どう圧迫しても屈せぬ武士の魂をもつことだ。・・・こりやとん
だ説法になってしまったが、我輩が諸君の窮状をあわれんで、か
の松木に天にかわる誅を加えるのも、その土魂のなすところ、そ
こを理会してもらえば満足だ。

小左衛門 おらたちやもう先生をおたより申す他ねいんで、あの杭
うち騒ぎのあと、彌右衛門さんと代言人をねがおうと、横浜へ出
たものの伺のあてがある訳でなし、だもんで旅籠の山崎屋さんか
ら、それなら恰好なお方があるちゅうて先生のこと伺ったときは、
よく地獄に仏で、なア。

彌右衛門 まつたくその通りでした。

だよ。

彌右衛門 で、先生。最前何やら見つけたと云われたのは・・・
塩谷 む、これまた疎にしてもらさぬ天の網だな。見たまえ、こ
の名寄帖だ。・・・某次郎兵衛が、宇外屋敷の畠地一畝五歩七厘
を質地にして、松木から金三両二分を借りてゐる。・・・年季の

儀は、当文化八年未の一月より来る子の二月まで、中の年五
ヶ年ときつてゐる。年期明け地代金残らず返済仕り候わば、畠
相違なくお返し下さるべく候、と、そしてそのあと、若しその節
金子調いかね請戻申さず候わば、金子返済仕り候までは此の証文
を以て何ヶ年も御支配成さる可く候、とある。・・・ところで、
今度は此方の証文だ。質地代増金証文の事、字外屋敷、ひとつ畠
一畝五歩七厘、此質地代増金六両七朱也、日付が文久二年八月だ
ね。

小左衛門 へい、こういふことは際々あるんで、一旦質入れした土
地へまた上借りといつて・・・

塩谷 といふことはだね、文化八年に質置きしてから、文久二年
というから五〇年以上たって、返り証書もなしにその上借りをし
てゐる、いや松木で貸してゐる。してみればこの名寄帖にある年
季五年を過ぎても、質流れしていないと、といふことを松木自身認め
てきた、むしろ、この五ヶ年といふものは金を返しても請戻せな
いといふ形で、債権者のために設けてあるといふ証明がなりたつ
じやないか。

彌右衛門 それは今も小左衛門さんが云うように、真土村では松木
ばかりじやない、他の質受主との間にもそういうしきたりがあつ
たですか。

塩谷 僕のもとめていたのは、その慣行の裏付証拠なのだ。これ
があれば、返すべき性質の質地は年季内のものだけだから、五年
以内に取った質地なら返そう、などといふ松木の言い分けは横浜裁
判所で必ずしつがえすことができる、安心したまえ。

小左衛門 ありがとうございます。

彌右衛門 では、証文、名寄帖の中から尙同様のものがあつたら拾ひだして・・・

塩谷 も、それがいい。何通かえらんで書写しておきます。・

・ それから、松木が免職になつたときいて九右衛門さんの病氣もなおつたろうから、この際、旧役人連中の証言を集めてもらつて書類としてだせるよう準備を、よろしいね。・

市五郎を聞んで、峰松、兼吉、新倉嘉兵衛、

嘉兵衛 申しひらきできるちひうならしてみい、ここぞ。彌右衛門さん、彌右衛門さん。

塩谷 例だ。

兼吉 主が盗つ人だから、銅われとる大まで泥棒するだわ。

市五郎 誰が、泥棒など・・・

イネ 佐藤先生。

座敷の人々、歎へ。

彌右衛門 どうした、峰松。

兼吉 今日は東光寺に佐藤先生ござつてるちひうで、若えもんで自身香しよつたら、火の見の西の彌右衛門さんの烟で、こいつ俺たちが行くのを知らんで染の本こぎあつたのよ。

市五郎 こじでおつたじやねい、こじであつたから植えておつたと云うたるうが・・・

彌右衛門 こじであつた・・・

嘉兵衛 うそとけ。知つておいでか、こいつは松木のがやまに銅うてもらつとる犬ぞ。ヤツが警察署で懲罰くつをもんで、彌兵衛門

さんに仇しようとしたんだわ。ふんと云面憎い畜生じや。(摸る) かつたもんは見るのも厭だちゅうて、皆して桑の木引きぬいたこともあつたわ。

市五郎 知つとるとも・・・わしやこの村の者でねいから、お前らのうちみつらみはよう知らんが、烟の作物に仇するなんて百姓のすることじやねいと思つただ。

峰松 他所もんに何がわかる、さざなまきて! 大豆まきて! と思つてゐる烟だ、いやおうなし桑なんぞ植えさせられてみる。

峰松 それでもあんとき、彌右衛門さんが皆さとして、一たんこいだ桑また植えをおした。それから、村の者ならそんなことする筈はないだぞ。

嘉兵衛 そうとも、あらあち三人が生証人だで、こいつ平塚へしよ、曳いて行かず。

イネ 待ちな、嘉兵衛さん。

兼吉 来い、野郎。

市五郎 (抵抗して) 俺じやねい・・・俺じや、

平川倉吉 (外から) はなしてやれ、兼。

イネ 兄ちやん・・・

倉吉 何だ、お前たちの仕置は。(酔つてゐる) お姫さまが初床へ入りやしめいし、さつまでクチヤクチヤ云つてねえで、やるんなやれど・・・(市五郎の胸ぐらをつかまえて) 烟の作物に仇

すんのは、百姓じゃねえって云やがったな、氣に入つたぞ、この
どん百姓め！（四つ五つ烈しい頬うちをくれて戸外にほありだす）

小左衛門 倉吉、お前は……

倉 吉 翳右衛門さん……いやさ、真土の宗五郎さん。フフフ・
・・警察署だ裁判所だアグズグズしてねえで、俺に任さねえかい。
その方が手とり早い上にあとくされがねえ、おまけにどつかの
先生頼むより余程安あがりだア……

イ ネ 兄ちやん！

倉 吉 ねえ宗五郎さん。警察署じや土地は小前に返してやれ云つ
たちめうが、がやまが左様ご尤もで返したか。・・・裁判所でか
えせつて判決でりやつたってかえすか、奴が、どういたしまして。
むどうにも士族くすれの三吉代吾が加勢して、東京は上等裁判所
へもちこまア。

小左衛門 何てこと云うだア、この……

倉 吉 す、こんでるい、第い、手前からかゝてんじやねえや。
・・・揚句、勝つたとしようか。でもよ、云つとくけどその前

に、俺とこなんざ婆アが（自分の首をしめて）これだぜ。
塩 谷 その前に、自分がそらなうん様にすることたな。

・・だがその時はこんなあもぢやはやめにして、數の竹切つてき
てくれる。

駆けこんでくるイシ。ものも云わぬ倉吉にむしやぶ
りついで、懷中、掌の中をさぐる。

イ ネ わつ母ア！
イ シ この極道が、畜生が・・・呑んじまやがつたな、くらい醉
つてんのかよ、お前は・・・どうしるだア、烟とり戻すに、食う
もん食わぬいで貯めた錢い・・・。

鐘が鳴りはじめる。

暗 暗。

(4) あほだら経

明治一〇年五月下旬、夜。

前景と同じ、東光寺。

賑わいの中で、兵右衛門によつてうたわれた「新編阿
呆陀羅」であるくなつた舞台は、厨までふくめて農
民がひしめく。

猪右衛門 （ヒロを倉吉に渡して）倉、万に一つ、おらたちの思
惑がはずれて、お前の加勢たのむことがあるかしれない。・・・

兵右衛門 原告被告の申し出あつたは九月の五日、原告をお調べなされた其日のお係りどなたときいたら、岡山様とてすなおなお方で、段々説得なされたけれ共、松木のがやまが云うこときかない

やんせ、我身に引別したとても、一畝一枚なき人がなんでたつきがつくじややら、思うてみればなきない、（どどいづ）勝つてねざめがなによから・・・ないもの尽しで申しましよ・・・

踊れ、踊れ。

弁さん、踊れ。

弁さん！

兵右衛門 夫故松木も大きに叱られ年有質地を流地に致すは不屈しどくとご利解こうむり、是非なく松木も五ヶ年この方取たる質地を出そうと云いだす・・・

弁藏、おしだされて筋にあわせて踊りはじめる。

兵右衛門 ど、こいそちらで小前の云うには、五ヶ年このかを入れたる質地はいくらもござらん、年期のあるのも出さない、おかげで年期もなくなる、一枚なり共流地はさせない・・・

彌右衛門 お、棟梁、ます・・・

音五郎 やつてるな。（徳利を椽に立てて）俺は松木さんにや世話にこそなれ、何のうらみもねえ男だ、大っぴらにめでてえとも云えねえが・・・

彌右衛門 ま、あがつてくれ。

兵右衛門 松木に村内おさまらない、原告人には嘘はない。それで一も負ける気は少しもない、これではがまんで負けられない、がまんをするほど入費がない・・・

音五郎 おい、峰松。

峰 松 ああ、棟梁・・・。

音五郎 手間どりで悪いが、ちよっく俺んとこへ行つてな、^{ハサウエ}櫛に伝えてくれ。・・・棟梁、みとしすえちまつたつてな。

平兵衛 なんだ、莫迦に堅しこつたな。

音五郎 フフ・・・平櫛でのいつづけがバレちまやがって、（指を角に立てて）これなんだ、たのむぜ。

峰 松 世話やけんな。

兵右衛門 出さんとうならこの儘ならんと裁判願いと訴状を認め、ここらの処でとどめ置きまして・・・とっくりとんやびくびくどん、どじつなんぞのおはらいをかっぱじめ、（どじづ）アキタコリヤへあまた人さん相手にまわし（女房心意氣・説教）私のいうことききたまえ、妻子大事と思うなら、質地を出してやらし

兵右衛門 三つの蔵には僕がない、二つの蔵には着るいがない、小

前で一人も行き手がない、じんじの頭にや毛バがない、兄弟三人役がない、ひとりも勘弁つけてがない、せけんで代理のしてがない、男や女の居手がない、強情つのれば命がない、負ければ内へかえられない、それでは女房にたのしみない・・・・・

—— 厨を出た峰松へ、イネ。

イネ 峰さん・・・。

峰松 あ。

イネ お前、どこへ。

峰松 ・・・いいんだ、こっちへ来な。

兵右衛門 とてもしんしよはたまらない・・・こちらの処で大津絵
節のお笑いをかっぱじめ・・・

き出され、民事と刑事に調べられ、・・・・・

峰松 奉公って、小田原の、その・・・

イネ ね、峰さん。

峰松 ・・・まさか、だるま茶屋じや・・・

イネ ちがう、やらしいね、ちゃんとしたおたなだよ。・・・・

ね、うちへ来ないか。

峰松 ええ?

イネ 母ちやんなら、まだ二、三時間戻ってきやしない。

峰松 たって、お前・・・

イネ 今夜しかないと、ね。・・・庄兵衛さんの瀬戸ぬけて
行くべ、早く。

—— 二人、去る。

峰松 うちのおふくろが、お前小田原へ奉公に行くって聞いてき
たって・・・ほんとかよ。
イネ 裁判がどうきまるか、それまでって、待ってもらつただ
け。

峰松 どうして、何も云わねい。

イネ 明日の朝発つだわ。

峰松 明日。

—— 拍手、喧騒。

兵右衛門 ほんにおもえばにくらしや、急に帰れる身ではない、内
ではおや子が泣いている、神や仏に見はなされ、せけんで不びん
と思う人はない、ままになるなら本の松木と、一度云われたい。
・・・(と、うたひおさめる)

兵右衛門 是までの時節とて、法律学舎の手にかかり、横浜町へ引

権兵衛 こいつ、一べん松木にきかせたいの。
儀左衛門 こいだけはやしたら、大概きこえておるわい。みろ、シ
ーンとしておるぜ。

長五郎 何しよるかな、ヤツは。

喜五郎 首吊りの繩さがしてるとよ。

笑ひ。

農婦 兵さんはふんと ひょうきんじやの。
イシ 阿呆陀羅ちゅうたら、豊田や四の宮まで流行つとるそな

別の農婦 弁蔵さんの踊りのシナのぐこと。
又別の農婦 腰つきがたまらないわえ、なア。

笑ひ。

音五郎 彌右衛門さん、お前、このまま松木さんがひきさがると読むかえ。

彌右衛門 さあ、そこだが・・・ずっといきさつを見てきて、あんたの勘考はどうだや。

音五郎 次前の契約にもとづき、質地は代金を受取り、地所は返却すべきである・・・この辺で折れりや、それこそ本の松木にもなれようつてもんだが、奴さんたちの意地はからつけつの俺たちの意地より、一まわり太えでなア。

彌右衛門 しかし、去年の一月一五日からこの半年、裁判所じやごくこまかいところまでお調べあつて、その上での判決だから。・・・外屋敷の五年年季の質地へ、五一一年目に増金六両一朱貸した証文もあるし、旧役人衆一三人の上申書から、地券帖に六六人

の質入れ地所の筆数を付箋して出せちゅうことにもなつた。この四月二〇日にや、伊藤蘿左衛門さん、成瀬嘉右衛門さん、平川孫右衛門さん、それに豊田の戸長の鈴木庄左衛門さんの四人が、質地持主の代表として、質地はたとえ二百年、三百年たつたとしても、流れ地になることは無いちゅう証言もしてくれた。・・・これだけつゝこんで調査されてのお云い渡しとすりや、こじつひっくりかえすだけの新しい証拠でも出ない限り・・・

音五郎 賽の目はよめた、か。

彌右衛門 (笑う) 勝つたといつても棟梁、伊勢の海が勝名乗りうけるような案配にやいかねえわ。田畠請戻しの金どう工面するか、皆こうやって騒いでいても頭から離れきれなかんべよ。

音五郎 そのことよ。・・・彌右衛門さん、お前、松木さんに逢つてみねえかじ。

彌右衛門 逢う・・・でじうと。

音五郎 仲だちが要りや、俺がやつてもいいぜ。・・・でじうが始まつてから一度も口きいちやいねえんだろう。土つかずで勝つたんじやねえと云つたお前の正直な腹を、じかにぶつけてみたら、

訴訟沙汰で入りくんじまつて難しいところが、案外すつと・・・

彌右衛門 ・・・

音五郎 向うについてる代言人、佐倉藩の縁故でたのんだとかきいたが、たのまれ甲斐もなく負けたなんてことで、当の本人より熱くなりがちだ。・・・俺のとりこし苦勞かもしれねえが、頭の隅つこへ入れといくんねく。

富五郎 なんだ、なんだ、伊藤の爺さま。

所左衛門 帰んなる法はねいべ、爺さまよ。

佐次兵衛 け、帰りやしないぞ、誰が帰る……

長五郎 あんべい悪いだわ、こりや……

儀左衛門 やい、先生、先生よ！

安五郎 何かね？

伊藤元良 どうした、産氣づいたか。

兵右衛門 いや、たいしたもんだ、俺らの中にや、先生さまなんて呼ばれる奴二人もいたんだ。

安五郎 奴とは何だ、奴とは。

笑ふ。

権兵衛 そっちは先生さまでねい。

儀左衛門 ヤブ先生の方だ。

元 良 ヤブで結構、大体お前らは何だ。名医を必要とするような種類の動物か。風邪をひこうが腹痛をおこそうが、磨砂でも呑ませりやなおっててしまうでねいか。

笑ふ。
旅仕度の伝次郎、兼吉、拍手の中へ。

お、伝次郎さんら帰ったぞ。
いや、間にあって良かつたの。

彌右衛門 ごくろうさんだつたの。
平兵衛 何て云わした、塩谷先生は。

農婦 伊藤の爺さまがあんべい悪いだとよ、先生。
佐次兵衛 あんべいなんぞ、わるかねえ。
元 良 その爺さまはコレラでも死なねいぞ、容体が変つたら、いきなりこここの住職よんだ方がいいわ。

佐次兵衛 俺アうれしいぞ、うれしくてうれしくて、もうへえいつお迎えうけてもいじぞ。・・・七一のこの年まで、小前の者がひとかたまりになつて、村のどえらい奴にぶちあたつた、ぶちあたつて勝つたなんてとたア、見たことも聞いたこともなかつただ。・・・俺が山からとつてきて丹精したつつじだらうが、山藤だろうが、こりや枝ぶりがええちゅうて、連れてきたエタ野郎に埋らせて持つて行つちまう、そんでも文句一つ云えなかつた俺たちがよ、勝つたんだぜ、勝つたんだぜ・・・

沈黙

—— 報告続くところへ、庭から九左衛門。

九左衛門 （声をひそめて）音さん・・・音五郎さん。

音五郎 お。（招かれて庭に立つ）

九左衛門 実は今、県庁から使いがどさっての、おイシさんとの

音五郎 む、倉吉・・・

九左衛門 いや、おじ坊主の十次郎。

音五郎 兵隊行つた・・・

音五郎 戦死。

九左衛門 それが、戦死したちゅうだがの。

音五郎 戦死。

九左衛門 西郷さんとのいくさでなア、熊本のわきの小川とか云つたが・・・

音五郎 そうかい、いい若え者をなア・・・

—— 花は千咲き 成る実はよ

成る実はひとつ

早くむだ花とらせたい

成る実はひとつ 早くむだ花とらせたい

—— 座敷に長右衛門、庭に彌右衛門。

長右衛門 遅かったな、彌右衛門。

彌右衛門 ・・・・・。

長右衛門 横浜裁判所の判決がでてから一〇月になる、その後とは云わん。勝ちに酔つた大勢の中で、うち負かした当の相手と何

⑤ さか しお
逆 潮

—— 明治一一年三月中旬。午前。

—— 真土村松木邸、(2)に同じ。

—— 裏から畳すりに従事する男女の賑わいが、唄にてつたわつてくる。

の必要あつての談合、一蹴されるにきまつたからな。・

・しかし、彌右衛門、きさまだけでも、益蘭盆には来れなかつたか、彼岸には来れなかつたか、年越にはどうだつた。

彌右衛門 旦那、おら何も・・・・・

長右衛門 さて。横浜裁判所の敗訴が不服で上告した小作穀類延滞の件が、東京上等裁判所で再びきさまたちの負けになつた、小作物としての大豆一石一斗五升を収納すべし、と判決されたのが先月二七日だ。・・・遅い、と云つたのは、あの判決以後ではといふことだ。

彌右衛門 旦那は勘違ひますつてゐる。

長右衛門 勘違い。・・・どういうことだ。

彌右衛門 去年五月のあの晩、東光寺で音五郎さんから、旦那と同じ

かに話しあつてみねいかと云われたとき、すぐさま応といえなかつたのは、今度のことについて返りにも俺たちが詫びを入れたがつてゐる、そんな案配にとられやしねいか・・・

長右衛門 そんなつもりは毛頭ない、と云うんだな。

彌右衛門 ございません。益も彼岸にも節期にもご挨拶にあがらなかつた俺が、今日伺つたのは、お察しのとおり二月二七日お云

渡しの小作物収納の件にからんで、上等裁判所への控訴をお考えになつてゐたもんで、もしそいつが真正なら曲げてお取りやめねがいてい・・・

長右衛門 出すぎぎぞ、彌右衛門！

彌右衛門 お言葉ですが、ここにいるのは旧戸長役場で旦那の補助役をおおせつかつていた冠彌右衛門ではございません。真土村小前六六戸惣代としての彌右衛門が、対等の立場で松木長右衛門さ

んと談合申上げてゐるんでがす。

長右衛門 一本とられたな。・・・またいい、続ける。

彌右衛門 勝ちに酔つてるとか、旦那はさつき云わしたが、小前一統の実情はそんなどつてござりません。借財のために家財着類はおろか牛を日傭に、娘を茶屋奉公にだし種籽、種譜まで食いつくしてゐるありさまで、ここでもし控訴されとなれば、戸毎の難儀はもとより、真土全村の荒廃は目にみえております。

長右衛門 だから、初審に服しろといふのか。種譜種籽まで食つてしまつた揚句、おのれの子まで売りとばしてしまう、そういう人間の風上にもおけぬ奴らに、もう一度土地をバラバラに分け与えろといふのか。

彌右衛門 分け与える？

長右衛門 きさまの云いたいことはわかつておる、わしに譲渡した三七丁歩の耕地はもともと小前の質置したもの・・・

彌右衛門 横浜判決は譲渡をみとめておらねい筈・・・

長右衛門 東京の控訴審ではふとめさせるつもりだ。

長右衛門 ・・・じや、どうもつても旦那は。

長右衛門 彌右衛門、利発なまきにはわかる筈だ。わしが慶應元年

長右衛門をついでからすすめてきた経営が、農民のくらしをよくしてきたか悪くしてきただか、実際にそちらして考えてみろ。享保年間からここに伝わつた甘藷に改良を重ねて以来、急者でない限り餓えることはなくなつたぞ。むずかし堀を掘りあげてこの方、水争いで怪我人をだしたことがあるか。・・・土は生きものだ、馴者によつて生きも死にもする。今更流れ地になつた土地の所有権に汲々してなんになる。名をして実をとれ。小作として精励す

る百姓をわしが見殺しにするとおもうか。

彌右衛門 土を生きもんだと云いなさる旦那にや、百姓が生きもんにや見えてねいんだ。

長右衛門 なに。

彌右衛門 一本一本バラバラにめえる立木でも、なれが吹きや北へ根っこをはる お天道さんをしたつて南へ根のばすもんだ。・・・且那にや愚昧にしかめえねい百姓にも、ひとりひとりの中に、てめいの料見が、いいかえりやご一新へののぞみがあるんです。

市五郎 旦那さま。

長右衛門 む。

市五郎 ちよつくり、温度ばかりを。

長右衛門 諸の苗床か。

市五郎 へい。

長右衛門 しかたのない奴だな、苗床の温度なぞ手を差しこんでよめないようでどうする。いつまでも、山場の百姓ちゅうことでもおじしてたじや、この彌右衛門に笑われるぞ。

彌右衛門 お前さん、どこから。

市五郎 律久井でがす。

彌右衛門 ちよつくり、見てあげよう。

市五郎 そら、どうも・・・

長右衛門 までまで。小前惣代に苗床なぞじらせると、あとのた

たりが怖ろしいぞ。

彌右衛門 (笑う) はずれ、利息をつけて。

長右衛門 諸といやつは、その利息が大きい。・・・どうした、道次郎は。

市五郎 若旦那は、お云付けで小田原の車大工とかへ。

長右衛門 まだ戻らんのか。・・・彌右衛門 手車をつくらせることにしたのだ、こいつが出来てきてみ、天秤だの背負籠だのばか氣で便えんぞ。

彌右衛門 手車を・・・

長右衛門 そればかりじゃない、牛か馬にひかせる車のことも研究しようと思つたるのだ。せいぜい平塚、藤沢あたりへ連んどつたことの甘藷を、横浜から東京へ売りだすことも、そなればできる。

市五郎 夢みていな話だけんど・・・

彌右衛門 天秤さえあつれいかねる俺らにやの。

長右衛門 だからこそ、零細な小百姓が分立して、おのがじし狭い経験にしがみついてやつておつては駄目なのだ。抜本的な農業の改革・・・たんに農法だけではなく、この農村のしくみ、經營のこゝさにわたつて真の改革を行うことが、結局はかれらを幸福にするのだ。・・・真土六百の百姓の中で、ただ一人松木家の文庫蔵へ出入を許された程のきさまで、この理がわからぬ筈はあるまい。

彌右衛門 進歩をとりふれ、旧弊をあらためる大切さは申すまでもねいって、ただ・・・

てたりはしなかつたぞ。戸、区長の職権を用ひもした。改革をさ

えたのは、すべてその権力だと云われれば異論もあるが、かりにその力を用いて何の差支えがある。・・・・わしは断髪令が出るや、直ちに戸長の職権で村中のまげを刈らせてしまった、そのため怨みの声をききもした。しかしどうだ、今度の訴訟沙汰になって以来、もう一べん丁まげを結おうといふ莫迦者があるか。

・・百姓どもに、自ら改革を生みだす意志も力もない以上、権力

の威圧を以てそれを与えても結果は一つなのだ。

彌右衛門 旦那にや判らねいんだ。上からおしつけていきや、なるほどその一つのことはできるか知れねい、けんどそいつアそれ切りだ。・・・ところが、おらたちが手前で思ひたって手をかけりや、一つじや終わんねいです。・・・かりに旦那が四七丁歩の耕地ひとりじめして、どんな立派な計画たてたところで、働かされる俺たちの料見てもんが生きなきや、いつかそいつは荒地になつちまします。

長右衛門 そうか。本当にそななら、きさまらに動いてもらうのはやむるべきだな、彌右衛門。

―― フミ登場

フミ あなた。・・・(長右衛門に囁く)
長右衛門 む。・・・彌右衛門、これ以上の談判時間の無駄だろう。

百姓のど一新とか云つたな。西郷隆盛も城山に自刃して、政府の
幕僚はすわった。・・・御一新は終つたぞ。(去る)

フミ (行きかける彌右衛門に) 彌右衛門さん。男の子ときいた

が、ややはまか。

彌右衛門 へい、おかげさんで。

フミ 見舞うわけにもいかぬが、おふみさんを大事に。お戻りにこれを・・・(風呂敷包を様において去る)

彌右衛門 かたじけねいこつて。

―― 市五郎、彌右衛門退場。

―― 庭の隅にいた松木素三郎、出てきて風呂敷包をひらく。大張子である。

―― お前とならばどこまでも
親を捨て

この世が闇になるとも
親を捨て、この世が闇になるとも・・・

―― 彌右衛門戻つてくる。素三郎をみて立ちどまる。

素三郎 (大張子を脇脱におくと、木刀をつかんで裂帛の気合) た
ツ!

彌右衛門 あ!

―― 茶を奉げて来かかったフミ。

フミ 素さん!

素三郎 下郎、もつて行け。

フミ 何んといふことを・・・

素三郎 もって行かぬか。

フミ はい。・・・ (去る)

長右衛門 弼右衛門、つぶれた犬張子をとりあげ、一揖して去る。

素三郎 嫁さん、忘れてもらつては困る。仇ですよ、あいつは。

(去る)

奥より田村訥米、長右衛門。
＊ 代理人 新潟県平民

田 村 いや、あんたという人は驚いた人だ。これほど有力な証拠文をもつていながら一言も我輩に洩らさんとはねえ。

長右衛門 洩らさぬなどと、君。

田 村 全くひどい男だ。しかも、為取換証書だぞ、これは。ねえ吳さん、油断なりませんぞ、こうじう且那さまにかぎつて大儀、小田原あたりにとんでもないものをかくしていかねない。

フミ あなた、何を・・・

田 村 ハヤヒヤ、これは冗談。・・・しかし、奥さんにもよろこんでもらわにやなんらんですよ。横浜初審でついえさつたかにみえた、松木君の真土村・・・いや、大住郡改革の凶面が生きかえるその大きな可能性がでてきたのだから。

フミ やはり、あの、辯訴を・・・

長右衛門 フミ、お昼飯はここでさしあげる、惣助に云いつけて鰯でもつくらせる。

長右衛門 可能性と君は云つたが・・・
田 村 可能性じや手ぬるいか。だが、法曹の世界では九分九厘の可能性にも絶体としら云ひ方はせんのだ。・・・この二つの文書の趣旨は、無期限質地の契約に基き質受人の名で届け出て所有権を確保しても差支えない、又名儀書き換えはすなわち質流れになつたのだ、ということを明らかにしているし、為取換証書になつてゐるのは双方承諾の上で作成されたことを示している・・・

長右衛門 それは親父のはからいで・・・だから一審の際これをもちださなかつたのも、作成過程での、いわば・・・

田 村 印鑑の盗みおしか。

長右衛門 そうはつきりはなんだが・・・疑いをうけて裁判所の心証を損つては、と考えたのだ。

田 村 君はまだ、警察署あたりのいわゆる心証が、横浜法廷にひびいとるかに考えておいでらしいが、裁判行政などといふものはそんな子供じみたものじやないよ。・・・我輩が塙谷君に勝ちをこされたのは、弁説でも法解釈でもまして俗世間の通念である正義不義などじやない。何か、曰く、証拠。質地をして流れ地と判定せしめるに足る客観的証拠がなかつた、これさ。・・・しかし、今度はちがう。(立つて) 一泡ふかせるぞ。・・・一局かとむか。長右衛門 む。

越すに越されぬ大井川
越すに越されぬ 大井川

田 村 証書作成過程で、ご隠居はどうとやら云つたな、君。

長右衛門 親父としては・・・
田 村 忘れちまつてくれ、そういうことは。我輩も聞かなかつた
こととする。

長右衛門

暗転。

(5) 落月啼鳥

明治一一年九月三〇日、午後。

東京上等裁判所。

暗い中で裁判官の読みあげる判決文がながれる。

明治六年田畠名寄帖も右同様なる事にて、原告所有地の中に
平井三右衛門分とあるを、末に至り三右衛門へ売り戻すと認め、
又高橋庄右衛門分とあるを、末に売戻すと認め、伊藤兵七分と

あるを末に兵七に売戻すと有之、果して誰某分とあるを質地なり
とはば、何ぞ売戻すと記載する謂あらんや、・・・又質入の

地は、別に誰某より質入増と記載有之旨申立るも、右誰某分とあるを売戻すとあるを見れば、既に質流地と相成りたるものと旧名寄帖によつて誰某分と記載せしものと相見、明治一〇年地券書換の節には、売買名儀を以て願出でたるを見れば、右誰某とある記載、又は質取主に対し書面を以て該訴論地は質流地に非ざる確証と為すを得ず・・・第四条・・・右条々の理由なるに付き、原告呈供せる地券は則ち質流地となりたる証拠となるものに付、被告に於て質地受戻の要求不相立候こと・・・明治一一年九月三〇日・・・東京上等裁判所・・・

裁判長！ 裁判長！

異議あり、裁判長！

待ってください・・・ちがう！

そんじや、俺たちやこの先、たちゆかねいんで・・・

裁判長さま、お慈悲を、お慈悲を！

お助けを・・・裁判長さま！

扉の重くしまる音。

舞台明るくなる。かみ手に階段、しも手に大玄関のあ
る裁判所の口ヒイ。

朝右衛門、伝次郎、新七、平兵衛、小左衛門にかこま
れて、高橋重蔵米。

米代人、滋賀県士族。

高 橋 要すれば第一条は、明治五年大蔵省達し第一二一號、第八三
號等によつてだな、地券は地所所有者の確証であることを充分達

してゐるのだから、知らぬとは考えられない。地所質入の契約は

どうあれ、地券といふものは所有者が誰かを証明するものだ、と
いうわけだ。だからこの論法でいくと、あさむこうと盗もうと、

松木が地券をもつておる以上、土地は松木のものだ、ということ
になる。

伝次郎 そんな先生、はかな・・・

小左衛門 俺たちが法律の趣意にもとつてゐるから、そんだから原
告も被告も五分五分だちゅうけんと、そいつ知らねいのいいこと
にペテンにかけるために、法律の趣意を曲げたあいつと俺たちを
一緒にして、そんでは先生・・・

彌右衛門 小左衛門さん。

高橋 ・・・ 第二条、といつも簡単だ。むこうの証書に、從来
質流地になつた分云々とあるからには流質がなかつたとは云ひき
れぬ、増金上借りをうけても双方承認すれば流地することはあり
得る——何でもありうる、考えうるだ。おまけに、地券は所有者
の確証なのだから、流地となつたか、それを承認したかでなければ
被告が地券はもつべきものだ、というのだ。それがそうでない
以上、地券をうけた松木の所有と認める。

平兵衛 小むずかしいことをうたつてると思つたが、そんな理不尽
云つてなすつたのかい、あの裁判官さまア。

高橋 地券下調帖や名寄帖の肩書についても、まるで松木の云い

分通りだな、もし肩書に誰某分とあるのは質地だときめれば、ど
うして売戻すと書いたのか、すでに質流地になつたものを、旧

名寄帖では誰某分と書いたのだろうと云う見解で、去年の地券書
換を売買名儀で願いでてるのをみても、誰某分とあるからといつ

て、それを質流地でないといふ証拠にはできない・・・以上三点
が・・・

階段を下りてくる田村、塩谷。

田村 ・・・ では。

塩谷 あ、高橋君、ここへ。まだ若いものだで、何かと面倒みて
やつてくれたまえ。

高橋 滋賀県士族、高橋重蔵です。何分よろしく。

田村 田村です。折角のぞ尽力に拘らず遺憾でしたな。

―― 田村、去る。

彌右衛門 先生。

塩谷 残念だぞ、我輩も、対審では、慎重に聽いてくれたのに。
・・・ どうみる、高橋君。

高橋 決定的なのは、あの二つの証文でしよう。

塩谷 む、ああいりものが為取換証書になつてゐるなんてことは
考へてもみなかつたな。

小左衛門 そんなもの書きを覚えねいぞ、なア彌右衛門さん。

平兵衛 あの頃は、松木屋敷の戸長役場にザル吊るさつてて、手前
の認め用がありやそこさ行つて擦してただわなア。

高橋 ザルに認めを。

伝次郎 百姓にや印鑑なんて、戸長役場ででもなきや用なかつたで。
新七 おらも、新証拠ちゅうて二つの証文がでたときはたまげた

が、やっぱり、あのころちやんと作っておいたにちがいねいわ。

沈黙。

高橋 それにしたって、君、証書は交換しているんだぞ、単純な偽造とは訳がちがう。

彌右衛門 俺たちもへえ、考えてみなかつたことです。・・・先生、おらたちやどうやら、二つの思いちがいをしましたま、今日まできてたようです。ひとつは、松木の魂胆ちゅうもんがこれほど深いのに気がつかねいできた、いくら何でもおらたちや、女房子供の喉首をしめるようなしめ殺すようなことまでは・・・どこかでそう思つた。もう一つは、裁判所ちゅうものは不正をこらしめて正しいものを守つてくれる。・・・何を小学生徒みてないと笑われるからしけんが、心底そう信じてきた、それがどうやら、そんなものじやねいのに気がついだです。

高橋 そこだよ、冠さん。・・・三権分立などとお題目は立派だが、藩閥政府に牛耳られた裁判所に、眞の人民の正義を・・・
塩谷 そういうことではないだ、高橋君。いや、まさにそういうことなんだが、さつき訊いたな、今度の判決をどうみるかと。
我輩の考えではこの判決は謂うところの藩閥政府が、農民全体につきつけた果たし状だ。全国不平士族の鎮圧にあって、後門の狼一百姓一揆をそれぞれ地租率を二分五厘に引き下げた政府は、西南戦争の勝利で本来の目的を達した訳だ。・・・冠君の思いちがえたという二つの、もう一つ上に百姓をおさえしぼりとつっていく日本の農業行政の大きい転換がはじめられようとしているのだ。

彌右衛門 塩谷先生。卒直に伺わせていただくが、眞土村小前のおらたちにや、どんな生きる道が残つてゐるでしようか。・・・おっしゃつてください。

塩谷 大審院への控訴か、示談による解決。

彌右衛門 ・・・その他には。

塩谷 生きる道と云つたな、冠君。

彌右衛門 ・・・

塩谷 生きる道は、その二つしかあるまい。

——塩谷、統して高橋退場。

小左衛門 彌右衛門さん。

平兵衛 おらア、へえ眞土にや帰れんぞ、

新七 彌右衛門さん。・・・おらたちや、お前が頼りだぞ。お前が一
しっかりとしてくれりや、おらたちやついて行くで。・・・どこま
— でも、どこまでもよ・・・。

彌右衛門 ・・・

——階段をおりてくる長右衛門、歩みをとめる。

長い沈黙。

——こらえきれず、長右衛門に突進しようとする伝次郎を

彌右衛門がだきめとる。

——外から、市五郎。

市五郎 旦那様、人力が・・・(立ちすくむ)

暗転。

所の人は時間でことがまるで判らぬ、夜明けからきてるの石段に坐ってるんですからねえ。

—— 女中去る。

①かけこみ訴え

—— 明治一一年一月一八日、暮方。

—— 横浜住吉町、旅籠宿山崎屋。

—— 山崎屋主人、高野与七、机に向って書類をかいてゐる。

—— 代言人、高橋登場。

与七 で、どうなんでしようね。

与高 橋 司法省か。

与七 駄目なんですか。やっぱり。
高橋 取りに受付で筋ちがいだ何だでガヤガヤ騒いでいるところ
へ、勅任官・・・いや、委任官でもいい、誰の某が来かかる、何
とか、は、実はかくかくしかじかの訴えで大住郡真土村小前
の者共が・・・どれどれ、その訴状見せてみじ。・・・といつた
具合にいけばなア。

与七 それは、先生・・・

高橋 針のメド、馬に乗つて通るより難しきな。
与七 私はまた、塙谷先生には・・・

高橋 塙谷先生、少なからず扱いかねてゐる節がある、僕のひが
目かな。・・・しかし、塙谷ならずともどう云える、あの連中に、
無駄とわかつていても、やらせてみるしか・・・

与七 昔なら鶴籠訴、さしずめはりつけ獄門ですか。・・・幸先
のいへようによると云うんで、家内が赤飯をたいてあげたら、胸が一
杯だらけながらおひつを空っぽにしなすつたそうで。(手を叩)

—— 時計が五つ鳴る。

高橋 (笑う) 百姓って奴は、底が知れないな、いや、胃袋ばかりじやない。
与七 (入ってきた文中に) じやこれを渡してな、役所つてとこ
ろは朝九時にならなんど始まるんだからって、よく教えてやんなさう。 在

高橋 待てよ。
与七 へえ、こう運ひつてはうのは、ひよつとして先生・・・

—— 与七の長子、啓次入って来る。

与七 降りなかつたか。

啓次 おいでなさいまし。・・・停車場で最後の客まで見たんで
すがね。

与七 かけ込み訴えが上首尾にいつたんじやなかろうか、そう云
つてたんだよ。

啓次 それだといいんだが・・・もし、うまくいったら伝次郎さ
んだけ先へもどつて、途中戸塚へ泊つても今日中に発つて話だ
つたですかね。

高橋 むこうで、二手にわかれなきやならなうてことも考えら
れるがね。・・・こんな心配してゐるなら、無理しても一緒につい
て行つてやりやよかつたを。

与七 そやは云うけど、二年前の夏はじめて代言人をさがしに來
たころからみると、鶴右衛門さんなんぞみちがえる程大きくな
なすつたよ。

高橋 六六戸、何百人かの生命をしよわされてるんだからな。

啓次 その鶴右衛門さんが、かけ込み訴えといひ、これ程の大
事にどうして自分で来なさらんのか、私にや不審なんですがね。

与七 むこうの差配も容易じやなかろう。松木がかけてよこした、
三年分の小作料延滞分、裁判費用しめて二千三百なにがし、その
他の借財が三千五百両・ちょっとやそつとでぬけきれる金額じや
ない。松木は示談にも応じないそうですね、

高橋 大審院へもちこむ力がありや、為取換証書偽造の証拠をあ

らつて、こいつくつがえせないもんでもないんだが・・・

啓次 そういうおされ方して、あげくどうなります、先生。

高橋 屈服するか、爆発するか。

—— 沈黙

—— 啓次 おや・・・（立つて廊下へ）お帰りですよ、お父ちゃん。
与七 よかった、よかったです。

—— 平兵衛、伝次郎、小左衛門、そして倉吉。

高橋 ・・・通らなかつたか。

—— 沈黙。

倉吉 じゃ、たしかに客人三人お届け申したんで、よろしくひと
つ。

与七 お前さんは・・・

倉吉 へえ、この客人衆と同郷のくいつめもんで、屋すぎで一
しょんではぱつたり、・・・浅橋から身投げでもされたんじやとま
ア、暮れがたまで錦魚のウンコでくつづいてやしたが、いい案配
にこちらさんへ戻ると分別してくれたもんで、案内して参りました。

倉吉 残アごめん蒙るけど（懷中から財布をだしして）

伝次郎 前に おく） いくら入ってるかわからんねえが、旅籠賃の足しにでも。

倉吉 こんたこと、お前・・・

倉吉 遠慮されるような金じやねえ、余ったらうちの婆に・・・
たのまア。柄でもねえが、俺のたのみだ、何も考へねえでまっす
ぐ、まつすぐ真土村へ帰っておくんなさう・・・じや、どちらさ
んもまっぴら。

与七 まアじいじやないかね、お前さんも一緒に・・・

倉吉 折角でやすが、この風体じやお通夜の席にや並べませんの
で。（去る）

高橋 お通夜か。・・・何者だね、あれは、

小左衛門 村の小前の伴でさ、親父はとっくに死んで、弟もへえ西

那さんのいくさで名譽の戦死・・・

伝次郎 妹がいましたが、これはつい先月・・・

与七 なくなったんですかい。

伝次郎 いえ、茶屋奉公に、へい。

—— 啓次、巡査二人。

啓次 こちらにや、そんな人は・・・

巡査1 退け、退かんか。

与七 をなごとです。

巡査2 お前ら、何じや。どこからきよった。

与七 この方たちは、平塚から見えたうちの客人ですが・・・何
があつたので。

—— 巡査たち去る。

高橋 泥棒の弁護はしたが、片棒かついたのは初めてだ。（財布
を伝次郎に渡す）・・・あの大将の云いぐさじやないが、まつす
ぐ村へ帰りたまえよ。今だから云うが、司法省が筋がいいで受けつけ
んのはいわば当然、万一の望みをかけたにすぎんだから、あ
んたらの責めをおうべきことではなし・・・皆に申説けな
いなどと思ふこまないようだ。

巡査2 お主、向うを探がせ、別の部屋じゃ。

高橋 待て！ 無礼だぞ、おひ。

巡査1 何か、君は。

高橋 僕は代言人、高橋重蔵、滋賀県士旅。捜査もじいが、理由
あらわずに他家に踏みこむ法はなかろう。

巡査2 や、そういう身分の方とは知らんで無礼仕つた。実は巾
着切りの訴えがあつたもので。

平兵衛 巾着切り・・・？

高橋 （笑う）怖いですよ、町場は。

巡査1 この宿に入つたのを見たという者がおつて。

与七 啓次、部屋をご案内してお調べねがいなさい。ただ、ここ
は役所関係のお堅い官員さんが多いから、町董におつしやらん
とあとがうるさいことになるで、お気をつけて。啓次・・・

巡査2 何かの間違いそ、こんとこに逃げこみやすまい。・・・
や、失礼申した。

高橋 お役目ごくろう。

与七 本当にそうだ、あんた方、大役はもう立派に果しなす・た

のだから、狭い料見おこしなさんな。賽翁が馬とも、七転び八起
きともいうが、人間いつまでも災難がつづくものかね、正直にや
つてしまえりや必ず笑えるときがくるんだから。・・・何もな
が部屋に仕度ができるてよう、くつろいで一杯やつて明日は元氣
のいい顔で発つておくれをさい。

小左衛門 いろいろ、ありがとうがした。

平兵衛 ・・・けんども先生よ、おらたち三人がしよう責めじやね
ひつて云つてくれをつたけんど・・・もし、しようことができり
や、へえ、はりつけにされても本望ちゅうこつたべたア。今日は
三人でへえ、そのことつきり話してただわ、なア・・・。

富五郎 石川儀左衛門さん、三上長五郎さん、新倉嘉兵衛君・・・
嘉兵衛 僕ばかりア、君か。
農婦 何、大風呂敷しよつてきただよ。
嘉兵衛 おらとこの婆ちゃん、諸よこしたで。
兵右衛門 孫寄合にだすが心配で、弁当つけてよこしたか。
別の農婦 これじや、三かたきもあんべいに。
農婦 おうよ、自分とこの食扶持削つてよとしただよ。
長五郎 孫ハチブされると不びんだで、つけとどけだ、なア。
兵右衛門 誰ハチブする、僕の側さまへ、可愛がつてやるだわ。
嘉兵衛 誰がいくか。
弁 廉 じや、辞儀なしによばれるか・・・
兵右衛門 そら、誰がそのセリフ云うかと思ってたら、やっぱり弁
さんだつたな。・・・しつだつてお前は辞儀なしによばれんだか
ら。

弁 廉 だつてお前、せつかく・・・

兵右衛門 やいやい、つかんだ奴戻すこたアねえだろ、今興クソほ
じつたばかりの手じやねいかい。

富五郎が新着の農民を案内してくる。

(8)

風

暗転。

明治一一年一一月一九日、夜。

真土村、冠彌右衛門宅。

戸外にはげしい木枯しの音。

座敷から土間にいながれる小前の人々。勝右衛門を

はじめ、主だった顔ぶれがみえるが、前景の三人は

まだ帰着せず、峰松、富五郎等の若者は戸外の警戒
にあたっている模様。

佐次兵衛 そういうお前は又、えらく太えのとつたな、いくらお前
のがおんがつても、そいつにやかなうめい。
兵右衛門 そのかわり、味がええとよ、伊藤の爺さま。

笑い。

元良入つてくる。

元 良 やれやれ、かけ込み訴はお取上げねいやうし、六千両の算段で首くくる相談かと思つてきてみりや、ははア、いたな、のれん師。

兵右衛門 だつてよ、先生。塩にや税金、煙草にや税金、醤油や菓子にも税金かけようつて時世だぜ。税金のかんねいのは莫迦話ぐれいなもんだべ。

農婦 おつ鼻かわいがる分にやかんなかんべよ。

兵右衛門 だから百姓はバカだちゆうのよ、鉄砲ぶつにやちやんと税金とられるだわ。

笑い。

兵右衛門 みろ、お前ら莫迦云うから、彌右衛門さん困つてどざらア

安五郎 兵さん、宗五郎さまの祠へ行つて謝つてくるだね。

新七 では、始めるべか。

所左衛門 そうだな、若え衆よびこんでくる。

嘉兵衛たつて、富五郎、峰松らをつれてくる。

彌右衛門 司法省への訴状をもつて、東京へのばつてくれた小左衛門さん、平兵衛さん、伝次郎さんも追つつけ帰つてみえる筈だが、

連絡に行つて一足先に戻つた兼さんからあらましの話を・・・

兼 吉 不調法だが、では。・・・寄合いの知らせで廻つたとき、あらかたの衆にや伝えただけんと、司法省へのかけこみ訴えは、やつぱり駄目だつたそうです。いかな事情があるにしろ、筋ちげえの訴状はうけらんねい、正規の手続きとつて大審院さ行けの一
点ばかりで、ことわられたそうです。

兵衛 何ともものわかりの悪い、その何とか院さ行く金ねいから
儀左衛門 教えてあらわねえでも、筋ちげえははなつから承知だに。
兼 吉 小左衛門さんがた、えらく氣落ちの容子で、村へ帰つてあわす顔がねいって何度も云いなさる、だもんで俺ア、皆の衆がそのこと察しておらをよこしただちゆうて話したら、喜んでへえ、泪こぼしていなすつたです。

佐次兵衛 眇目なもんなら、へえ誰が行こうが変りやねい、あの衆にやふんとご苦労かけたちゆうことよ。

安五郎 司法省のことは、彌右衛門さんから話があつたとき、僕は多分駄目だろうと云つたんだが。

風の音。

彌右衛門 惣代におしだされた俺の口から、こんなこと云うのはふんとに不甲斐ねいが、皆さん、もう万策つきました。・・・いま安五郎先生が司法省はきつと取あげちやくれまい、そりや判つてた云われたが、おら千に一つの望みをかけてきた。そりや、おかみの事務の上じや筋ちげえかしれねいが、おかみの役目が俺たち

人民の私窮を救う事とすりや、棟にとどんだ事でござりだつたり

—— はげしい風。

やなざるめい・・・上等裁判所の判決で煮湯のまされたばかりだ
に、廿六といわれりやその通りだが、おらたちの生きる道はその
他にやなかつただから。・・・今日まで何十回もくりけいし話
してきたように、小田原裁判所判決の小作料千六百円、訴訟費七
百円別にしても、三千五百円もの負債しよつてゐる現在、どうあが
いても、大審院への上告はまちがいなく勝つといふ太鼓判がおさ
れねば以上できることじやねじ。・・・その太鼓判は、塩谷先生
高橋先生ともについちや下さらなかつた。

新 七 そりや、つけるもんじやねいだわな。

彌右衛門 塩谷先生は、俺ら小前のためによくたたかってくれなす
べた。試とくすぐでできるこつてねい。だからこそ横浜じや勝つ
ととこできた。・・・あんとき先生は、これは弁護の力じやねい
お前らの云い分が正しい、松木のやつたことが不正だ、だから勝
つた。正義だから勝つたと云ひなすた。俺らもまたそう信じた
長い百忙の夜があけたんだ、竹槍むしろ旗に命をかけても通らな
かった道理が、ど一新のおかけでまつすぐ通ることになつただと。
・・・いまにして考えると、こりやまちげえでした。

初審に勝てたのは、先生の弁護と、それをささえる俺たちの証拠
がつよかつた。東京では、そいつをひっくりけえす松木側の、偽
の汚れた証拠の方がつよかつた。その上、土地をつくりどりする
小前の手に、とう明治四年このかたの制度を反故にしようとする
る政府の鬼胆が、裁判所のうしろ側にちやんとあるだぢゅうこと
もふらたちや教えられました。

彌右衛門 そこでもし、大審院に控訴するとしたら、俺たちの云ふ
事が正しいとか道理だとか血の出るようなねがいだとか、もうそ
んなものじや屁のつぱりにもならぬい。・・・松木のあちだし
を取かわし証文が、おらたちの目をかすめて、あのザルの中の印
鑑をぬすみ捺しして作られただといふ、たしかな証拠が要ります。
・・・惣代の者がより合つて智慧しほつたのもそことだ。しかし、
訴状に書いたような真正事實はいくらでものべられるけれど、そ
れを説明することはとうとうできなかつたのです。・・・上告が

のぞめねい以上、のこされた道が示談しかねいこと、それで洗い
ざらい集めた二百円をもつて松木へ行つたこと、そいつ蹴とばさ
れたことは、皆さんもう・・・

新 七 彌右衛門さんが止めてくれなきや、ふんとに俺ア奴とさし
ちげえて・・・小面憎いのなんのつて。

峰 松 嘗さん、俺ア・・・
彌右衛門 まだ、峰松。・・・お前の話きいてもう前に、皆には
からにやなんねいことがある。

弁 裁 そうとも、へえそのつもりで来てら、おら。
兵右衛門 いつちよ賑やかすかア。
富五郎 しー、誰か・・・

佐次兵衛 小左衛門さん方だべ。

→ 皆、静まる中を、小左衛門、平兵衛、伝次郎の三人。

んべ。

佐次兵衛 徒党を解いて、それからどうやるうちゅうだ、お前の腹
は。

小左衛門 皆の衆・・・

平兵衛 おらたちの力が、へえ足んなくって・・・

佐次兵衛 そうじやねい、そうじやねいぞ。

農婦 ご苦労さんでした。

彌右衛門 ご苦労かけました、お礼申しますだ。

元良 誰か、湯をついでやつてくれ。(まわりの協力で三人に薬
を与えなどして休ませる)

彌右衛門 三人の衆が帰つてめえたで、改めておはかりするだが、
上等裁判所に被告として名をつらねた一八人、また被告同様結束
あとおしつくだすつたご一統の衆、今夜をきりにこの結果を解いて
いただくと共に、初審この方役に立たねいことが多かつただが、
高橋新七さん以下俺までの惣代を免じておもれいしたいのです。

何だつて。

農婦 そんな、やみくもな・・・

所左衛門 お前もへえやりにくいくたアわかるが、ここでお前らに
投げだされたら俺たちや明日からどうしるだア、ああ。
長五郎 かたまつってきたからこそ、今日が日までやつてこれただぞ
俺たち。

兵右衛門 これから、もっと大変になつかろうつてときには、一味解
じてどうするだや。

富五郎 俺たちも反対だ、こうなつたらへえ生きるも死ぬも一緒だ
べ。

伝次郎 惣代はかわるとしても、結束は守らなければしようがなか
く。

安五郎 きかせて下さり、計画があんだんべ。

彌右衛門 明治九年の夏、杭うち騒ぎで一本松につまつたあの時
以来、質地とり戻しは法律の力か、穏当な談合でしていく、又で
きるといふ考えですすめてきたのは、皆さん知つての通りだ。

一 おうよ。

儀左衛門 それがあうへえ、駄目になつたちゅうことずら。穏やか
にやりていにも道は全部あさがれちまつただから。
彌右衛門 ところが、一つだけ残されてる。

一 風の音

所左衛門 残されてるつて・・・そりや

小左衛門 どういうこつた、彌右衛門さん。

彌右衛門 俺たちがバラバラになつて、ひとりひとりで松木と示談
する。小作料、裁判費用のこともふくめて、とにかく松木にすが
りついてみる。徒党してたじや、うんと云うまいか、ひとりひと
りになりや奴も・・・

富五郎 そんなことができねい。

弁蔵 とんでもねいこつた。

一 そりとも。
兼吉 ひとりだって、ひとりそつてうねいが、そんな卑怯未練な・・・

彌右衛門 兼さん、そんなこと云つちやいけねい。この二年あまり

の結束を見たって、誰ひとり卑怯未練な者のいねいのは知れたこ
つた。・・・ただ、俺たちが結束するにや、目あてつるものがあ
る。その目あては、おらたちの思惑のようにやいかなかつたが、
終つただ。

平兵衛 そりや終つたじやねい、今から・・・

彌右衛門 今から新しい目あてをたてるとしたら、結束のしかた、
党のつくり方も変わるでしよう。・・・人それぞれの考え方があり、
都合があり、女房子供ふた親の心配もある、死ぬよりも辛いが、
それ考えりや松木の門くぐるしかねい立場もある筈です。・・・
いま、俺たちの結束は解きましたで、どうか遠慮なく引きとつ
くだせい。・・・ただひとつだけ、約定ねがいてい。それは、あ
とに誰が残らうと、その名は決して渡らしてくださいな。

――彌右衛門、燭台の灯を吹き消す。

――閨――
――はげしい風。――

(6) 主と朝寝が・・・

――皆の衆、許してくる。・・・おらへえ、彌右衛門さんが云い
だす前に、こっそりがやまのところへ詫びに行くべ・・・そ
う思つていただ。夏からずっと鼻にやっこまれるし、年より
子供のひもじがるさま見てて、もうへえ精も根も・・・おら
とんでもねい料見ちけえしてただ。・・・勘弁して、あたら
しい党に入れてくろ・・・

イシ お前、迷わねい者がいるかよ、・・・おらたちア、鬼でも
夜又でもねいだもん。

峰 松 きいてくれ。松木の鬼はな、彌右衛門さん、新七さんら惣
代衆だけは、どうでも耕地をひきあげて、身代限りさせてやる。
・・・裸で真土村から叩きだしてやる・・・女房子供まで乞食に
してやる・・・平塚のえびす屋で、裁判に勝つた祝儀の席で広言
したちゅうぞ！ イネがきて・・・泣きながら知らせてくれた
ぞ！・・・それでも、松木のところへ・・・行く奴があるか・・
・・・おるか！ 佐次兵衛 おりやせんわい、峰松。・・・真土村に、そような男が
・・・ひとりだつておるかい。

――つのる風の中を、――
――幕があります。――

第三幕 人の巻

——十月とせ 重箱さげてどこへ行く

私や卓比須講のお使いに

さが お使いに・・・

——音五郎、弁蔵、兵右衛門。

仲居 そんなら棟梁、そのお堅い話とかがおすみになつたら、よ
うござれ。

音五郎 おっとお辰さんや、それ、いつか話した、うちの村からな
にしてる。・・・

仲居 もあ、小菊さん。

音五郎 湯へじてる若え連中のなかに、幼なじみがいるんだ、今
夜一駄あけてやつてくん。

仲居 あの奴、思ひの池売れちゃつてねえ、都合つけでみましよ。
お座敷へよびますか。

音五郎 小学校で机並べて、子のたまわく習つた奴らがいたんじや、
時れぬしねえだらう。どつか小部屋あてがつてやろうじやねえ
か。

弁蔵 ましまいでえ。

兵右衛門 何ひつてやがる、稻刈りだ、諸ほりだつちやしめしあわ
せて、お見訪さまの裏紋あたりでちちくりあつてやがつたくせに。
仲居 後生がいいですよ、棟梁のようにおとと氣のある人は。私
があつちと若けりや・・・
兵右衛門 苦労がしてみていか。

音五郎 見けてくれ。

仲居 これだもの、ままならないねえ。

——仲居、小婢出て行く。

——十二月とせ、十二神楽をあげたし

お前があもぢであげられなし
ささ、あげられなし・・・

兵右衛門 まるで芝居もどきのセリフだな、音さん、お前の命がも
らひでござ。

音五郎 グンくそのわるい詰ひをせ。・・・お前たちも知つてのよ
うに、俺ア一五のときから家をとびだして、三河から浪花、信州一
から上州、氣ずい気まな旅ぐらしで、ずい分と親にや苦労かけ
てきた。ここでお前たちに一味して、この先乞食でもさせるよう
じや・・・ひじ考えこんじまつて、へえ、よござんすつて返答は
出なかつた。

兵右衛門 無理もねえわな、そりや。

音五郎 一緒にきた所左衛門さんは、向うにや子飼いの若え看もい
りや鑿刻の心得あるこつた、百姓だけで打入つて仮りに松木を
仕損じでもしたら、あとあと小前一統のわざわいになる、どうし

ても実際のいくさに出たことのあるお前が采配ふるつてくれ、と
こういう訳だ。

弁蔵 僕たちや云つただわ、音五郎さんが加担してくれりや百人
力だつてな。

音五郎 ところが、俺がシヤツキリした返答しねえもんで、そりや

——笑い。

—— 兼吉、嘉兵衛、富五郎、峰松、

無理はねえ、伊藤の爺さんが云いはじめたのよ。・・・ 音五郎は
今度の地所の係争にや何のかかわりもねい、俺たちとちがつて火
の粉かぶつてる訳じやねい、いわば他人のもめごとだ、それに命

がけの助人たのむのは、たのむ方がどだいどうかしてる・・・

兵右衛門 へえ。

音五郎 おまけに、音五郎はたとえ、手水場の下見のはりけいにし
ろ松木から仕事もらつて、仕事さしてもらやいつ時にしろ主だ、
主に家来が弓ひける訳がねい、こうも云いやがつた。

弁 咸 ふーん。

音五郎 そうまで云われりや、カーッとくるじやねえか。・・・ 俺
がいつ松木の家来になつた、てめえんとこの物置の下屋だつて俺
がおらしてやつたんじやねえか、このつんば爺い、大体俺がいつ

人さまの難儀だから片棒かつげねえつていつた。はばかりながら
俺ア命なんざ惜しかねえ、一八のときにや筑波の天狗党にまぎれ
こんで幕府の二本さし共にうち敗かされたり、十年前にも小田原
で彰義隊に味方して官軍の鎧ぎれに殺されそとなつた体だ、あん
時いつちまつたと思や、こんどのこたアお前たちから頼まれねえ
つたつて助けてやりてえんだ・・・

兵右衛門 棟梁、そりやかつがれただぞ。

音五郎 そうよ、俺の氣性よんでて、あおりやがつたんだ。だつて
お前、云いだしちまつたからにやひとつみがつかねえじやねえか、
承知しましたつて挨拶したら、爺いめ・・・(手を合わせる) 音
さん、こうだ、とよ。・・・ ありや佐次兵衛じやねえ、サギ兵衛
だ。

音五郎 なんだな、四ノ宮の鬚だるまが売れ残りやしめえし、そん
な恰好でふくれて並んでるこたアねえだろう。兼さんなんざ、有
章館の学問はともかく、恵比須館の方の学問じや先生格だつて、
安五郎先生太鼓判おしてたつけよ。

兼 吉 だつて今夜はへえ、校長先生がいんから、俺ア控えてるだ
に。

兵右衛門 そりや可愛いいお前らのためだから、いかにして女っぷ
りのいいのと安くあそぶか、免許皆伝してやつてもいいが、下等
小学校の月謝だつて、一月五〇銭を相当とす、と定められてるだ
からな。

音五郎 なアに、その月謝だつてかけ合ひようで免除の道があるだ
し、校長先生酔いつぶして秘伝盗むつて手もあらアな。・・・ 今
夜は、くどくいうまでもねえ、お前たちの初陣祝いだ。これで又
いつ呑めるか、神ならぬ身の何とやら、あとで悔やまねえようには
充分呑んどいてくれ。・・・ ただ、二つだけ承知しといつてもらい
てえ。壁に耳あり障子に目あり、蟻の穴から堀も切れる・・・ 酔
つてもこいつは忘れまいぜ。・・・ もう一つは、皆承知のように
縁あって俺も一味連判させてもらつた。伊藤佐次兵衛さん、井上
所左衛門さんからのお話で、俺の家族を先々二〇年間村方一統で
扶養するとの連判証文まで入れてくんnaすつた・・・ こうまでし
てもらつたからにや、俺も届託なしに采配をとらせてもらう。つ

いやア、その日、本懐とげるまで、お前ら若き者にやずい分と辛えおもいもしてもらわなきやならねえ。音五郎が云つてゐると思や腹もたとうが、一切合財あいつのせいで辛えんだ、そう思つて恨むなら松木を恨んでもらひてえ、わかつてくれんな。

富五郎 わかつただ、なア。

音五郎 さ、野暮用はこれでしめえだ。明日からの・・・じやねえ三年こしのしましましい訴訟沙汰のケリつけて。お、兵さん帖場へ一ぱしりだ。

兵右衛門 ほいきた！

——廊下をイネを従えた添田、来かかつた道次郎とあう。

イネ 先生、松木先生・・・
道次郎 む、・・・どなたかね、僕を先生とは。(酔つてゐる) や、先生はこちらか、お久しいことです。添田先生。

イネ こちら、有章館の・・・

添田 おり、松木君の。

道次郎 先生もますます、ご発展で・・・
添田 部長連中との懇談やら、地主方の請願やら、これも役目のうちだがね。・・・ところで、今度の上等裁判所の勝訴、何はともあれ、めでたいことだな。

道次郎 ・・・でしようかな。・・・伏竜、雨雲をよんだといふことになりますか。

添田 結構結構、志は高くもたねばなるまい。一介の官職に甘じておる我輩などには真似られんことだ。しかし松木君、あまりに

自れを持んで、人民の怨嗟をかい、政府の方策から逸脱するのは危険だぞ。

道次郎 雲にのって、昇天し、放しになる・・・

弁蔵 嘉兵衛、お前とこ冬仕度はすましたか。

嘉兵衛 ああ。・・・春になつたら、婆ちゃんひとりでへえ、どうしるか。

音五郎 生き残つたんだが面倒みるのよ、なア嘉兵衛。

添田 满四年にみたぬ区、戸長在職の間に、あれほどの改革をやりとげ本来その功績を高く買わるべきに拘らず、野村県令をして傲慢増長としか云わせなかつた所以は何か。そこを考えるとどうな。・・・国内ことごとく天皇の威に服し、富国強兵の明治がはじめようとしておる今、有用の資力、人材を政府が野におく筈もない。心くばり一つで道はひらけるのだ。

道次郎 聖代のかたじけなさですな・・・

添田 機あつたら、自重をのそんでおると我輩の意をつたえてくれ給え。・・・小菊、行くぞ。(去る)
道次郎 イネ変じて小菊となる。・・・当時そういうことになつておるのか。

イネ 先生は・・・
道次郎 先生はやめてくれ・・・僕は、ハハハ・・・とうとうえすばにやを見つけたぞ、鬚の生えた女子を。

イネ ご冗談ばかり・・・

道次郎 (不図出た相手の艶っぽさに眉をしかめて)・・・歴史の

轟々たる轍が、ひきつぶして進むのう、えすばにやも、昔のイネ
も・・・明治明治も下からよめば治まるめいと読めるじやないか
やつぱり治まつてしまふんだろのう。・・・達者でくらせよ。

峰 松 富五郎も助けてくれて、麦まきやへえ、すましといたぞ。
・・・焚木も昨夜はこんどいた。・・・灸が一番ひけんど、い
ちいち隣りに頼むんが切ねいって云つてた。おふくろさん・・・

—— 兵右衛門と共に、小婢、芸妓（とも云えなゐのが）
三人、賑やかな挨拶で入つてくる。献酬がはじまる
中で、

—— 来かかつた仲居、廊下のイネに気付き。

仲 居 ちよゞと待つとゞでよ・・・ (耳打ちする)

イ ネ 名。

芸妓 わア可愛い、このひと。ねえ一ついかが。

嘉兵衛 上せ、俺アへえ・・・

兵右衛門 そら始めやがつた、里子にやつた伴おもいだしたな。

芸妓 よして頂だい、まだ一矢らびですよ、こうみえても。

兵右衛門 ははア、太陽暦になつてから年ひろうのやめにしたな。

—— 仲居の知らせて音五郎、峰松を廊下にだしてやる。

芸妓 あらひどゞよ、棟梁、逃がしちまうなんて。

弁 藏 かわりつとめてやれや、兼吉

兼 吉 ひゞとも、矢でも鉄砲でももつてこう・・・

—— 座敷は賑わひたかまつてしまふ。

—— 三千世界の鶴を殺し
主と朝寝がしてみたゞ・・・

イ ネ こんなに手が柔つとくなつちまつた、また百姓ができるだ
ろうか。・・・お前、今夜は、とまれるんだね。

峰 松 ・・・
イ ネ (頬をすりよせて)・・・死んじやひやだ、死んじやひや

だよ、死んじや・・・

—— 暗転。——

戸を叩く音。

—— 霸右衛門、出て行く。

(10)

切 火

明治一一年一一月二六日、夜。

—— 真土村、冠彌右衛門宅。

—— 幼児の泣き声、添寝しながら くよくなふみの子守唄。

ふみ (むずかる幼児のそばに戻って) よしよし・・・友吉は男

だんべ、お父が発つてときに泣いたりしちゃいけねいだぞ、うん。

六つ村の鎮守さま

七つ成田の不動尊

八つ八幡の八幡宮

九つ高野の弘法さん・・・

—— ふみ、子どもをねかしつけると、立て新しい草鞋

をだし、かまちにそろえる。

—— 霸右衛門、戻って炉ばたに坐り、煙草を吸う。それから布団の幼児に頬をよせる。

ふみ 夕がた高麗山に雲がかかってたっけ、やっぱり降りだしたんだね。

—— 食事をしていた彌右衛門、立って椀を替えようとす
る。

—— 彌右衛門、草鞋をはき手用、脚絆をつける。

—— ふみ、みの、笠をしたくなる。

—— 再び戸を叩く音。

ふみ お待ち。(給仕する) ・・・ことしの正月、裁判もかたが
ついただし、来年こそは成田の不動さんから、宗五さまおまいり
しへって云つてたにね。

兵右衛門 (声のみ) 彌右衛門さん。

彌右衛門 おう。・・・おふみ、余計な怪我人を出しちやなんねい

で、何も云わねいでいくが。

ふみ わかってる。

彌右衛門 仏壇に書きつけが入れてある、帰らなかつたら読んでく
ろ。・・・まめでいろ。

ふみ 待って。

——ふみ、仏壇から火打石をとりだし、切火をきる。

——彌右衛門出て行く。

——ふみ、クタクタと崩れてむせび泣く。

——雨の音、はげしくなって、

——暗転。

(11) 長蛇を逸す

* その一

——前景につづく夜。

——真土村々域。

* その一

——舞台ホリゾント前、堤のこころ。
——遠く堤灯、ホリゾントを横切る。
——堤の上に、倉吉。俱利加羅もんもんの片肌をぬぐと

手ぬぐいで頬かぶり。愛用のヒロを抜きはなって、
うずくまる。

二人曳きの人力車、堤の上にあらわれる途端、倉吉

大手をひろげて阻む。車夫二人、仰天して逃げる。

——倉吉、捨てられた堤灯片手に、置去りの人力車に
むかう。名セリフは雨音（又は音楽）のためきこえ
ない。中からいきなり仕込杖の一閃・・・を覚悟し
て、ホロをバツとはねた。・・・誰も乗っていない
ボカン・・・。

——息せき切って、人力車を追つてきた拔刀隊のめんめ
んは、彌右衛門、兵右衛門、伝次郎、安五郎、音五
郎。

——倉吉の説明をきいても、一同すぐには納得いかず、
人力車の下、堤のあちこちを探したりなどするうち
に。

——中暮がおりると

——拔刀隊からおきざりをくつた佐次兵衛が、息ぎれる
する体をやっとひきすつてあらわれる。道ぞいの流
れから掌にすべつて、まさに年寄のひや水に喉をう
るおしている・・・
——そのわきを堤灯もちの市五郎に案内させて、長右衛
門が通る。

——ひょいと、両者の目があつて、あっけにとられた——

瞬の後双方バツととびのく。

——長右衛門が逃げた。市五郎が逃げた。いさかモー

ションがおくれたが、佐次兵衛が追う・・・といき

たいところで老人、ぬかるみに足をとられて見事に

転倒した。これ以上惨状みるにしのびないので、

中尊がおりると、

兵右衛門 どこでこぼれたかな。

——峰松。

峰 松 棟梁、奴は逃げこんじまつたぞ。

倉 吉 ちきしょう！

峰 松 倭ア裏門の脇につくばつてたが、供の野郎も一緒につい今しがただだ。

佐次兵衛 僕が一太刀浴びせてくれ・・・ようとしただが、へえ一
目散だつた、逃げ足の速え野郎よ。

伝次郎 おや、爺さま、いつ来てなつた。

佐次兵衛 へえ、はなつから此処にいらす。

彌右衛門 邸へ逃げこんだとなりや、こりやどうあつても今夜・
・どうだべ、音さん。

音五郎 その通りだ。明日になりや必ず警察署ねがうだらうし、へ
たすりや野郎、どつかへ雲がくれするかもしぬねえ。

彌右衛門 上し、討入りは今夜にきめよう。・・・音さん、指図し
てくれ。

倉 吉 だからよ、そんな血相のかわつたのが何人も、屋間から田
口の端ビクビクふるわせて、血相がかわつてらア。
安五郎 そりやそりやそりやそりやそりやそりやそりやそりやそりや
ちやいねいだから。

兵右衛門 あれ、伊藤の爺さまどこ行つた。

音五郎 そういやア、ずっと・・・・・・

倉 吉 (峰松に) おい、大砲って何だ。

峰 松 大砲は・・・大砲よ。

倉吉 だから、あの、ズトンて大砲か。
峰松 ああ、ズトンて大砲だ。

音五郎 さいごの最後まで穏密が肝心だ。松木も狙われてるとは思つても、まさか今夜討入るとは勘づくめえ。寝入ばなをぶつぐらわすから、そのつもりで。じや、これで散ろうぜ。

倉吉 安五郎先生。

安五郎 あ。

倉吉 あんた、やめな。

安五郎 やめる。。。

倉吉 だから、俺も助人に入ったんだし、このまま帰った方がいいよ。

安五郎 何故だ。

倉吉 何故って、あんた学校の先生じゃねえか。先生のするこつちやねえぜ、こんな。。。

兵右衛門 安五郎先生。

安五郎 倉吉。僕は自分が学校の先生だから、百姓の子供に百姓の生きる道をおしえる人間だから、それで加担するんだよ。

—— ひとびと散つていく。

峰松 行くべ、倉さん。

—— 暗転。——

—— 人々、笠を外して礼拝する。

(12) 大砲

前景につづく夜。

真土神社境内。

—— しも手に神殿、数本の松。かみ手に釣鐘堂が見える。舞台いっぽいに、みの笠をつけ獲物（若干の刀、トビロ、竹槍、馬鉄、鎌、放火用の藁束等）をたずさえ、うずくまる農民たち。

雨（もしくは音楽）。

彌右衛門 ・・・むかしからひとの命の糧をつくってきた俺ら百姓は、殺生が何よりきらいじや。いつの世でも下づみにされ、虫ヶラ同然粗末にされるうぬが命を、螢の火のように辛じて守つてきたからですべ。・・・その俺たちが、獲物をとつて殺生しなければならぬ腹の中を、このお社に鎮坐をさる神仏が先祖代々おられた百姓の暮らしを見そなわすなら、わかつてくださるにちげいねい。・・・今夜の俺たちの討入りが、おのれのうらみ、おのれの欲心からでない、真土村小前一統が生きていくため、のこつた唯ひとつ道だちゅうことをご照覧あつて、あついご加護をくだされるよう、皆でおたのん申すべ。

——遠い鐘の音。

と答える、いいか、わかったな。

兵右衛門 立板に水で喋るから、はなの方はへえ忘れちまつたし。

音五郎 忘れた奴は、三途の川へ行つておもいだしてくれ。・・・
次に二番目だ。ことが終つたら（指さして）邸のあの中庭へ集まるぞ。死骸をたしかめたら、すぐ散るからバラバラに一たん家へ戻つて、使つた獲物をしまつしてくれ。邸はどうせ朝まで燃えるだろうが、なるだけ早く火消装束に着がえて灰かきに集まつてもらう。そん時、半鐘がなつてから火消しに出たんだと、家の者と口を合せといてくれ。こりや大事なとこだから忘れるな、ジャンと鳴つてから、家を出たんだぜ、いいな。

——松の木の高みから、峰松。

峰 峰 表門、灯が消えたぞ。

音五郎 残つてるのは書院だけか。

峰 松 いいや、あれは作男の小屋かな。

音五郎 母屋の寝こむのを待とう。

——沈黙。

——畜生、めっぽう寒いな。

——早く寝くたばれ、くそ！

横合からやられるとお陀仏だから気つけてくれ。・・・新し
い部屋へとびこむときや、戸障子は必ず蹴を出して入るんだ、そ
いつ忘れる唐紙のかげからクサリやられる。・・・暗闇で、お
まけにカーッとしてるから、同志うちしねえよう、忠臣蔵じや
ねえが合言葉をきめとくぜ。合言葉は山に川、山って云つたら川
がる縁で、氣の毒だが皆成仏してもらう。不ぶんをかけたばかり
に、あとで味方に怪我人をだしちやならねえから、必ずこれは守
ってくれ。・・・向うにや撃劍つかう奴もいるが、そんなものは
屁でもねえ。筑波山で俺は、侍を二人斬つたが、刀もつたのは初
めてだった。こっちも怖いが向うも怖いんだ、そんな時にや術が
勝つんじやねえ、氣合が勝つんだ。相手を殺しや子孫に田畠がの
こせるんだと思って、やられるの覚悟で何でも構わねえから突込
め。・・・刀でも竹槍でも、相手の肉へくいこむと、しまつて抜
けなくなるから、そん時ア大根ぬきと同じで、こう足をかけて引
っこぬく。ひとり殺ると、ついボソとするもんだが、そんなとき

横合からやられるとお陀仏だから気つけてくれ。・・・新し
い部屋へとびこむときや、戸障子は必ず蹴を出して入るんだ、そ
いつ忘れる唐紙のかげからクサリやられる。・・・暗闇で、お
まけにカーッとしてるから、同志うちしねえよう、忠臣蔵じや
ねえが合言葉をきめとくぜ。合言葉は山に川、山って云つたら川

馬鹿のつく正直者だが、仮りにつかまつたら、ジヤンと鳴つてから家を出て灰かきしてました、との一点張りだ。もちろんお取調べはきついにちげえねえが、なアに日頃野良しことできたえてあるんだ、ちつとぐれえはられたって蹴られたってこわれるような体じやねえし、六〇人折檻すりや警察の方がアゴ出さア。・・・それでもどうでも、しょわなきやなんねえ時にや、手前ひとりで背負う料見でいようじやねえか。これだけの大事故ひとりでやれる筈ねえと責められようし、誰それもやつたろうと訊かれようし、果てにや名を差しやあ前一人は助けてやるとも誘われよう。・・・けんと警察署の飴玉だけはうつかり口にするな、ひとこと喋りや際限なしの泥沼、もとより手前ひとりも助かりっこなし。

音五郎 音五郎さん。

彌右衛門 それを背負うのは、惣代筆頭としてのおらの役目だ。一九日、ことがきまつて連判したときから、主謀者が誰かはもう決まっていたことだわ。・・・だから、お取調べを受けることになつたら、騒動の張本人は冠彌右衛門と、どなたも云つてくれればいいだ。

佐次兵衛

いや、それはこのおらがいい。警察署だとて、若え彌右衛門じや納得しめいが、おらなら白髪頭の貢祿からいっても筆頭人らしかろうぜ。

彌右衛門 それだけは困る。伊藤の爺さまは俺らの親父にもあまる年をとつてゐるだ。その人に科をしょわせて、若えおらが安閑と・・・・・

佐次兵衛 お前らしくもねいぞ、彌右衛門。・・・・・

たとえことが成就して、首尾よく土地が返つたとして、そこから今までの借財をなし、この先何年何十年、ここに集まつた衆がこのたびの結束とくことなく、しつかり固まつていかねばなんねいだべ。お前ら若え者でなくて、誰がそれを束ねていくだ。そのところをよく勘考して、皆の衆も加勢していく。・・・俺アもう七二の年よりだ、斬罪になるか懲役になるか、どつちみち縮む命が何年とあるわけじやねいだ。

新七 情報のことなら、おらもきいてもれいたいだが、おらア皆も承知のよう体の弱い役立たずで・・・

佐次兵衛 お前はまた、どうしてこんを時にでしやばつてくるだ。病いは氣から、ちゆうて、田畠とり戻して、うちの鍼先生じやねいもちつといい医者にみてもらや・・・

元良 やいやいや、無理して俺をひきあいに出すことアねいだろ。一

佐次兵衛 いたか。・・・なア、そういう訳で、えんま様のお調べでこんな役に立つたとわかりや、若え時分の極道も帖消しなつて、極楽まわしつてことにもなんだべ。ことは功德と思って、張本人は俺の役にしておくれ。

音五郎 母屋の灯はまだ消えねえか。

峰松 まだだ。

兵右衛門 彌右衛さん、何とかの一徹だア、呼つてたじやキリがねい。ここは折角の爺さまの発案、仏さんの声として聞こうじやねいか。・・・どうだらう、皆の衆も。

小左衛門 どうだらうといわれて、そうだそだと云えるこつちやねいが・・・

元良 それに、どつちせ一人で片がつくとは思えねいが・・・

彌右衛門 いたしかたねい。じや、筆頭人のことは佐次兵衛さんに

兼吉、伝次郎、砲弾（丸い大石）を砲口からおしこ

佐次兵衛 料見してくれるか。そうかい、結構だった……

む。

何人かの念仏のこえ。

音五郎 よーし、残った灯の消えるを合図に表門の大砲をうちこむ

ぞ。間なし裏門をぶつ放してくれ。伊東先生、いいな。

兵右衛門 当ってくりよう。（砲身をさすりながら）骨おっただからな、お前にや。

佐次兵衛 あたるとも。あれだけ探して無かつた松が、お諏訪さまの境内で二本も見つかったのは、お社ごわして祭神かえたりした松木を憎んでさづけられたにちげいねいわ。（これも砲身をなでて）これがあたらんどうするかい。

音五郎 （火縄を吹きながら）・・・まだか、峰松。

峰松 まだだ。

音五郎 火薬。

兵右衛門、佐次兵衛、砲尾に火薬を装てんする。

弁藏 おい嘉兵衛、大丈夫か。
嘉兵衛 （声が上ずっている）な、何がだよ。
弁藏 今のうちに小便たれとけ、褲汚すぞ。
音五郎 大砲のおおいをとつてくれ。

暗転。

人々が掩いをはね、不砲米が全貌をあらわす。砲口は客席に向いている。

米 松丸太を二つに立割り中をくりぬき、竹タガ二本宛数ヶ所でしめてある。木口四尺×長さ一〇尺という。

(13)
死闘

倉吉 へえ、こりや……
音五郎 たまごめ。

前景につづく夜。
真土村、松木邸。

—— 長右衛門、市五郎、かたわらで裁縫しているフミ。

長右衛門　どうあっても帰る、というのか。

市五郎　長くご恩をうけて、こんなこと申しあげられた義理じやねえですか・・・

長右衛門　今夜のようなことがあってみれば、無理にとめる訳にもいくまいが、明日は早速警察署をねがつて、不穏な奴らはとりしまつてもらう。もともと、意氣地もない小百姓、頭株を脅しておけばたいしたことはできはせんのだから。

市五郎　そのこゝて、だから・・・いえ、怖気がついで逃げだすちゅう、つもりはねいですが、・・・ただ旦那さま。

長右衛門　む。

市五郎　俺なんど山地の二反そそここの瘦地、まるで手前の掌のひらのように守ってきた者とすりや、こちらへど奉公して、二〇町三〇町という気の遠くなるような広え土地で、水田だろうが畑作だろうが、桑だろうが気のむくままにやれる、とりや夢のようなことでがした。・・・しかも旦那さまの説かれる、自然の理を極めて自然をかえていく農法ちゅうものに、俺アふんと初めて百姓のおもしろさに目ひらかれたおもいで、夢中になつてやって参りましただ。

長右衛門　市五郎、わしの夢はこんなものじやないぞ。・・・桑がこの真土ばかりか大住一郡の地味にあうとわかれ、大々的に養蚕をおこそうと思う。横浜までの鉄道が東海道をはしって、京大阪にのびるのもそつ遠いことではあるまい。そうなれば、戸毎の糸取りでは足らず製糸工場が必要になり、製品は横浜に送りつけ

るようになる。いまはまだ試験のため植えている桃、梨、密柑のたぐいも、大根、白菜なども、やがてはこの地の名産になり得るのだ。

市五郎　それはようわかつております、旦那さま。ただ、それをみのらせるためにも、ここに百姓衆の力が入用じやねいんでしようか。旦那さまのお考えを納得して、お助けする小前の人たちが・・・

長右衛門　お前自身どうだった。わしのところへ来て、すぐさまわたしの考えに納得がいったか。しかもお前には、改革のために失う何ものもなかつた筈だ。・・・ところが、ここ的小前は農道をひろげ、堆肥場を設けるためには自れの耕地を削らねばならぬし、

用水を掘るために人足を出されなければならないのだ。・・・十年百年先の利益より、今日唯今の損得に目を奪われる、このど百姓根本では到底わしの理想などわかりようがないのだ。

市五郎　それも百姓の今日唯今のたつきが、たつきのつらさが・・・

長右衛門　そういう愚痴話をくりかえして、時代の進歩があるか。強引であれ、無理であれ、理想をつらぬく力が、それだけが世の中を変え新しい歴史をつくつていくのだ。五ヶ条の誓文にも、旧來の陋習を破つて知識を世界に求めよ、とあるが、かつてそれを

実行にうつしたわしは、地方政府の軟弱不徹の方策によつて戸区長職をとりあげられました。・・・しかし、今にして振り返つてみると、わしのひらいた道を政府自体が歩んでいるのではない。上等裁判所の判決は、単に法律だけではない、日本の農業、更にはそこを基礎とした産業経済が、どう発展するかを照らしだ

してゐるところに大きい意義があるのだ。・・・

市五郎 旦那さまはいつか、竜右衛門さんという人にも、どんな道筋にしろ今より暮らしむきがよくなれば、それが百姓のしあわせだろうと仰云いました。

長右衛門 そうでないと云うのか。

市五郎 よくわからぬです。・・・とり入れあとにお休みいただけて帰つたときのことでした。おふくろがえりい早くから出仕度してて、何だとききましたら微兵でとられてる家の麦まきやつてやるんだといふ訳で、俺アかわつていきました。・・・岩をくだいた、この辺じやみることもできねい土ですが。斜めの畠の巾があれで一丈もあるべか、石段を三尺もあがつて又振り擣ほどの畠。・・・目の下で朝けの煙たててる屋根みながら、勿体ねい話です。が、俺アやつぱりことさ帰つてくるしかねい、と思つたが、

長右衛門 わからんなど。

市五郎 篓だけここから抜けて、平場の夢のようなことで、艶のいい米つくつても、何だか張りあいが・・・へい、その張りあいがなくつて。

長右衛門 勿論、こっちに土地ももたせてやるつもりでいるのに・・・(フミ)わかるか。

長右衛門 お前の方が、小前の人情には通じてゐるらしいが。

沈黙。

市五郎 ふんとに、せつかく旦那さまにも、奥さまにも目かけていたでいて・・・。

長右衛門 む・・・これ以上、ひきとめる訳にいくまじ。気のままにするがいい。

市五郎 へい。

市五郎 ふかく辞儀して去る。

長右衛門 もう羽織のいる季節だな・・・寿之丞のか。

フ ミ 明日、小田原へ届けてやります。

長右衛門 ・・・あれは、誰だつたろう。

フ ミ ・・・?

長右衛門 いきなり暗闇の流れの脇で・・・(笑う) 大久保郷暗殺

- 56 -

この方、神経がたかぶつて、夜仕事の道具でも洗つていた百姓を・・・ひよいと出あいがしらだつたで。

フ ミ あなた。

長右衛門 市の奴も、かわいそうにたまげたのだろう。

フ ミ 小前衆のもつてきた示談に、応じてやる訳には参りません。

長右衛門 お前まで、桔尾花におびえてるな。

フ ミ セめて、訴訟費用だけでも・・・。

長右衛門 そういうことに、口さしはさむなと云つてある筈だぞ。

フ ミ 存じております、でも・・・

長右衛門 心根やさしいはいいが、けじめを失つてどうする。奴らが徒党をくんでおる限り、取りあへてはならんのだ。

奴ら

フミ……私は市五郎のことが、わかるような気がいたします。……張りあいがない、と申しましたわね。

長右衛門 よい米がたくさんとれれば、それが張りあいだろう。それで生計がゆたかになる以上の張りあいがあるか。

フミひとりがよくなつても、一家がよくなつても、隣りが餓えていては、村内に餓える人がいては……

長右衛門 張りあいがないのか、随分と贅沢な張り合いだが。（笑）

う）三千万人民をして餓えざらしむる方策は、天下ご政道の問題だぞ。肥桶をかつぐ百姓がくちばしをはさんでどうなる？

フミご政治むきのことなど、私などにわかる筈もございません。……ただ、あなたのおたてになるご計画をうかがっていましても……

長右衛門 なんだ。……云いかげたのだろう。

フミ黄金のみのりも、桑烟のみどりも、とても美しいのですけれど、肝心の人の姿が……すこしも見当らぬようで、うかがつていてなにやら寂しうをります。

長右衛門 人の姿か……見当らぬ。

沈黙。

フミあなた。……おぞましい諫言だてとお叱りは覚悟しております。……明日から東京へお越しになると仰云いましたが、それよりどうぞ村方惣代衆をおよびになつて、大旦那さまとの仲をとりもつてやつて下さいまし。

長右衛門 ……。

フミ寿之丞のためにも、まげでおねがいいたします。

長右衛門 ……フミ、やすもう。（手をとる）

フミあれ、ちょっとシッケを……

長右衛門 明日にせぐ。（ラムブをとり、フミをひいて去る）

闇のまま間。

雨の音。

一閃の光がさきか、轟音がさきか、そのあと奇妙に静かになつた中で、誰か斬られた男の叫声が、水の中

で吹く笛のように長く見える。
仕込みをぬいた長右衛門に、少々あられもない恰好のフミがまつわりついた儘でてくる。

長右衛門 素三郎！ 素！ ……これ、しっかりせぐ！

フミあなた……あなた……

素三郎 （駆けこんで）ど百姓か。

長右衛門 父上を……長押に手槍がある……

素三郎 む。（駆け去る）

フミあなた……

長右衛門 フミ、落ちつけ！（しがみつくのをつき放して、二つ三つ頬をたたく）……

よくきけ、裏門からのがれて、伊藤へ行け、いいか実家へ行くんだぞ！

——長右衛門、尚もしがみつこうとするフミを蹴とばす。

フミ、そのまましも手へ。

嘉兵衛 この野郎、音さんが何て云つた……
峰松 来たぞ、そっちだ！

戸、障子のこわれる音。

——長右衛門、奥へ行こうとするところへ倉吉。

放火隊のはなつた火の手が大きくなつて、あたりを赤く照らし、煙がうずまいてくる。

——「出」「川」のよびごえ。悲鳴。

倉吉 へへへ・・・とうとう、おめにかかれたな。・・・おなつかしゆうござんすぜ。

——手前の庭を、平右衛門、新七らに斬りたてられ、棒で防ぎながら市五郎がよこぎる。

——座敷では、長右衛門と倉吉の決斗。

——庭、しも手からフミ。これに追いすがって嘉兵衛、うしろからけさがけに斬りつける。

——座敷では、長右衛門有勢となり、倉吉庭へ転落する。ついで斬りつけようとするとき、彌右衛門が横合いから脇差でつつこむ。

倉吉 助つ人は・・・無用だぞ、余計なこと・・・（立とうとして）あいててて・・・

長右衛門 彌右衛門、きさまにや、俺の真意が判る・・・と思つた

彌右衛門 ひきわり食つてるおらたちに・・・白え飯食つてる旦那

方の・・・そんなん・・・わかつて何になる。

長右衛門 きさまらが・・・台なしにしてるのは・・・きさまらの・・・未来なんだぞ。しょせん・・・けだものなんだ、きさまら

！

——嘉兵衛、帯をたぐって二の太刀をあびせようとするのを

峰松 とどめ刺すな、に、逃がしてやつてくれ。

嘉兵衛 な・・・なに！

峰松 はやく、にげろ！

——フミ、あえぎながら逃げ去る。

——しも手からよろめきてた市五郎、新七、長五郎たちに斬り伏せられる。

乏で、エタで・・・大みていたいじめられて・・・助けてくれ。

お前らたって・・・同じ百姓だべ・・・同じ貧乏だべ・・・殺さ
ねいでくろよオ！

安五郎 弁さん、ま、まで！

市五郎 ・・・おつ母ア・・・。
音五郎 （声）大旦那、うちとったぞオ。松木良輔をうちとったぞ
オ！
長右衛門 とオ！（奥へかけこむ）

半鐘が鳴りだす。

佐次兵衛、小左衛門、兼吉らにかこまれた素三郎、
手槍をかましてジリジリ後退してくる。峰松、嘉兵
衛らも攻撃に参加する。素三郎、佐次兵衛につきか
かる。佐次兵衛倒する。そこに血路をひらこうと
進みでた彼の背中に、倉吉がとびついて、

倉吉 死、死ね！（匕口でえぐる）

素三郎、槍をおとしてたおれる。

伝次郎 （声）長右衛門、でてこい！
音五郎 （声）逃げきれやしねえぞ、男らしく出てこい！
兵右衛門 （声）出あえ、長右衛門！

——泣きながら追われてくる山明常吉。かこまれて逃げ
場を失なう。

常吉 助けてくろ・・・俺が、何した・・・何わりいことした。
・・・松木屋敷にいたって・・・しようなかんべ。・・・達ア、貧

死骸の上に火明りがゆれて
あたらしい方角を加える半鐘の音。

——返り血を避けて抜がった輪から、刺された竹槍にし
がみついて転がりてた常吉、死ぬ。

弁蔵 （睡をはいて）何が同じ百姓か・・・エタはへえ大じやね
いか！
権兵衛 そうだとも、こんなヨツと同じにされてたまるか！
音五郎 （声）おーい、松木をかこんだぞ！裏の炭小屋だ、皆あつ
まれ・・・長右衛門をかこんだぞオ！

——ひとびと、どよめきながら声の方へ走っていく。
峰松、常吉の竹槍をぬき手を胸にくませる。かすか
を念佛がきとえる。それに声かけようとする倉吉を、
安五郎がひきとめる。峰松、皆を追って去る。

安五郎 何を云いかけたんだ、倉吉。
倉吉 （駆け去りながら）峰の阿呆にか・・・へツ、忘れちまつ
たい・・・

編 笠の賦

明治一三年五月二〇日、午。

中幕前かみ手に照明、立木裁判長による判決云い渡

し。*

* 入獄中の一二名（うち高橋新七は死亡）保釈中の一四名、あわせて二六名に対するもの。

塩谷 伊藤権兵衛、同藤吉、同佐五左衛門、伊東平兵衛、同奎左衛門、同兼吉、同富五郎、吉野井蔵、三上長五郎、山本乙右衛門 小野田勘右衛門、伊藤岩吉、井上所左衛門、伊藤次郎左衛門・・・懲役三年。

かみ手暗くなり、しも手やや明るくなつて、声は塩谷にひきつがれる。

立木裁判長 神奈川県相模國大住郡真土村平民、冠姓右衛門。・・・其方儀、同村松木長右衛門へ村内六〇余名より入質したる地所を受戻さんとするも、その権利の伸張せざるは、ひつきよう長右衛門の奸計に陥し入れられたるものと信認し、憤懣にたえざるより、長右衛門家族を殺せんと企て、自ら巨魁となり、伊藤佐

次兵衛外二四名と共に謀し、おののの鎌薙口等を携え、長右衛門宅へ押寄せ家居等一二棟を焼毀し、長右衛門妻フミ外三人へ傷を負わせ、長右衛門をはじめ一家七人を殺死する。右科人命律殺一家三人条および五刑創条例により、斬罪申しつける。・・・明治一三年五月二〇日。

照明やや暗くのこり、声のみ続く。

塩谷 しも手全く明るくなる。塩谷代言人をかこむのは、真土村からかけつけた男女の農民たち（その中に兵右衛門、倉吉、二才余の子を負うたふみ、イシ等）と、高橋代言人。

塩谷 しも手全く明るくなる。塩谷代言人をかこむのは、

イシ先生、何ちゆうむげえお云い渡しだべ、新七さま一〇日前仏になられたらばかりだちゆうに・・・この上、四人もの衆が斬罪なんてへえ、先生、あんまりだよ、あんまりむげいよオ！（泣

九左衛門

落ちつくだ、おイシさん、問なし皆さん、でてござるだ

で、なア。

立木裁判長 伊藤佐次兵衛、斬罪・・・伊東元良、斬罪・・・伊藤音五郎、斬罪・・・伊藤兵左衛門、佐藤安五郎、新倉嘉兵衛、

塩谷 拘留人との面会は法律で禁じられておるが、高橋君共々もう一度ねがってみるから、その場で静かにひかえていなさい。兵右衛門 先生、ふんともうこれで、どうにもなんねいんですね

冠峰松、石川儀左衛門、冠伝次郎、高橋新七・・・懲役十年。

か。

塩谷 む・・・・・。

兵右衛門 ご承知のようにおらたち真土の小前は、去年の二月、戸部の海老塚区長さまで仲立ちいただいて、質地三七町歩めいめいの手にとり戻すことができた。・・・でも、おらたちが水呑みに落ちこまねいですんだのは四年前の杭うち騒ぎからはじまつたのでいりに、命をかけてくれたあの二六人の衆があつたればこそ

・・・それ考えると、どことうしても、いまお云い渡しあつた伊藤の爺さま、窮右衛門さん、棟梁と伊東先生、この四人の命だけはお放ししないことにや・・・

九左衛門 そりや先生、俺たち事件にじかに関わらない者も、年寄り女衆までも一緒にした真土一村のねがいですぞ。

農婦 あの衆が、晴れて監獄署から出てきなる日まで、一切絹ものにや袖通すまい、祝儀不祝儀も内輪ですまそうと、おらたちやちかいあいました。

別の農婦 男衆も牢に入られた衆の入費にと、欠かさず役なべして

かせいできたですから、この一年半。

イシ 先生、どうぞして助けてあげてくろ、おねがいします。

高橋 それは、塩谷先生も、僕も・・・何とかして、死罪だけはくいとめたい・・・

塩谷 どうも伊東元良に対する判決がわからん。かれの斬罪はくつがえし得るとおもわんかね。

高橋 先生、問題は量刑の当否ではなく・・・

塩谷 幷護の衝にあたる者の第一の関心は、その当否だろう。情

において忍びがたいが、冠君にたいする極刑は殺傷一〇人におよぶ暴動の主犯とあればやむをえないし、他の二人も謀議、実行の中で果たした役割の重みから推論すれば、これまた不当とは云いがたい。しかし、伊東元良については、これはきびしい。・・・その暴行に關わらずと陳述すると雖も、党類冠彌右衛門その他の供出等により・・・ふむ、拘留中に仲間割れでも生じたということがどううか・・・

兵右衛門 そんな、そんな莫迦なことア・・・

塩谷 むろん、考えたくないことだが、長い拘留の中では人情の常として、無しとは云えんぞ。

兵右衛門 先生、あの衆は筆頭人をあらそつたんだ。うぬが罪をかぶるちゅうて、きりつかなかつたのをおらたちが仲裁したです。あの晩。・・・この目で、そいつ見てたおらにや、仲間割れなんて汚ねいことア・・・

塩谷 人間誰しも汚ないものは持つておる、ただそれが、非常に際しては・・・

倉吉 兵さん、一百万だら云つたってわかりやしねえよ、あの中にいなかつた奴にや。・・・わかつてたまるかい。

塩谷 では敢えてきくが、あの晩あの中にはいた伊藤兵右衛門君が騒動のあと、八王子とかの行きつけの旅籠へとんで行って宿帖へ名前をしるし、又とんで帰って何くわん顔で焼跡の灰かきに出ていた。宿帖の証拠がものを云つて、つかまらんと済んだ訳だが、その行為の中には全くなかつたのかね、君のいう汚ないものは。

倉吉 そいつア、あんときの申しあわせて、だから俺だつてこうして・・・

兵右衛門 いいや、先生のおっしゃる通りよ。うめえことやったと

人にも云われ、うぬもそう思つたのがふんとのこつでした。・・・

・でも先生、今じやあの衆と一緒に、たとい打首になつても一緒に

にいたかつた・・・そう思うですに。

高橋 一緒にいるのだと僕には思えるがな。

――まだだべか。

――やつれていなるなんかのう。

農婦 保釈ちゅうこんで帰んなつた衆の話じや、監獄署の中でもはたの囚人衆たア扱いが違うつてこつたぞ。

――そりやそうだべ。法律にやもとつたか知らんが、悪いことしおじやねいだで。

別の農婦 今の世の佐倉の宗五郎さま、上野の茂左衛門さまちゅうこつたに。

――あの衆は将軍さまで殺されただが、彌右衛門さんら斬罪にしよちゆうなみ百姓からみりや天朝さまも権現さまも、結局ひとつもんだぞ、へえ。

倉吉 葵の紋が菊の紋にかわつても、上のもんと下のもんはかわらねえ、か。くそ！

――与七、啓次。

塩谷 もう法廷を出たかね、山崎屋さん。

与七 先生、あの四人は助かりますよ、屹度助かる、ありがたいふみ助かるって・・・あの・・・

イシ 且那さん、ふんとかね・・・

与七 ああ、大丈夫、大丈夫。

塩谷 どうしたというんだね、啓次君。

啓次 いえ、親父と中庭で待つていました今、皆さんそろつて脇の門から出て来なすつたんですが、その中に四人の衆も一緒だというんで・・・

与七 わからない奴だな、そりやないんだよ。・・・法廷というところは、入る門は同じでも死罪を云い渡された者は、出てくる門が普通囚とちがうのだ。そうでしたな、先生。

塩谷 うむ。

与七 ところが今日は、宣告のあつた四人が四人、その普通囚の

出る門からだされてきたんですよ。私はもう嬉しくて帰しくて・・・

高橋 それはしかし、何かの間ちがいだらう。

与七 高橋先生、まちがいなんかあるものですか。ありや偶然じやない、彌右衛門さん方が屹度助かるというしるしですよ。

啓次 どうなんでしよう、塩谷先生。

塩谷 助かるや否やは何とも云えぬが、我輩の知る限り、裁判所の廷吏が上司の指示命令をまちがえるなどということは考えられん。

啓次 じや、やはりこの判決には何か裏があると・・・・・

塩谷 予断はできぬが、そういうえば四人の身柄について采合あずかりというのは、異例の处置ではあるな・・・

九左衛門 野村県令さまア、こんどの騒動じやすつと小前をあわれんで下さつてじやから・・・

兵右衛門 それがへえ、ふんのことになつてくれたら、なア、おふみさん。

高橋 山崎屋さんにケチをつけるつもりはないが、この四人の滅刑助命は神だのみじややれんぞ。それは肝に銘じておかぬと・・・

与七 しかし、先生・・・

高橋 勿論、可能性はある。・・・おととしの末事件の直後、塩谷岡本両先生の発案で、山崎屋さんにもお骨折りねがつた懲訴嘆願書は、大住、海綾、愛甲三郡一六八ヶ町村の正副戸長ことどもが署名してくれ、その数千八百名にたつし、以来活発になつた

救命運動の中で四八〇件、一万五千人という我々が予想もしなかつた署名を集めることができた。・・・そういう大きい人民の応援があつたねばこそ、野村県令も動かざるを得なかつたし、とくに一二月二〇日、岩倉右大臣にだした命乞いの上願書は重要な意義をもつておる。

啓次 ・・・いわゆる慣行民刑の規をおいまだ全からざるに似たるを以て、この際もっとも行政事務の障礙なきにあらず・・・でしたか。

高橋 まわりくどい方だが、政府内部の行政と司法の食いちかいを、チクリついておる。

塩谷 そりやう政府の権力と、民衆各層の共感同情が絡んで作用することで、この極刑をおしきるのは妥当でないといいう判断が出てくれば、もつけの幸いといふことかね。

高橋 はア、更にいえ、その判断を人民の力で出さしめる・・・そのため武相一日にひろがつたこの一揆の全貌と判決の波紋を、

いかに急速に関八州におよぼし、日本全国にひろげるかだらうとあもひます。

塩谷 どうもその云いようは濫當を欠くな、高橋君。・・・我々のやつてきたのは、國法の威儀を仰ぐに先立つての命乞い、應願であつて抗議ではないぞ。だからこそあれ程多くの署名も得られたのだ。公平にみて、これだけ影響の大きい事件に対する判決として、決して重きに失するとは云えん訳だし・・・

高橋 ・・・とお考えですか。

塩谷 我輩の主觀ではない、法曹界の通念を云つてあるのだ。あらゐは天下の常識と云つてもいい。

高橋 先生、先生は、國法にはもとつたが惡事を行つたのではないといつた、かれらの言葉をどうおききですか。これこそ、まことに天下の常識ではありませんか。天保の昔から、佐倉宗五郎の如き架空伝説の義民を芝居、講演、祭文語りのたぐいで全國津々一
浦々に流布せしめた人民の常識こそ、新しい弁論の士の従つてたつところと僕は考えます。

塩谷 若い君が民權の理想を燃やすのは当然だらうが、現実を忘れて眞に民衆の代言人はつとまらんぞ。みたまえ、この三月大阪でひらかれた国会期成同盟の決議による上願書は、二〇日以上も揉みぬいた場句受理されなかつたばかりか、政府は先月にいたつて突如集会条例を公布して、政治集会をきびしく制限し、自由民權派の取りしまりを強化してきたじやないか。

高橋 しかし、それによつて國會開設の要求は少しもおころえていません。それは民權のたたかいつたとえばこの真土村の一揆を根にしてたたかわれておるからです。

兵右衛門 や、出てござったぞ！

—— ふんとじや、出てござった。

—— おい、彌右衛門さんが先頭じや。

—— なむあみだぶ、なむあみだぶ・・・

農婦たち なむあみだぶ、なむあみだぶ・・・

農民たち 平伏して念佛する中を、中暮急速にあがる

と、彌右衛門はじめ編笠獄衣の一一名、平服の権兵

衛、平兵衛、兼吉、富五郎、弁蔵、長五郎、所在箇

門が、横浜裁判所玄関を背にいならぶ。数名の看守

巡回の先頭に、戸部監獄署典獄小泉保直。

—— イシ、ぱらぱらととびだして、

イシ おねぎいでござります、お慈悲をもちまして四人衆のお命

おたすけくださいまし・・・おねぎいで・・・

—— お救いくださいまし！

—— お慈悲でござります！

塩 谷 待ちなさい、これ、静まりなさい！・・・最前おねがい申

したとおり、はるばる真土村より参った家族縁籍の者どもです。

一目、この場での対面許してやっていただきたい。

小 泉 塩谷さんでしたな。

高 橋 同じく訴訟中の担当代言人、高橋重蔵です、肉親の真情何

卒あわれんでやつていただきたい。

小 泉 弁護職であられるなら護送中の囚人との面接が国法によつて禁じられておることも、ましてや一典獄の吾輩などにそれをま

げる権限のないこともご承知でしよう。

与 七 そこを特段のお情けで・・・

小 泉 その件いゝ切お断り申す。・・・ただし、諸君の請願とは無関係に、ここで暫時囚人を休憩せしめる。みだりに近付くことは許しませんが、神妙に交歎するのは・・・そちらの勝手、当方のあずかり知らんことです。

塩 谷 かたじけなし。

小 泉 (看守に) 若干時休息する、編笠を外してやれ。

彌右衛門 塩谷先生、高橋先生、山崎屋さん、啓次さん。・・・九一
左衛門さんはじめ村方ご一統の皆さん、ありがとうございました⁶⁴

・・・皆さん方の並々ならぬお力と、海老塚先生のご仲裁によつて、真土全村の土地が小前の手に戻つたときいて、一〇日前ひと足さきに仏になられた高橋新七さんをはじめ、おらたち拘留人一同どんなに安堵し、よろこんだか、お察しください。・・・
ふんとにかくたじけないことでした。かけにひなたにお助けてさせつた、山口佐七郎さん、伊藤作兵衛さん、平川孫右衛門さん、そのほかお名前をあげきれない皆さん方に、おらたちや満足して旅だちますとお伝えください。

イシ 彌右衛門さん・・・

兵右衛門 伊藤の爺さま！

佐次兵衛 あいかわらずままで何よりだの。監獄署にいると、お前の色っぽなし聞かれねいのが何より不如意だわなア。

兵右衛門 おら、へえ罰あたりだぞ。・・・うぬひとり助かりたさに逃げちまつて・・・

佐次兵衛 その話は、へえやめにしろ。・・・あとひと月すりや麦かりだ、うぬがものときまつた畠のとりいれとなりや、麦つき畠の音頭は兵さん、お前でなきやとりきれまじ。

兵右衛門 おら、身粉にしても、きっとお前方がこたア助ける。・・・きっと助けるだから・・・

音五郎 おい、倉。・・・ちつたア百姓面白くなつたか。

イシ それがの、棟梁・・・

倉吉 ケツ！ なに面白え、あんなもん。安五郎先生とこの畠、せっかく戻つたてえのにアカザやネコジヤラシの原っぱにしとくわけにいかねえから、仕方がねえ、帰るまでめんどうみてる丈よ。

安五郎 平川、僕が出ていくにやまだ九年足らずかかる勘定だぞ。

音五郎 こりや大ごとだが、ダルマさんと同じで、九年土とにらめこしてりや大概百姓が面白くなりやしねえか。

倉吉 だからよ、そんな目にあつちやたまらねえから、あんたら

早えとこ監獄署から出すようう、おらもこっちの先生や兵さんの

使い走り位する氣でいるのよ。

イシ 棟梁、倉吉がとういうこと云つてくれるだに、おらふんともねえ。

倉吉 梅雨の寝小便みてえにやたらビシヨビシヨ泣くねえ、みつけてれるな、平川。

安五郎 てれるな、平川。

倉吉 百姓がどう生きるか・・・そいつ教えなきやなんねえから一揆に加担するって、先生そう云つたつけな。・・・そのあんた

らに、今村一辺見せてやりてえよ。

音五郎 見ねえつたって、倉、わかつてらアな。浦島太郎なら忘れちまうだらうが・・・俺たちや、その今村のためにやつつけただからよ。

小左衛門 新七さんにも見せてやりたかつたな。
九左衛門 むごいことだつたの、ふんと。

佐次兵衛 新七はへえ、真土へ帰つたらすらよ。・・・ちょうど一〇日前の夜中な、代表の者で死水とつてやつただが、おだやかな顔して逝つたわ。おらも間なし行くぞ、耳のはたで云つたら聴こえただべ、おうおうつてなア。・・・早くおついて、皆で旅しるとおもや、そのうちにや婆さんもへえ追つかけてきて、結構にぎやかになるだし、だもんでおらたちのことア何も苦にすんな。元良 典獄さん、休息はもう・・・これまでにねがいたいだが。

佐次兵衛 どうしなつた、医者さま。

元良 来世だの後生だのを信じられる方が、人間やはり幸せということよ、伊藤の爺さま。・・・どうも、なまじつかの無信心は始末がわるい、煩惱というのかのう・・・

イシ 先生・・・。

塩谷 伊東さん、最前も云つたことだが、君の判決には吾輩大いに疑問がある・・・

元良 いや、塩谷先生、そんなことではない・・・

塩谷 君に関しては、重大な事実誤認ないし一種の先入観が明らかと思われるし・・・

元良 それを云うなら先生、事実誤認は全員だ。・・・わしは意氣地のねい方だで、空元氣ははれねばが、しょわにやならんもの

はしようつもりだ。ただ、彼岸淨土の信じられん悲しさで、首が落ちるまでこのピクピクがやむまいとおもえての。

彌右衛門 同じことよ、伊東先生。・・・おらたちの方がもとと弱虫だもんで、神仏にすがるだわ。・・・でも先生、来世は信じられないとしても、俺らのやったことが、怡慶土におちた種が芽を

ふき、花を咲かせ、実をならすようにもうはア誰かれの名前なんざ消えちまう程、とおい先の代にも、ずっとつながっていく、それも段々つよくなつていくってこたア信じていいくことでおいべか。

元 良 とおい先の代、か・・・そうだの。

小 泉 これまで・・・休息を終える。

九左衛門 みなさん、身をいとつてな。

高 橋 冠君、あんたの云つたことを、生きてたしかめられるようにするぞ！

小 泉 編笠をつけえ！

兵右衛門 そりだとも、必ずお助け方きき届けてもらうで、心丈夫にな！

彌右衛門 ありがとうございます。・・・土地は戻ったといえ、莫大もねい借財なしていくこののちの長え苦労、ふんとに云ひようもねいこつたが・・・、おととし一月二六日のあの晩のようにしつかり固まって・・・しつかり固まって。

看守、編笠をかぶせる。

ふみ お前さん・・・お前！

彌右衛門 あの晩、わかればした筈だぞ、ふみ。
ふみ わかってるよ、わかってる・・・。

彌右衛門 辛いのはおのれひとりと思うまいぞ。

ふみ 友吉にひとこと・・・一言声かけてやっとくれ！

ふみ (ふみをひき放す) のけ、のけ！

彌右衛門 ・・・・・。

ふみ 伊藤の爺さま！

佐次兵衛 ふみ、聞こえんかい、彌右衛門のこえが。・・・みい、友吉にやちやんと聞こえとるぞ。・・・強え百姓になれ！強え百姓になるだぞ！ って、のう・・・・。

農民たちの念仏たかまる中を、編笠の列歩みはじめ

-66-

る。

幕がおりる。

東リ演の仲間へ

西リ演議長 岩田直二

機関誌の発刊おめでとう。

またこれで一步先んじられた訳です。だが負け惜しみでなく、本当に心から喜びたいと思います。東リ演の発展は私達西リ演の発展でもあるのですから。

東リ演が一步一歩着実に組織を固めながら進んでいる様子を拝見して敬服しています。その点で私達は貴方達に学ばねばならないことがあります。総会、運営委員会、創作部会、セミナー等もそうです。これらの準備、召集ということも、簡単な事務的労力の仕事をかゝえながらのですから、大変な労力を必要とします。それがチャンチャンとやらされていることだけで私達は頭が下るのです。ということは、私達の西リ演ではまだその組織の基本的な運営がうまくいっていないといふことです。高度の能力が必要な訳ではありません。やる気さえあれば出来ることです。が、私達はまだまだ足らないということです。

西日本リアリズム演劇会議は東リ演より多くの組織としての機能を果してゐるかといふことでもあるのです。東リ演への各加盟劇団の結集を見るにつけ私達の努力の足りなさを大いに反省させられます。

西日本リアリズム演劇会議は東リ演より

年早くされました。どうしても必要だと考

えたからこそつづったのです。そしてその必

要性は今も変りません。いやより必要性は大きくなつていて云えましょう。その点を今こ

の時点でもう一度しっかりと確認し合うこと

が大事だと考へています。そして皆さんが本當に必要とする西リ演に早くなりたいと思いま

す。東西両リ演のもつと緊密な結びつきがそ

のところからも大事だと私達は考へています。

さて、この機関誌第一号にこばやし・ひろ

援の合同公演など、創造面での大きな統一行

動を生み出したことは高く評価されなければ

行つていません。勿論、過去二回にわたる訪

中公演、又関西では昨年末のペトナム人民支

援の合同公演など、創造面での大きな統一行

動を生み出したことは高く評価されなければ

ならないでしようが、各劇団の創造を同一の

場で考へ合うところまではいっていません。

「運動の主軸」に据えた組織です。その点、

こばやし君も云つてゐるよう、東京の新劇

人会議なり関西の新劇人の会とはその性格が

違います。私達が最初西リ演をつくろうとし

た時、新劇人会議なり関西新劇人の会とい

う組織をつくる必要はないじやないかとい

う意見を聞いたことがあります。安保体制打破

といふ政治的・社会的目標に統一されたなかで

これらの組織が生れ又現在も活動しているの

ですが、そこには明確な政治的・社会的目標の

一致（少くとも安保体制打破といふ点で）は

あります。それがそのまま創造とは結びつ

かないといふことがあります。例えば関西新

劇人の会は、先だっての四・二六統一行動に

は加盟劇団の多くが参加しましたが、演劇創

造に於ては、即ち「何を、誰に」という点に

於てはそれぞれ考え方をもつていて決して

一つではありません。

東京の新劇人会議でも関西新劇人の会でも、

政治的・思想的統一の段階から更に一步進んで

それぞれの創造問題にまで入つていてこうとす

る努力はありましたが、現在まだそこまでは

行つていません。勿論、過去二回にわたる訪

中公演、又関西では昨年末のペトナム人民支

援の合同公演など、創造面での大きな統一行

動を生み出したことは高く評価されなければ

ならないでしようが、各劇団の創造を同一の

場で考へ合うところまではいっていません。

そしてそれはそれでいいのだと思ひます。勿論お互いの創造を深めていく努力は継続してなされていかねばならないでしょうが、新劇人会議なり関西新劇人の会は安保体制打破という政治的意図をその運動の主軸に据えた組織だという確認が必要なのです。

西日本アリズム演劇会議は「何を、誰に」という創造の基本問題に於て一致した創造団体の集合体です。それらの創造団体（劇団、グループ）がお互いに力を協せ、批判し合い助け合いながら、それぞれの発展を図るための組織です。そしてアリズム演劇をより深めより拡めていくための組織です。だから東京の新劇人会議なり関西新劇人の会とははっきりその性格を異にしてゐるし、両者がぶつかり合い矛盾し合うということはないのです。事実、私達の劇団、関西芸術座も、そして他のいくつかの劇団もこの両方に加盟していくし、それでいて組織上の混乱もないし矛盾衝突もありません。

東リ演の皆さんにはそう関係のないようなこんな話をするのも、実は東西両リ演の目指す演劇創造とそれとは異なる創造との関連を明確にしていきたいと考えるからです。東リ演も西リ演も、既に何回かの総会で明らかにしていったように、日本の演劇を真に日本の人々と共に創造していくことを根幹において、その運動を進めてきました。そのためには労働者階級の観点に立って、人民大衆の生

活と斗いに更に深く鋭どく入っていく必要を確認しました。そこに、日本の現実を変革しなされていかねばならないでしょうが、新劇人会議なり関西新劇人の会は安保体制打破と組織だといふ確認が必要なのです。

大きな確信と誇りを持っています。しかし、ことを知つてきました。私達は今このことに大きくの仲間達をも持っています。しかし、多くの仲間達をも持っています。その仲間達ともしっかりと腕を組んで行く必要があるのです。その仲間達からも多くのこと学び、又私達も多くのことを与えていかねばなりません。その責任が私達にあるのです。だから私達はこう考えています。関西にも私達はもつと私達自身を成長発展させなければなりません。その創造的力量はまだまだ弱いままです。だから私達はこう考えています。関西にあって、新劇人の会をより強く大きくしていくためにも、西リ演が必要だったし、又事実現在もそうなのだと云えるということです。

いと云えます。

だから、中央に対する地方という意味での地方演劇団体の組織などとは考えていました。専門劇団に対する業余劇団の結集体、などでもありません。専門非専門を問わず演劇創造にはつきりと責任を持つものの集まりです。こばやし君が東リ演を専門劇団の組織ではない、地方劇団の組織だとしているこ

在果していいる役割の大きさを指摘している点ではうなづけますが、規定としては正確でないと思ひます。

次に考へたいことは、東リ演の皆さんにも共に考へてほしいことは、私達の「創造の弱さ」ということです。こばやし君も私達の「創造的な弱さを否定することは出来ない」と云つていて、機関誌に出ている各劇団の報告にもその弱さをどう克服していくかが大きな課題として提出されています。

確かに私達の創造的力量はまだまだ弱いということを痛感します。しかしそれは、人民大衆の要求にまだまだ追いついていない、といふ意味に於て弱いと云うことです。疲れきった歌舞伎、新派に比較して弱いか、そんなことは云えないと思います。私達より多くの技術を身につけそれだけの演劇的年輪を経た劇団より弱いということではないのです。

この点について、野村喬君が、かつてテアトロ誌上で、「新人劇作家への手紙」を一度にわかつて発表して、「芸術的アリティ」こそ大事だということを強調するのはいいのですが、そこから「陸橋」を簡単に失敗作だと断じ、「河」の改稿が政治的バターンによる改悪だなどと評するその考え方について一言触れておく必要があると思ひます。

「陸橋」、「河」は東西両リ演が生み出された貴重な労作だと考へます。仲間ほめで云つてゐるのではありません。「郡上一揆」、「傷だらけの天使」、「タービン工場」等と同

様、それらの作品を生みだしたことを東西り演の誇りと思っています。

勿論それぞれに欠陥を含んでいることは当然だし、その点を批判して、私達の創造的力量を高めることは大事なことに違いありません。しかし、芸術作品として何等の価値もない云いなげな彼の態度はどこから出てきたものでしょうか。「芸術的リアリティ」というもののとらまえ方です。

彼は云っています。「戯曲の世界では、かたちとなつてはじめて作家の思想なり認識なりが表現の荷重にたえるわけです。したがつて、戯曲ではかたちこそ本質的な問題だといえます。」と。「なにをだれに」がいっこうに「かたち」になつてない戯曲がいかに「なんにも、だれにも」与えてこなかつたか、といふことに、もっと気がついてくれと彼は云うのです。彼の考へでは「陸橋」も「河」もかたちになつてないと云うわけです。

「かたち」とは何でしよう。「筋として現われる事件あるいは人物なり時代なりの、論理的・心理的・生理的等々の秩序です」と彼は説明します。話をおわかり易くするために黒沢さんの「傷だらけの天使」と借りてきて考へてみましょう。本誌第二号に矢部秀一さんという方が「観劇メモ」を書いていられます。ぶつかり合いで。そこで作者の思想は生きる現実を変革していくための私達の斗い方

をこの戯曲は強く訴えています。しかし主人公梶浦キクの問題について、矢部さんの云わ

れるように、油谷医師につながる部分と市橋らにつながる部分とがどう彼女の中にあったかという点では描き足りていないと思います。また、コーラスのあり方が梶浦を追いつけています。しかし性急さも指摘の通りです。しかしそういう弱さを含みながらも作者の訴えは強く響いてきます。

この戯曲を批評する場合、作者の訴えは正しい、テーマはいい、しかしまだそれは作者の身体を通った認識に支えられていない、人間が生きていなくて、作者の思想によつて小道具のように使われているだけだ、したがつて芸術的リアリティがない、失敗作だ、といふものがあるとしたらどうでしよう。野村君がそういっているといつてゐるのではありません、そういう批評がどこから必ず出てくると思うから云うのです。

この戯曲は現在の日本の現実を正しく告発しています。「論理的な秩序」があります。「心理的・生理的秩序」もそれに裏うちされはじめで秩序として生きてくるものだと思ひます。だから「かたち」になつているし、芸術的リアリティの高い作品だと思います。創作物といふのは一つの実践です。現実との関連を述べてきましたが、東リ演の皆さん方で検討していくだければ幸いです。そこか

ればそれは作者の思想上の弱点の現われと考えることが出来ます。思想上の問題を抜きにして現実とのぶつかり合いは語れないと考えます。正しい思想を持つということそれ自体

実践だと考えます。

こばやし君が、東リ演は創造を運動の主軸にすえた团体だ、現実認識と世界観の統一の間に終つてはいけない、それを創造に高めなければ存在の意義がない、創造の問題を鋭どく批判しあうのは容易なことではないが、それなくして世界観のみを確かめ合う場ではサロンとならない、と、創造の大事を強調していますが、「部品」、「人間がたたかう時」が高く評価されたのは、「それは創造ぬきの評価であった。」と云いきるのは一寸勇み足ではないでしょうか。私も第二回の一回で「人間がたたかう時」が論議された時、出席しました。その時はじめて、それも時間がなくてサツと台本に眼を通しただけでしたが、作品も知っています。確かにこばやし君の云う通りその欠陥を指摘してといふような評価はなかつたようでしたが、私はやはり評価すべき作品だと思いました。決して「創造ぬき」とはその時の論議からは受けとりませんでした。

以上若干、創造問題にふれながら思想との関連を述べてきましたが、東リ演の皆さん方で検討していくだければ幸いです。そこか

らまた教えていたぐれば有難い次第です。と思ひます。
一度東西合同で研究集会を持つことはどうでしよう。今年の計画の中に入れて考えたい

東リ演の皆さん方の御健斗を祈ります。
一九六六・四・二五

観客のためにとっていいながら

劇団未来 和田澄子

演劇にとって観客の存在がなければ成立しない芸術であることは誰も承知の筈である。「君たちは、どうしてこういう芝居ばかりをやるのか」という冷やかし半分の批評に対しても、「観客がそれを望んでいるから」という答えを、まるで錦の御旗をふりかざす様にムキになつてお返しする。

だが果して、観客の期待している演劇を提供しているのであろうかと、自ら愕然とする時がある。

反合理化斗争をテーマとする自作の舞台を見つける反省をこめてのことである。

合理化政策の非人間性、労働者階級にとっての不利益、それのもたらす諸矛盾、それらをひっくるめて要するに合理化の悪について、これでもかこれでもかと喋りまくり、反合理化斗争の必要性を強調する。

観客は反合理化といふ今日的テーマの重要性については、一応の共感を示している。にも

芝居に、その斗争プログラムの展開を絵解きでやってみせ、演説、説明の大見得を切ってみせることで、これを労働者のための演劇と一人よがりない気持になるのは冷汗なのだ。こんな事を今更、と笑われるかも知れないが、舞台を見る私にとっては鏡に向うガマの心境ではあった。

観客の機能、といつてはおかしいかもしれないが、舞台上の対立点がはつきりしていればわかっていることを、重ねて説明を繰り返すことこそ、観客の批評能力、鑑賞能力を全く無視した作劇態度ではなかつたか。原稿用紙に埋めた台詞だけで何も彼も言い尽そうとしたことであろうか。書いた私としては、これでもまだ合理化の害悪についてまだまだ書き足りぬ思いであったのに。。。やりきれぬ思いで、一分でも早く幕となることをひたすら念じる。

反合理化の姿勢をもつ観客にして、こうもうんざりするとすれば、合理化も仕方がないじゃないかといふ人達も含めた観客の場合はどうなものであろうか。

テーマへの紋切り型の説明、一方的見解の押しつけが責任の大半にあることはほぼ間違いないらしい。

観客とひとくちにいってみても、その要求や期待は多様である。多様な期待の最低線に基調を合わせる愚劣さは最も咎戒しなければならないとしても、例えは反合理化斗争を扱つたなどを改稿の要点として、再度の上演をした。

演出、演技の涙ぐましい努力についてはさておき、脚本についてだけいえば、なるほど上

はこれから仕事の中で埋めていける問題と思いませんが、野村喬氏のあの文章の中には、聞き捨てならぬ、といつては大きさですが、私たちの間でよく討論してみなければならぬ問題が、そしてそれは京浜と私たちの共同の仕事の中でもまだ解決できていない問題につながるものとしてあるようです。

私は、すくなくとも野村氏があの文章の中で書いているような、郡山さんがまるで見当ちがいの演出をやったとか、スライドやタイトルをふんだんに使った方法が舞台をまるつきり知らぬ神経の所産だったとかいう風には考えませんし、むしろあままで神経を使ってやる方法もあるのかと感心して広島でもその真似をしてしまった。ましてや、「平和のための演劇行動でもなんでもなくて、平和運動にたいする演劇好きの活動証明だった」などという書き方は、私たちの運動の中で困った云い方だと思っています。

それはそれとして、私の創作態度の「あまり」を指摘しようとするあまりの憎まれ口と受けとれないこともあります。私があの文章のなかで一番問題だと思うのは次の点です。

「状況につきざる人間存在の選択する意志が劇行為をうみだす、だから戯曲は外からの思想を頑強に拒否する。戯曲それ自身が思想生産しなくてはならない」

戯曲そのものが思想生産してゆくような作品をつくりたいのは私たちにとっても願望で

すが、そのことのために何故「頑強に外から思想を拒否せねばならないのか、そして偽瞞」とうつり、それは私の「セクト的歴史状況につきざる際の作家自身の現実認識の方法とはどんな関係になるのか。野村氏はこの点を次のように説明しています。

「平和運動・原水禁運動を題材にするためには、すぐれて劇作家自身の内発的な平和運動論が確立されねばならぬのは当然だ……こうした志向から、眞に劇行為といえるものがうまれ、現代における戯曲の様式が見出されてくる」

ところで、「すぐれて内発的な平和運動論」というものは、平和運動の伝統と現状に対する、廣島に住む私たちから云えばとりわけ被爆者の要求と斗いに対する厳しく奥深い認識から出発することをかけはなれては存在しないこともまた確かなはずです。△河△の改稿の場合も、その認識が深まってくるにつれて、最初は一般的な情勢解釈の眼から漠然としかうつっていなかつたものが——五〇年問題といふ未曾有の混乱と困難をかかえながら果敢な抵抗を組織し得た広島の共産党组织と労働者階級の姿、全国稀有の現象ともいえる新日本も人民文学も共に斗い得た広島の文化戦線、そしてその底に流れていった爆発的なまでの被爆者の怒り——次第に明瞭にうかびあがってきた訳です。

ところが、野村氏の眼からみると、その結果として改稿にあった部分——五〇年の平和大会の分裂集会・その指導の影響などが改稿で片づけられたのです。

野村氏は五〇年の共産党的分裂という問題である一九五〇年当時の広島の平和運動の困難とを同質のものとみておられるようです。

第七回原水禁世界大会当時から表面にあらわれはじめ九回大会で頂点に達した原水禁運動に対する分裂と攻撃の問題を、野村氏はブルジョアジャーナリズムでもよく使われる「被爆者の要求と斗争に対する厳しく奥深い認識から出発することをかけはなれては存在しない」という表現でしどく簡単に片づけられますが、その「分裂と混乱」とは全く異質の問題である一九五〇年当時の広島の平和運動の困難とを同質のものとみておられるようです。

野村氏は五〇年の共産党的分裂といふ問題を自分の眼でたしかめたこともない勝手な内発的「みかたで、当時の広島の平和運動にそのままではめてしまっている、だからそ

演時間の短縮によって観客を長時間の拷問から解放したものの、重要な形骸は残しながらも、まるで骨ばかりの魚拓を見るようで、ふくよかな肉付きも、壯いの衣も失われて何とも喰いたりぬ舞台になってしまった。再び悔むことしきり、一体どう書けばいいのか、しゃくにさわるばかりである。

今まで新たに原稿に取り組んでいるが、そして意気込みはいろいろあるが、「観客のために」「労働者のために」という旗印をかけながら、その観客に、こんな芝居をやってくれと「頼んだ覚えはない」といわれない脚本を、どうにかして創り出したいものである。

広島から便り

劇団月旺会 土屋 清

東リ演のみなさんお元気でしょうか。

先日、幸運にもへこの武器を敵にわたすな

▽の作者、勝山俊介氏と広島でお会いでき、氏を通じて舞芸小劇場の同作品公演の模様や京浜のへ傷だらけの天使▽の成果、あるいは東京にくつかの新しい仲間の劇団が育つつつある様子などを知ることができました。久し振りにうかがい知ることのできた東の仲間たちの活躍ぶりに大いに力づけられたものです。

東西の交流も、広島にじっとしている限りではここしばらくちょっと遠のいた感じでこれではいけないと思っています。特に、昨年八河▽で京浜の仲間と広島の間で共同の仕事を進めたあとだけに、あいつた生々しいぶつかりあいーその中でたしかめあった貴重な教訓や成果は、もつともっとじっくり整理して発展させる努力をせねばと痛感しています。昨年の十月号でしたか、テアトロ誌上「新人劇作家への手紙」の中で野村喬氏が八河▽のことにふれていましたね。京浜の仲間たちはあれをどう受けとめられたでしょうか。あれを読んだ広島の久保という國鉄演サの男が

すぐに反論らしいものを書いてテアトロに送ったのですがとうとう掲載されなかつたよう

うです。

野村喬氏のあの文章は、東京公演をみてのことでしょうか?

私は、東京公演はみていませんが、川崎でみた限りでは演出にいくつかの疑問を感じた一

しそのことは京浜にも手紙でかきました。又

東京公演の際には、なにしろ世界大会を目前にひかえ緊迫した情勢だっただけに、張り切りすぎて京浜の原水禁運動に対する姿勢がなんだかんだとかみついたりしてしまいました。そのことで広島から行つたこれも国鉄の男が、「土の会」の山村金平さんに「作者のヒステリーだ」としかられたそうです。

あのときは、京浜と広島の間に色んな行き

の思想を頑強に拒否"し"すぐれて内発的な運動論"を確立することになるのか。そんなところからどんな劇行為がうまれ現代における戯曲の様式が見出されてくるのか私にはんでわからぬえんです。

野村氏のあの文章は、どうしたら描写のリアリズムをのりこえ得るか、事件から行為を解放し得るかという、私たちにとってまことにさし迫った重要な課題をとり扱いながら、そして八日本の教育一九六〇年の例の中ではそれが説得的に展開されながら、まことに浅い表面的な歴史と現実にたいする認識方法からへ河Vを分析しているために、氏の使う「劇行為」という言葉にかえって疑問をもたざるを得ない結果におちいっている。このところは私たちが考えてみなければならぬ重要な問題だと思うのです。

野村氏の云われるよう、戯曲のなかに生活的デテールがうまくとり入れられたり、日常的会話がすこしばかり上達したからといって決してそれが前進とはいえない。もっと根本のところで、現実世界を劇世界に移しかえていくそのところをどうしたらしいかで、特に私たちのよなサークル演劇の出身者は悩んでいる。しかしそれも、もとはといえども私たちをゆるがす日々の世界の変動、その中で信じられないほどの人間変革、人間信頼の現象が進行しているその状況が私たちの劇的衝動をかりたてるからでしよう。十年前の運動の尺度ではおしゃることのできない現代

の英雄が、人間信頼の関係が、なにもベトナムまで探しにいかなくても、私たちのすぐまわりの小さな職場の倒産をめぐる斗争のなかで、あるいは広島名産のかきが食えなくなるかかもしれないような地域開発・産業誘致をめぐる斗争の中でも、私たちのすぐまわりだけ日々の変動に身をおいていっしょに躍動しているか。。。専門家について劇作を勉強することも大切ですが、今の私たちにとってはよりそのことが切実な問題になつてきている。一方では専門家といわれる人たちの戯曲のなかで、まことに巧みな劇的世界を構築していくながら、いつたんその底を割つて作家自身と現実世界とのかかわりかたを照らしながらもうまれてきています。けれども、民主主義文学運動の中で沢山でてきつつある小作品やルボルタージュ文学にくらべると(文学とはちがつた困難が劇作にはともなうことなど)まだまだ弱いと思ひます。シユブレヒコールや報告劇の形をとつてみると驚くほどの浅いひよわなもののが露呈されてくる現象になんとしばしばぶつかるとか。割つても割つてもひとつぶひとつぶが強じんな、そして作家自身の深い思考方法とその所産物である劇的 세계가全くひとつものとして密着している現代の作品にはなかなかお目にかかることができません。これは新劇運動のひとつ弱点だとと思うんですね。中国流にいえば葉ばかり繁つていて、うことになるのですか。そしてそんなひ弱さをのりこよきするところから東西両り演のアリズムの克服とか劇行為とかそんなものは

放りだしとしてもいい、私たちはもつともと現実に起つてゐる斗争や現代の英雄たちをストレートに、まともに、正直に観客に伝えられることのできる作風とそいつた作品をつくりだしていく必要があると思うんです。
現にサークル演劇・業余演劇のなかからはたとえ未熟ではあってもそれこそたたかれて兵線のよう、生活と斗争をストレートに反映した作品がでてきたり、現在の東西両り演劇のなかで、まことに巧みな劇的世界を構築していくながら、いつたんその底を割つて作家自身と現実世界とのかかわりかたを照らしながらもうまれてきています。けれども、民主主義文学運動の中で沢山でてきつつある小作品やルボルタージュ文学にくらべると(文学とはちがつた困難が劇作にはともなうことなどを考慮に入れたとしても)まだまだ弱いと思ひます。シユブレヒコールや報告劇の形をとつたものでもいい、できるところからいっそその活動を旺盛にして、そこを背景に力のある人は五年かかるても十年かかるても、本当に強じんな現代の劇様式をみつけだしていけばいい、そういう仕事をしていかないと、専門家の仕事もやせ細つたものになる、とこう考えるのですがいかがなものでしようか。
広島の報告ができるじまいになりそうです。
今年の大好きな特徴として第一にあげられることは、演劇サークル協議会の活動が軌道にのりはじめ文字どおり廣島の演劇運動の母体になりつつあることです。月狂会自体の、去年のへ河V以後とりあげた作品は、十二月の

三好十郎作「獅子」、二・三月の諸井条次作「千鳥太鼓」ですが、いずれも演サ協主催の演劇祭に参加した作品です。演サ協でこれまで毎年二回開いてきた演劇祭も、今年から二・六・十二月と三回になりますし、創作劇がようやく活発にてきそうです。

国鉄演サの、ベトナム派遣看護婦の募集をめぐっておきたある総合病院のできごとを扱った「泥まみれの白衣」。明治初年広島でおきた百姓一揆に題材をもとめた「怒れ武市」。（いずれも三幕もの）全員首切られて二年目を迎えているラジオ中国芸能員労組を中心農村地帯を活発にまわっている劇団木々の会の小作品活動・月旺会の予定している土屋作品「河」の続編にあたる「川底の町」。これまでみられたなかつたことのような情況の底には、過去二回にわたって行つた演サ協の合同公演が強い連帯意識をうみだし、各サークルの創作意欲を刺戟したこと、合理化と思攻撃の中で生き残ってきたサークルが、よやく自力で問題意識を追求しようとする力をたくわえてきたことなどがあるようです。

私たちの二番目の大きな仕事は、月旺会と西リ演の共催ではじめ、今演サ協としての仕事をうつしつつある「働く者の演劇学校」です。今二回目をやっているところですが、ほつほつ成果がではじめています。はじめは矢張り月旺会の研究生制度のような色彩がつよく集まつてくる人たちもそのつもりでできた人が多かったのですが、演劇活動家を育てて広

島全体のサークル活動を活発にしようという意図が段々理解されはじめて、月旺会以外のサークルの人たちも積極的に参加しました。自分の職場でサークルをつくるために入つてくる人たちもてきて、このぶんでいけば、演劇学校を基礎に新しくサークルを育てていこうとする意図もなんとか具体的になつていいのではないかと楽しみにしています。とにかくつづけることが第一でしようが、講師は月旺会や地元の音楽家、舞踊家、それに西リ演から「はぐるま座」「京芸」「関芸」の全面的な協力を得ています。この面で西リ演の専門劇団に負う力はなんといって多く、現在諸井条次氏を中心に初步演劇教育の総合的なカリキュラムを「はぐるま座」で用意しつつあるそうです。期間三ヶ月、週二回、ついでに受講料は月八百円。

＊ 東リ演結成以来、手をとりたいと念願してきました北海道の仲間一北海道演劇団（全道三〇集団の結集体）から連絡があり、六月二十五、二六、二七の三日間、室蘭において一五サークル出演によって、第二回演劇祭が挙行されます。求めにより黒沢議長がパンフレットに祝辞をおくりましたが、何とかしてこの機会に東リ演代表を現地におくりたいと考えています。北海道演劇団の事務局は、室蘭市輪西町二一二一六・劇団大地。

＊ 事務局静芸の骨おりで、「東リ演ニュース」が発行されました。各劇団からの月間報告を毎月五日までにうけ、二〇日発行を確保しようとしています。ニュースの定期刊によつて本誌の性格や役割も明確になるでしょう。全劇団の協力でニュースを守り、そだてていきましょう。東リ演加盟以外のお方でニュース配布希望のむきは、静岡市松富下二八九一・静岡演劇センター内、東リ演事務局へ申しこんでください。

＊ 本誌創刊号、二号の誌代を至急送つて下さい。くどくは云いませんが、油は完全にきりしまで、これはあまりラップを吹かずに筆をおいておきましょう。

（六六年四月）

観客つくりと舞台つくり

一 第三回 山形県労働者演劇祭に参加して一

黒沢参考吉

山形県労働者演劇祭は今年三回目、四月二・三日、六演劇集団の参加出演でひらかれた。演目は次のとおりでした。

- (1) 楠山青年団／野崎民治「こいこく」
- (2) 劇団北／木下順二「彦市ばなし」
- (3) 劇団山形／北杉介「監獄の歌」
- (4) 楠岡土／遠藤吉男「あるエピソード」
- (5) 演研とまくさ／集団創作「雪あかり」
- (6) 仙台小劇場／瀬川竜夫「芽ぶき」

実はこの他に、滝山演研が「結婚の申込」寒河江演劇連盟が創作「冬の季節」袖町の演研ランプが創作「台風」鶴岡の劇団歯車が「火山島」をもって参加する予定が、それぞれ余儀ない事情で不能になつたそうです。

「冬の季節」は、一昨年初の演劇祭での唯一の創作劇を生んで大きい可能性をしめした寒河江の第二部作品であり、「台風」もまた果樹農家のきびしい現状にまづすぐ対応する作者・集団の姿勢を反映した作品であり、長い歴史をもつ鶴岡歯車の出演と共に期待していたので、これらの舞台に接し得なかつたのは大変残念なことでした。

その残念さの中には、私たちの演劇が外か

らの圧迫や悪条件のもとで、不慮の事態を生むということは一応わかつた上で、しかし、外からの条件に抵抗し、観客を直接のよりどころに、集団と舞台の体質を戦斗的にきたえあげていく内側の条件がまだ弱いし、それが弱くてはいけないのだという認識も、充分強靭になつていないととの残念さもふくまれています。

(1)から(3)までの第一日、(4)から(6)までの第二日を通じて、「監獄の歌」と「雪あかり」が、この祭典の背骨をたしかなものにしてい

たという印象は、大部分の観客がうけたものだろうともいます。

楠山の「こいこく」は、演出方針の曖昧さや客席に語りかける古めかしい演技等に、限界があるよう一見みえながら、実は青年団が創作「台風」を私は「あるエピソード」にりかかった舞台を私は「あるエピソード」に演劇の鎖国状態をさまざまと示しており、舞台をつくるよろこびの次元を高めるためには、開鎖された集団間係そのものにわけ入っていく必要を教えてくれます。フリをする演技

がいいか悪いかなどといふ論議より、舞台の世界を構築する創造の作業が、本来ど の甘ったれが過ぎるといふものです。創造者

な方策がいそがれるようです。

同様のことは「彦市ばなし」にも云えるのですが、いわば市民劇团的な要素のつよい北にとつて、又その中でもおそらくリーダー格であろう練達した出演者たちにとって、問題は橋山より一層複雑におもえます。芝居のツボを得、どこを強調すれば観客がよろこぶかを承知しきった北の人々は、あまりな客席へのサーカイスのために、創る側のよろこびを見失っています。ある意味で格段の差がある筈の「こいこく」の舞台が、雑多な既製品のこまぎれ演技の中で、しかし閃めかせた手垢のつかない人間の材質みたいなものに、北の仲間が気付いてくれるかどうか。「彦市ばなし」に感じた不潔さは、けっして衣裳や小道具の責任ではなく、客席への一種の媚びか

のがわに、血のでるようを探求がありもしないのに、いたずらに難解を身に鎧つて何かをある如く錯覚させるといった前衛ごっこは、演劇と観客を冒涜するだけでなく、士という可能性にみちた集団を腐蝕するおそれがあります。ある種の公式主義とのたたかいを、別種の公式主義で果たすことはできません。どんな公式主義も芸術とは無縁ですから。

「監樓の歌」を生んだ劇団山形は、仙台小劇場が仙台でそうであるように、山形の中心劇団であることの課題にしています。それは一口で云って、自分たちの拠点と人民に演劇集団としての責任をもつ、ということです。そして、初めての創造である「監樓の歌」の舞台は、劇団山形がその課題をはたすべき改められ、松井演出もこのたたかいを、村役井上君のたしかな内容把握にささえられた演技は、それぞれのキヤラクターをちりばめた農民群とないあって、舞台の緊張をつくりだした、といえます。

勿論この秋、相沢嘉久治氏の新作で創立公演を開幕しようとする劇団山形が、今から鍛えあげなければならぬ体質上の問題は、たとえば多くの演技者のもの云いの不確かさ、く必要があります。

体の固さといったことに限ってみても山積していそうです。しかし、この劇団が先にのべた課題を「監樓の歌」に託して斗つた中からは、それらを発展させていく糸口がはつきり見えました。

男性ばかりの全通の職場と、女性ばかりの團創作をまとめるには内外各種のつきあげが至誠堂病院の結束で生まれたこまくさが、集団創作をまとめるには内外各種のつきあげがあつた訳ですが、ねばりぬいて最初の作品を作らしめたのは、やはり労働者サークルの不屈さがうかがえて、たのもしいことです。ひとりの若い看護婦が、なかまのささえと斗争の中で自分を変革させるという主題でかかれた「雪あかり」は、単純卒直な戯曲です。

友情出演した仙台小劇場の「芽ぶき」の舞

台を、その例証に借りるのは必ずしも妥当ではないかもしれません。しかし、終つての交

観ることのできた「芽ぶき」の世界が、こちらに切りこむアリティの点で一步を譲つていたのは事実で、プロセニアルには紗がかかつたような隔絶があり、形象を輪郭のはつきりしない鈍いものにしていたのは何なのかを共通の問題として考えてみたいとおもいました。

こまくさの、たとえばヨシコをやつた三宅君の少々乱暴なほどの主題そのものの肉迫と、仙台小劇場で美津子をやつた堀川君の、小さいとしても信じうる触感を土台に役の全像にのぼりつめようとするつくり方の接点に

、私たちの演技が求められる「おぼろげにおみでたことです。三宅君の中で、役を生きる」の演劇行動そのものが「サークルの実践をふつづぐみ支配権力にたちむかうものとして、また庄屋りかえり、一層團結しよう」という軸にまつすぐつらぬかれていて、訴えたい中味が鮮明にあることの大切さを教えてくれるのである。

「雪あかり」の場合も、内容を更に明確に伝達するために、マスターしなければならない技術の諸問題はでてきます。しかし、それは分離したり対立したりする関係ではなく、有機的なそっくりした関連の中でつかんでしまったのです。しかし、それが能だったのではないでしようか。

二日間の演劇祭を、そのひらいた交流を通して、こうした学びあい考え方で、もう一つ深めた

労者演劇サークル協議会のこれから活動に
ゆだねられています。

演サ協にたいしての私の注文は、観客との
関係を強めるための方策を真剣に考えてほし
いということです。今回の観客数が正確に何
名であつたか、まだ承知していませんが、回
をおつて増大しているのは心強いことです。

ただ、二日間とも観客をふくめた合評会を会
場でひらく条件はあつたのに、それを逃がし
てしまつたのは、単に惜しいというより協議
会としての着目に欠けるところがありはしな
かったか。この辺が、かきだしでも触れたよ
うに、一旦決定発表した出演をサークル側の
事情だけで中止したり、そのことの陳弁が当
該サークルから行われなかつたり、という辺

に観客つくりと舞台つくりの結節を若干乱雑
に考えているのではないか」という危惧があ
ります。観客との関係の中でサークル活動を
・仕事とおさえる責任のとりよう、ゆるい
なりの統一点をえる必要が山形演サ協には
あるとおもうのです。

また東リ演としては、東北プロツクのゼミ
ナールが、何よりもまつ先に、創造の質をた
かめたい一切実な諸サークルの要求を的確に
つかんで、それにこたえる方法を生みだす目
的を明示して、ひらかれてほしいと考えます
。ここまで手さぐりでやつてきたが、この
先どうやつたら伸びられるのか、それがつか
みたい」という仲間の声には、なんとかして
こたえなければなりません。そのためには、

まず、東北プロツクゼミの実施で東北全体
の具体的な要求が集約されること。その中殊
の仲間をはじめ、東北各県の仲間の協力が得
られるでしようし、仙台小劇場や弘前演劇研
究会の公開稽古一試演も考えられるし、他ブ
ロツクから演出者演技者を派遣することも可
能でしよう。

じめには原稿を出すよにとか、だんだんこ
わくなり尻込みしているうち、とうとう巻末
論文になつたとります。

黒沢さんが、自分の所属する劇団以外の大
きな劇場で、身の緊る思いなのですが、それだ
けで土の会が上演することになつた、はや
て物語一旧作の全面改稿一一の筆をとり始め
たのが一月、今もつて、充分に納得のゆく上
うに直せずに、演出をすすめていく状態です。
自分の芝居が思うよに書けず、そのことば

創造を軸にした連帶をめぐつて

山村 金平

黒沢さんに、秋に上演するための戯曲の執
筆をお願いしています。二月のある日の打合
せの時、東リ演の現状について、若干感想を

云つた所、機関誌にのせるから原稿にせよと
のことでした。軽く考えて受けたら、創刊
号のこばやしさん、二号の欣太さんから引き
つぐのだとか、巻頭論文だとか、その上五月
には規定通り三号を発行したいから、四月は

稿を出さないで、戯曲だけ受取るわけには
……。

私事にわたり恐縮ですが、五月から六月に
かけて土の会が上演することになつた、はや
て物語一旧作の全面改稿一一の筆をとり始め
たのが一月、今もつて、充分に納得のゆく上
うに直せずに、演出をすすめていく状態です。
自分の芝居が思うよに書けず、そのことば

かり頭にあると、どうも創造を軸とした……などと書く心のめどりはありません。しかし、この原稿も書き、三号がきちんと発行されると、まず、わたくしの中にある創造を軸にした連帯の出発なのだろうと思います。

はじめに黒沢さんからテーマを出された時、「創造を通しての連帯」という風になんとなく思っていました。「通して」では意味が漠然としているし、それは少なくとも、東リ演出発の時すでに果たされていることだと思います。

い、「創造における連帯」としなければと思いつらしてしまった。しかし、「おける」いめぐらしてしまった。云うのは、何が何でも創造と云うことで、きわめて意味が限定され、東リ演結成のよびかけにある「創造上の流派や手法としてな

く、歴史と国民から付託された私たちの斗い、芸術思想としてのアリズム演劇の認識と追求についての統一」と云う、今後東リ演が具体的に解明しなければならない問題へ、直接受け答を書かねばならず、荷が重いと迷っていたら、表題のように「創造を軸にした」と云う題で、これなら、意味もはつきりしていい、しかも東リ演の現状をお考るのではなくて、筆をとり始めました。

1 まず四劇団が、欣太さんの言葉によれば、その地域と観客に対しても責任をもつて活動している劇団として、一定の成果をあげていたこと。

2 相互交流の中で、お互いの成長過程の類似の発見、そこから、相手から学ぼうとして、しかも劇団ぐるみの姿勢をとったこと。

3 舞台創造、上演規模等、いわゆる中小専門劇団にはひけをとらぬという自信と実績が、主觀的な面が強いとしても、事実としては限らず、精神的な面も含めて、運動を進めるための具体的なメリットがないと永続

きをしないものだと、つくづく思します。

では、東リ演が結成された時のメリットは一体、何だったのでしょうか。わたくしの考えでは、京浜、静芸、名演、はぐるまと云う四つの地方大劇団が一定の力をもち、その力の相互確認を通して、いわゆる専門劇団とは区別して、自分の力を主体的にも、客観的にも社会的な存在として確定しようとするこにあつたと思います。

そして、いろいろと問題は残したとしても、その成果はかちとられたと思います。

まず、その成果を支えた条件から考えてみます。わたくしの意見は、この四劇団が結集して、いよいよ東リ演が結成される段階で、五番目として近づいたのが、どう云う風の吹きまわしか、土の会であったと云う所から見たものです。

専門劇団である、関西芸術座、山口のはぐるま座が中心となって、東リ演より一年早く西リ演が結成され、いわゆる地方劇団としての旗色がはっきりしたこと。

以上のことの裏を返せば、それが東京の演劇状況の混迷と云うことになるかも知れません。一九五九年のテアトロ誌上で、宮本研さんが、「この停滞をどう破るか」と云う当時の東京の職場演劇の状況をくわしく書いた好論文があります。また、六一年には同誌に、菅井、高山、宮本、山田四氏による、「サクル演劇発展のために」と云うアピールがあります。これら等の傾向は、崩壊しようとする動きが、高山、宮本、山田四氏によると云うことで、四劇団の交流実績とは、ずいぶんかけはなれていたのではないかでしょうか。また、宮本論文では、集団の指導者間の交流が中心で行われた劇団ぐるみのセミナーとが、中心で行われた劇団ぐるみのセミナーとも異質です。

、特定の職場によらない、地域劇団が徐々に力をたくわえ、成長して、ついに、東リ演結成と云うことになつたのではないでしょうか。また、この頃は在京中小専門劇団が、ようやくその力を定着しはじめ、東京労演は今ほどには中小の劇団に力をさかず、いわゆる三大劇団の時代でした。また、大劇団がマスコミに頼らずに自立て劇団を維持する傾向が、今まで連帯とはならず、国民文化会議の集まりで、木下さんが、創造的に強くなるよう度々云つた時です。

だから、中央の演劇状況批判と云う形で、地方の自立劇団が結集したと云うこと、しかもそれが、創造を通して結集したことは、それなりの成行きと大きな意味を持つていたと思ひます。

一九六一、二年頃のわたくしは、ほかの演劇サークル不信で、土の会がなんとしても頑張らねばと思いつめていた時で、わたくしの認識の充分正しくないことを指摘し、静芸や京浜の存在を教えてくれたのは、相沢嘉久治さんでした。鬼の世界にでも飛込むほどに、おつかなびっくり、静芸をたずねた時から、たしかに、わたくしの中で大きくひらけたものがあります。それは、あれだけ立派な集団が、実は土の会とあまりちがわないと云う親近感が第一、(たいしたことはないと云う意味でなく)次が、東京の状況とのあまりもの違い、しかし、この違いこそが、これから東

しかし、そうなると一体、土の会のような演劇サークルには、とてもじやないが、参加の資格はないと思ひ、そしてこの気持は、今もって依然としないまま、東リ演へ加盟しているわけです。こちらの主觀として、自分の地域、自分の観客に責任をもちたいと云う願いです。

東リ演が、東京の専門劇団をどう扱うかと云うのは、東リ演の性格を決定する上で大きな問題だと思います。発足当時、すでに、専門劇団と手を結び、改めて東京を見直そうとする姿勢は、うぬぼれになるかも知れませんが、東リ演が、東京をどう扱うかと云うことで、ひとつの手がかりにはなつたと思ひます。それは、土の会が地方の劇団との交流をバネにしながら、東京の演劇サークルへ近づき、やがて、東京働くものの演劇祭実行委員会の組織へ入ってゆく過程で証明されていると思います。

しかし、それは緒口にすぎません。はぐるま十年のまとめにあるように、「……東京の劇団は、大沙漠東京といわれる大都會で、一切の運動の条件とエネルギーを吸いとられていました。……今日の演劇の危機なり、文化的危機は地方劇団である私たちによって守られなければならぬ条件をもつてゐるのです」と云う風に、中央と地方と云う対比を一度図式化し、それをさらに否定することで、自分の劇団の自立性を抱えるバターンは、東リ演加盟の劇団に多かれ、少なかれ共通していま

京で運動を進める鍵であることの發見でした。

が創造や運動のすすめ方を媒体としてつながってゆく方向に進んだと見て、さしつかえないでしよう。

られないのが現在の文化状況なのでしよう。

そうすると、一体、東京で運動を進めなければならぬ自立劇団は、どうしたらよいのでしようか。形式論から云えば絶望ということになります。これに対する東リ演としての考え方の方は余りはつきりしていないよう思いました。

土の会、舞芸小、労芸が東リ演へ加盟した過程は、皮肉なことに、全く相手を知らないまま、東リ演を媒介にして初めて相手を見たと云う風です。そして、夫々に東京の中での地方化といふことで、大沙漠に足をとられつつ、思い思いのコースを歩いてゆくと云うのが現状のようです。

夫々、東京の演劇状況の小さな部分となることは出来ると思います。しかし各地方の劇団が現在果たしつつあり、また果たしてゆけると云う中心的存在と云うものではありません。単に否定的に云うのではありませんが、夫々がつくり出す小さな演劇状況を積み上げを行った時、トータルとして、東京の演劇状況となるイメージが出てくると考えるのか、あるいは、東京の場合には、各地方東リ演加盟の劇団がその地方の中心的な状況をつくり出しますと云うのとは、全く別に考えるのか、みなさんの意見をきいて見たいと思います。

この点に関しては、目下、京浜が東京公演を定着させようとしている仕事——幸いなことに、大変間近かに見てきますので——が京浜なりの解答をつくってくれると思い、興味

深々です。わたくし自身、京浜に協力する立

場ではありますが、東京と云う大沙漠に京浜がエネルギーを吸いとられるのか、あるいは新しいものをきりひらくのか、少なくとも東京における働くものの演劇運動の展開に大きな力を及ぼすはずです。

はぐるまと民芸、静芸と東京芸術座の関わり、すべて大変に興味があります。

いずれの場合にも問題となっているのは、劇団の運営がどうとか、歴史がどうとかではなく、その劇団が生み出したもの、舞台とかレパートリであり、東京の側から云えば、いくつか認めるものがあると云うことにもなるのかも知れませんが、逆に、東リ演側では、東

リ演の成果と云うことになるのでしょうか。

東リ演が結成された当時は、上に書いた四劇団の相互観劇、相互交流と云う、云つて見れば「創造を通した連帯」が大きな軸であると思います。東リ演が結成されることで、この交流は一段と深まり、茂くなつたようにも見えますが、他の多くの劇団が入ってくることと、四劇団の結集と云う点では、拡散して、薄められたと云う感じがします。

別なことばで云えば、東リ演結成と云うことは、東リ演の結成の時期、推進役は静芸の欣太さんであり、それは静芸の劇団の力でも支えられていました。事務局劇団のはずの黒沢さんが、引きずられる位のエネルギーでした。しかし、東リ演が結成されて以後、欣太さん、ならびに静芸の東リ演への集中は急速に弱まって行くように思えました。そして

、東リ演でなければ夜も昼も明けぬのが京浜であり、黒沢さんのようです。名演やはぐるまはこうした傾向に一定の距離をおいて、着実に中部プロツクとしての活動を続けているようです。どうして、このように四者の結集が、以前程の濃度をもつて見えないのか、不思議な気持ちもします。以前の濃度と云うのは、あるいはわたくしの思いすぎでしょか。東リ演に濃厚にありました。しかし、創造において、相手の場にふみこんで、と云うことは逆に自分の場と、徹底的につき合わせて——もうひとつ云えば——自分が変るか、相手を変えるかと云う対決のしかたで、交流し、そこから連帯を発見する作業の過程は、部分的には始まっていますが、いまだ東リ演での活動の主要プログラムとはなっていないよう思います。

東勤演の演劇祭が始まった頃、歯に衣きせず、相手のサークルを批評することが出来る劇団が創造を軸にして、夫々の地域で力強く回転し始め、余ったエネルギーが、東京の演劇状況と関わり始めたと云うことでしようか。そして、夫々の劇団が創造を軸にして、四劇団が夫々と云うことなのでしょうか。そして、夫々の劇団が創造を軸にして、夫々の地域で力強く回転し始め、余ったエネルギーが、東京の演劇状況と関わり始めたと云うことでしようか。かどうかで、激論を斗わせたことがあります。——つまり相手のサークルが脱落する心配

で——相手のサークルの痛みを自分の痛みとすることが出来るなら、ためらわずに云えるはずだし、またその時は決して悪いことは知らないだろうと云う、まさに、東リ演の中でも知ったことが、わたくしの考えでした。その時は、東効演はそうはなりませんでしたが、少しづつ、しかし着実にそのような状況をつくり出そうとしています。東京と云う所は、東リ演より、数歩もおくれており、まさに協議会なのですが、今の所、それ以外にはないようです。

しかし、東リ演は、少なくとも四劇団については、相手の痛みを痛みとするだけでなく、相手の痛みへ手を触れて見る勇気も必要なではないでしょうか。その点に関して、たとえばわたくしが、夫々の劇団から聞く話と、各劇団同志の意志の疎通のさせ方に、ニュアンスの相異があるように思われます。このように云うと、何か他人事のように聞こえますので、わたくしが京浜協同劇団とどう関わるべきかと云う点、特に、それが創造を軸とした場合について考えて見ます。わたくしは、京浜に対し、東効演参加を熱心にすすめました。京浜にして見れば、それが土の会との連帯ということで、特に、わたくしに对する励ましを沢山してくれました。東効演参加が、京浜の東京公演の足がかりであり、またそれが京浜を変え、東京を変えると云う、自分が東京で運動を進める上で、ま

たそれが東リ演での活動であると云うことでの認識でした。

京浜が東効演で「果ばなれ」「カンカラ広場に集まれ」を上演し、東京にもいいお客様がいることを発見した時、それはわたくしの喜びでもあったのですが、そのことは発見する以前の京浜側の、東京のお客さんをそのままに獨めなかつた認識の甘さへの批判を伴つたものでした。発見した時は、発見出来た以前の主体の弱さへの反省が必要ではないのでしょうか。さもないと、単に試行錯誤になります。

京浜の東京公演の定着化により、この弱さは克服されると思いますし、だからこそ一層京浜の東京公演に協力したい。直接、創造上で交錯したわけではないのですが、わたくしにとっては、京浜の東京公演は、単に京浜だけに止まらない、東京で、東リ演の演劇運動を進める上の実験の場です。

これは、今度の東効演行動N°3、真土村一揆上演と発展し、今では京浜はもう川向うの劇団ではなくなる所まで来ました。そして京浜が、東京を単に敵視するのなく、また東京効演を単に批判の対象と/orするのではなく、交換なければならぬものの、また変わってゆくものとしてとらえる所まで来たと思います。

以上のこととは大きな意味で、創造を軸として廻っているのだと思いますが、直接的な問題では、初めに書いた、黒沢さんに戯曲の執筆依頼が、果たして真に創造を軸とした連帯

を生むかどうかの一里塚でしょう。

「傷だらけの天使」を観た時、これは是非自分で演出して見たいと思いました。しかし

、戯曲のスタイルと京浜の上演スタイルとの間に異和感がなかつたとしたら、演出意欲はないそられなかつたでしょう。黒沢作品に対する京浜の取組み方のそれ、そこで、もしもれようにはじめなかつた認識の甘さへの批判を伴つたものでした。発見した時は、発見出来た所でやつて見たらと云うことになります。しかし、いざ自分の所で上演するとなると、相手の舞台を見て、どうこう批評すると云う気持は全くなくなります。口で云つても、実際に自分の所で云つたようにならなければと思うと、言葉で云うことが空々しくなりました。こゝちで演るからには、演つたことが京浜一に対するはねかえてゆくものが必要なんだな

、——思い切って云えど、それで京浜が變る——かどうか——そこで初めて、「創造を軸にした連帯」が生まれるかどうかが決まるのだと思ひます。上演許可を申込んだ矢先、京浜による東京公演が決まり、「傷だらけの天使」の土の会上演は当分流れましたが、その時、ふと黒沢さんからもれた言葉をとらえて、むしろ、こちらからテーマを出す位にして、執筆をお願いしました。

黒沢さん程の経験をつんだ作家に、図々しく戯曲を書いてくれなどと云えるのも、東リ演のおかけだと思いますが、今となつては、京浜の作家であると同時に、土の会の作家でもあると思つています。少なくとも、土の会の作家として、今まで京浜には書かなかつたも

のを書いてもらい、そのことによって、もうほんともしましてが、京浜が黒沢さんを新しく発見しなふすとしたら、その時こそ「創造を軸とした連帯」が京浜と土の会との間で生まれるのではないか、今度駄目でも、この次は……と長い長い時間をかけて。
以上、ながながと、とりとめなく書きながらましたが、現在の東リ演は、まさに「創造を軸にした連帯」をつくらねばならぬのだと思いますが、それは意図があつても、実際にはそうはならないことも覚悟した上で、具体的なプログラムをつくらねばならぬのでしょ

く、東リ演の性格を具体的に規定する問題として再考する必要があるのではないかと思うのです。そして、このことは、東京の演劇状況をどう見るか、就中、専門劇団との関係へとつながってゆく問題だと思います。

わたくしの考え方は、充分に固まつたものではありませんでしたが、おおよそ、書きならべたつもりです。

スポーツライト

* 東リ演総会と合同演劇セミナーの開催については、事務局より別に連絡しますが、日程は次のように決まっているので、各劇団とも行動予定にくり入れておいてください。

- 82 -

各プロジェクトでは現在、プロジェクト単位のセミ開催を企画して、その内容を合同セミにて集中し、同時にプロジェクト内の未加盟演劇団体をさしつけてくるための努力をはじめています。セミ、総会の会場は、本年も静芸の稽古場である静岡演劇音楽センターです。

また、その前提には、夫々が抜きさしの弱いもの同志が協力すると云うのとは異なるでしよう。しかし、だからこそ、実際の日程では、相互の食達を起こすともあり得るわけで、それを克服する道筋を、具体的に解いてほしいと思うのです。現在の段階では、とりたてて問題にするようなこともなく、わたくしがのべたことも主観にすぎない部分も多かつたかも知れませんが、創立三年目、当初の四劇団が出発をふりかえって、相互の連帯についての方向づけを改めて点検する必要を感じています。

その上で、新しく加盟した集団との関連が入りたい所はどこでも入れるのか、それとも当初の一県一劇団と、活動実績に重点をおくのか、これは、どちらがいいと云うのでな

発行・機関誌「東リ演」刊行所

川崎市上平間1275 京浜協同劇団内
電話 川崎 (044) ② 8815 番

印刷・クロカワ印刷所

川崎市中丸子582番地
電話 中原 (044) ② 6094 番

日土的演劇の発展と向上のために

— 第6回演劇合同ゼミナール開催のよびかけ —

1. うつたえ

吾国の演劇の現状を見たとき、良心的な進歩的な新劇を始めとして、全国の地域、職場に依拠する自主的な民主的な演劇は「九牛の一毛」にも似た少さであることに気付きます。

吾国の大半の人々は日常これらの演劇にふれたこともなければ、その存在さえ知らないのが実情ではないでしょうか。一方、全国津々浦々の人里離れた山村、漁村に至るまで、奥深く浸透し、朝起きた時から夜眠りに就くまで、誰でもおでこ目に耳に飛び込んで来るものに、テレビ・ラジオがあります。ついに吾国のテレビの視聴率は、世界第2位になつたと云われております。

マス・コミの筆頭であるテレビを先頭に、ラジオ、映画、商業演劇が流すものは、あまたの草団主義番組であり、人間不信とあきらめムードをまきちらし、小さな家庭の中にだけ目を向けさせるホームドラマであり、エロものであり、面白に考え真実を追求しようとするものを嘲笑し、孤立化させ、調和的セックタ的な感覚を刺激しくする、喜劇、シヨーの類い。。。。。加うるに大衆の民族的感情や要求を悪用し、ねじまげる日本民謡の形がい化、わい少化番組、消費ブームをもあり、便乗化する植民地化番組の洪水。。。それらの中に不断注意深く注入されている、反共思想・反共攻撃等々。文化に対する政治的、思想的な意図と支配は、誠に惡質な反民族的、反民主主義的なものであることは既に明らかです。これらの反動的文化支配をなすままに放置していく良いわけはありません。

これらの文化支配は、小選挙区制を強行し、ベトナム戦争を狂暴に遂行しようとするための最も大衆的日常的基盤であり、反動陣営が力を入れている最も大切な分野の一つであることは申すまでもありません。

私たちが、現在このような緊急な情勢の下で、広範な人民大衆とともに、力を尽して反動陣営とたたかっていくことは重要なことです。とりわけ大切なことは、私たちの演劇の普及創造の力をつよめることです。文化の戰線におけるたたかいを、情勢が重大であり、緊急であればあるほど、力を抜めねばならないものです。このことを私たちがやらなくて外の誰がやるというのでしょうか。そして困難ではあつても緊急に全国いずれの地方、職場にも存在するはづの演劇に対する要求に基いた、演劇の芽を発展させることに努力をしなければなりません。すなわち、職場、地域の切実な生活とたたかいに根ざした、大衆と密着した自主的な演劇の普及創造の集団サークルが盛んに興る、この意義ははかり知れない程大きいのです。

私たちは「自主的な演劇よ興れ」という希いを実現するために必要なあらゆる活動を強力におこし進めたいと思います。この趣旨こそ、私たち東リ演劇の基本的任務の一つです。私たちの演劇運動の質量共の発展向上は「自主的な演劇を職場や地域に盛んに興す」ためにこそ重要だと云えるのです。自主的な演劇を盛んにする為の、一つのたてとして、私たちは六たび夏期ゼミナールを開催したいと思います。東リ演内外の全国の仲間たちが、私たちの趣旨に賛同され、一人でも多く才六回ゼミオールに結集されることを、全国の仲間たちに訴えます。

2. ゼミナールの内容

1. 黒沢泰吉作「糸ばなれ」一幕を東リ演劇下二劇団による二種のモデル上演を中心に、作品と上演の思想を掘り下げ、形象化の問題点、舞台上の問題点を追究し、参加者の今後の創造上の問題点を明らかにする。

過去五回のゼミナールは、組織上の問題、創造以前の基礎的な問題にしばられていた。それはそれなりに一定の成果は取めて来たが、それだけでは物足りないという声が相当上つてきていたし、今回は皆が一緒に創造上の問題点を具体的に追求し明らかにして行けるような内容を加えて、ゼミナールの意義をより高めることに意見が一致した。

参加者、参加団体は、それぞれ台本をよく読むだけでなく、演出、演技、各スタッフは具体的なプランを準備する。なるべく、上演までの準備をしてゼミナールに臨むことが望ましい。このようを積極的な準備があつて始めてゼミナールを創造的に成功させることができる。その実施細目は当日に発表する。

2. 創造ゼミナールに加えて、矢張り重要なのはこの様な機会を通じて、組織問題、財政活動等について交流することの意義です。自主的な演劇の普及向上のため多くの問題についても、討論し、経験を交流し、困難を解決し、団結するように努力することは大切です。

① 職場や家庭との矛盾、婦人としての困難な立場をどう打開するかを、基調報告を中心に自由に討論し、これらに対する考え方を固めて行く。

② その他の緊急な問題、当面する問題についての交流、討論。

主催 東日本リアリズム演劇会議

後援 西日本リアリズム演劇会議

16

第6回合同ゼミナール申込書

氏名	住所	職業
劇団名	団住 体所	電話
性別	男 女	年令 才
演年 劇令	期生 1年未満 1年 2年 3年 4年 5年 5年以上 10年以上 15年以上 20年以上	

必要の所を○でかこむ

參 加 要 項

期 日	1966年8月20日(土) 21日(日)
会 場	静岡市井宮公民館(全体集会・分散会)
	静岡市井宮町205 電なし
	静岡演劇音楽センター(分散会・事務局)
	静岡市昭府町田(松原下) 289の1
	電. 0542(54) 7637
会 費	宿泊費(1泊2食) 参加費共、約600円。旅費は各自負担
宿 泊	演劇音楽センター、分宿その他。
申込期日	8月10日まで(必着)
申込方法	団体の場合は一括し、それぞれ所定の申込書で直接東リ演事務局に申込む。
申 込 先	静岡市昭府町289の1 電 0542(54) 7637 静岡演劇音楽センター内 東リ演事務局 夏リ演事務局

注 意 ① オ 1日目全体集会は井宮公民館で開催するので直接集合して下さい。

② 当日受付は、20日10時までは井宮公民館、以降は演劇音楽センター内事務局。電話受付は、すべての時間に事務局で受け付けます。

③ 討議資料（公開稽古上演プラン、基調報告、活動報告、分散会の問題提起、劇団活動報告等掲載）は、樹海紙「東リ演」ゼミナール、総会特集号です。

各劇団には、8月10日頃から刊行所より直送します。希望の方（東リ演加盟以外）は、ゼミナール参加申込書に書き添えて下さい。

プログラム

(多少の変更の場合あり)

20日(土)

6:00~	受付開始(集合)
7:00~	全体集会
~7:30	開会(挨拶・紹介・説明)
~9:00	各参加団体によるブトラクション
~10:30	公開種:古
10:30~12:00	交流会
12:00	消

21日(日)

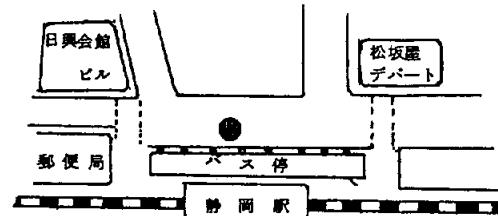
7:30	起 床
~ 9:00	基礎訓練・朝食
9:00~12:00	才1回分散会
12:00~ 1:00	昼 食
1:00~ 3:00	才2回分散会
3:00~ 5:00	全体集会(分散会報告・総括・閉会)

分散会は、演出、舞台美術、経営と演劇、年令別に
①②③の6分散会を設定します

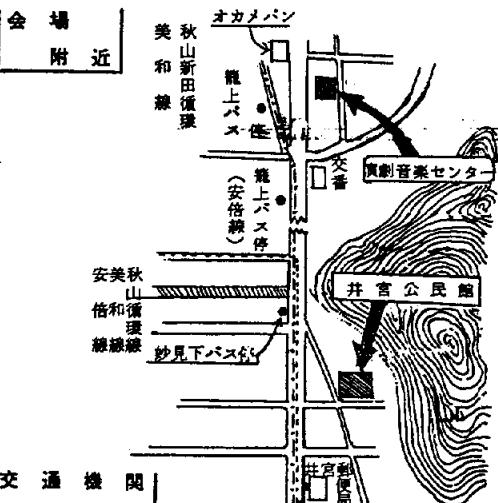
公開講座の使用教材は「燃えあれ！」と題した教科書です。

(予定) 台本はアトロ 237号(63年7月号)に掲載。各劇団で脚本を下さ。

静岡駅前のバス停



会場界



関機通交

- ◎ 安倍線、美和線、秋山新田線の何行きでもすべて可。
- ◎ 演劇センターに行く時は籠上（カゴウエ）バス停で下車。
- ◎ 井の宮（キノミヤ）公民館に行く場合は、妙見下（ミヨウケンシタ）バス停で下車。
- ◎ 北部循環は、井の宮公民館に行く時のみ。井宮局前バス停で下車。タクシー 距離と会場までの約200円

宿泊食事申込書 (総会兼用)	日区分	希望印金額		セミナー運営についての希望 セミナー・特集号購入希望 隔月刊機関紙「東リ演」購読申込	
		夕			
		20	泊		
		朝			
		21	昼		
		夕			
		泊			
		朝			
		22	昼		
		夕			
分担金		計		部	